



令和5年度指定

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム

構築支援事業

個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業

研究報告書・第3年次(令和7年度)

構想名

「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク



令和8年3月

長野県教育委員会

目次

目次		1
はじめに	学びの改革支援課長	2
1 事業の概要	1 構想計画書(概要)	4
	2 令和7年度事業実施計画	5
	3 令和7年度事業完了報告書	12
	4 成果概念図	24
2 実施報告	1 オンデマンド配信による学習機会の創出	26
	2 信州WWLグローバル講座の取組	28
	3 オンライン授業等による学習機会の創出	35
	4 提供校5校の取組	39
	5 信州 WWL ルーブリックに基づく 生徒アンケート分析	50
3	1 令和7年度事業関係委員名簿	68
運営指導委員会	2 第1回運営指導委員会議事録	69
検証会議の記録	3 第2回運営指導委員会議事録	80
	4 検証会議議事録	89
信州 WWL コンソーシアム AL ネットワーク参画校		92

令和7年度WWLコンソーシアム構築支援事業（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）研究開発報告書に寄せて

学びの改革支援課長 一色保典

将来、世界で活躍できるイノベーティブなグローバルリーダーの育成を目指し、本県では令和2年度より、拠点校を中心とした先進的なカリキュラム開発と、県内の高校をつなぐWWLコンソーシアム構築支援事業（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）に取り組んでまいりました。本書は、3年間にわたる指定事業の最終年度として、これまでの研究成果を収録したものです。

本事業の目的は、県内の高校と企業、NPO、学術機関等の協働機関によるネットワークを構築し、単独校では得ることのできない高度で多様な学びを、県内の希望するすべての高校生に届ける環境、すなわちWWLコンソーシアムを構築することにあります。この趣旨のもと、これまで県内17校にご参画いただき、各校の特色ある学びを積極的に県内の高校へ提供していただきました。学校の枠を超えた生徒同士の学びの場が数多く生まれたことは、本事業における最大の成果であり、関係の皆様のご尽力に、改めて深く感謝申し上げます。

また、本事業は、本県が掲げる「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実による、個人と社会のウェルビーイングの実現を具体化する取組でもありました。コロナ禍を経て急速に整備が進んだ学校のICT環境を活用し、地理的条件や学校規模、開講科目等の制約を超えて学びを共有する「学びのプラットフォーム」の再構築に挑戦した3年間であったといえます。

一方で、こうした取組を進める中で、今後の事業展開や持続可能な仕組みづくりに向けた課題も出てきました。運営指導委員やカリキュラムアドバイザーの皆様からは、専門的かつ温かいご指導・ご助言をいただきました。また、参画校の皆様には、実施機関とともに本県が目指す「探究を核とした学校づくり」の推進にご尽力をいただきました。ここまでの取組を通じて得られた知見は、本県における学びの改革や、これからの高校教育の在り方を検討する上での貴重な示唆となったと感じています。

本事業で築かれた人と人とのつながり、学校と学校との連携は、事業終了後も本県の教育を支える大きな財産です。本書に収録された実践と知見が、今後の教育活動に広く生かされ、生徒一人ひとりの「好き」「楽しい」「なぜ」を起点とした探究的な学びのさらなる充実につながることを心より願っております。

末筆になりましたが、3年間にわたり本事業を支えてくださいました運営指導委員、カリキュラムアドバイザー、検証委員の皆様、そして各校・協働機関の皆様に、心より感謝申し上げます。今後とも、本県の教育の充実・発展に向け、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。巻頭の挨拶といたします。

1 事業概要



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

期間	ふりがな	ながのけんきょういくいんかい	都道府県名
令和5年度 ～ 令和7年度	実施機関	長野県教育委員会	長野県 20
	ふりがな	ながのけんうえだこうとうがっこう	
	提供校	長野県上田高等学校	
	ふりがな	ながのけんまつもとあがたがおかこうとうがっこう	
	提供校	長野県松本県ヶ丘高等学校	
	ふりがな	ながのけんのざわきたこうとうがっこう	
	提供校	長野県野沢北高等学校	
	ふりがな	ながのけんいなきたこうとうがっこう	
	提供校	長野県伊那北高等学校	
	ふりがな	ながのけんそなんこうとうがっこう	
提供校	長野県蘇南高等学校		

**令和7年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 構想計画書（概要）**

構想名（30字程度）

「信州 IBL プロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

構想概要（400字以内）

Society5.0に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成29年3月に策定した「学びの改革基本構想」の中で、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、以来、この力を育成するため、全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そのような中、令和2年度から取り組んでいるWWLコンソーシアム構築支援事業において、信州版ALネットワークを形成し、イノベティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

高校生がこのカリキュラムを、広く享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州IBLプロジェクト」として推進することで、学びの改革を一気に加速させる。そして、学びの充実による「新たな社会を創造する力」の育成を通じて、第4次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」を目指す。

研究開発・実施体制

研究方法※複数選択可	<input checked="" type="checkbox"/> ①オンデマンド配信による学習機会の創出 <input checked="" type="checkbox"/> ②オンライン授業による学習機会の創出 <input type="checkbox"/> ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供		
実施機関	長野県教育委員会		
提供校	学校名	長野県上田高等学校	公立
	本県のWWLカリキュラム拠点校。令和2年～令和5年の研究期間において1年次のグローバルスタディⅠ、2年次のグローバルスタディⅡで実施した課題研究を3年次、キャリアに応じてさらに深化させる学びを实践。北陸信越地区の高校を招き、生徒が設定したテーマに対する課題解決のアクションプランを考案し、日本語と英語で発信するとともに、グローバル課題について議論する北陸新幹線サミットを開催。		
	学校名	長野県松本県ヶ丘高等学校	公立
	探究科を有し、教員が生徒集団を引率する従前のスタイルを改め、令和4年度から、生徒個人が、教員のフォローを受けながら、自分の探究テーマに沿って海外での研修内容を組み立てる「個別最適な海外研修」を実施。		
	学校名	長野県野沢北高等学校	公立
	長野県来の学校研究事業における「スーパー探究校」。令和4年度から本格化した、佐久エリアコンソーシアム（大学・医療機関・地元企業・自治体・研究機関）と、学校をつなぐ外部コーディネーターを令和5年度から設置。企業や大学と学校をつなぐ役割を果たす。地元のベンチャー企業と連携し、健康寿命の増進をテーマに、地域に根差した探究学習を通して、医療健康先進地域の未来を共創するための学びを实践。		
	学校名	長野県伊那北高等学校	公立
	県下でいち早く導入した理数科から開始された探究的な学びとキャリア教育の充実を図る。令和5年度から、理数科に加えて幅広い2・3年生で普通科に「文系コース」「理系コース」「学際コース」の3コース制を新たに導入し、広い教養、深い学びを实践し、個別最適な学びを推進。		
学校名	長野県蘇南高等学校	公立	
キャリア教育や探究学習を基盤に生徒の進路実現を支援。総合学科を有し「文理系列」「経営ビジネス系列」「モノづくり系列」の選択科目に加え、ICTの積極的に活用し、タブレットを利用した生徒と教師の双方向での学習を推進。			

事業計画書

令和 7 年 2 月 3 日

文部科学省初等中等教育局長 殿

(実施機関名) 住 所 長野県長野市南長野幅下
692-2
名称及び 長野県教育委員会
代表者名 武田 育夫

令和 7 年度「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業 (個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業)」に関する事業計画書を以下のとおり提出いたします。

記

1. 事業実施機関名

機関名：長野県教育委員会

2. 事業実施期間

契約締結日～令和 8 年 3 月 31 日

3. 構想概要

構想名

「信州 IBL プロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

概要

Society5.0 に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成 29 年 3 月に策定した「学びの改革基本構想」の中で、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、以来、この力を育成するため、全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そんな中、令和 2 年度から取り組んでいる WWL コンソーシアム構築支援事業において、信州版 AL ネットワークを形成し、イノベティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

このカリキュラムを、広く高校生が享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州 IBL プロジェクト」として推進することで、学びの改革を一気に加速させる。そして、学びの充実による「新たな社会を創造する力」の育成を通じて、第 4 次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」を目指す。

4. 調査研究の方法

- ①オンデマンド配信による学習機会の創出
- ②オンライン授業による学習機会の創出
- ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供

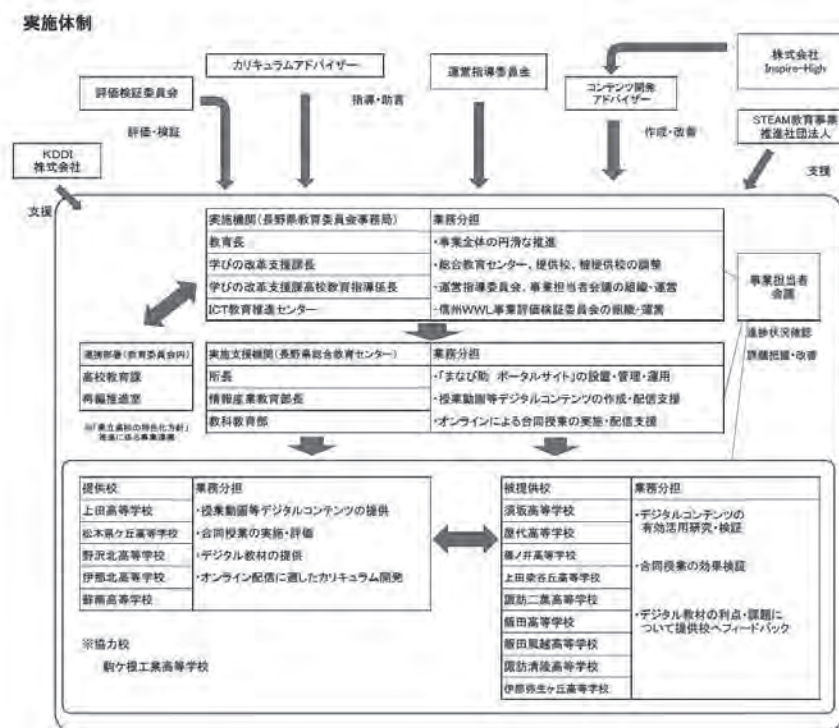
5. 事業実施体制

○提供校（5校）

上田高等学校、松本県ヶ丘高等学校、野沢北高等学校、伊那北高等学校、蘇南高等学校

○被提供校（9校）

須坂高等学校、篠ノ井高等学校、屋代高等学校、上田染谷丘高等学校、諏訪清陵高等学校、諏訪二葉高等学校、伊那弥生ヶ丘高等学校、飯田高等学校、飯田風越高等学校



事業項目	実施場所	事業担当責任者
ポータルサイトの管理・運営	実施機関、総合教育センター	高野英美、岡沢啓司、小林邦之
デジタルコンテンツ制作、配信	提供校、被提供校、実施機関	(※) 伊藤浩治 (上田)、宮坂正議 (松本県ヶ丘)、中澤東樹 (野沢北)、熊澤宏一 (伊那北)、小林高彰 (蘇南)、高野英美 (実施機関)
オンライン授業の実施に向けた調整	提供校、被提供校、実施機関	高野英美、城取恭子、提供校担当者 (※)
授業評価単位認定の研究	提供校、被提供校、実施機関	提供校担当者(※)
各校「探究的な学び」のアップデート	県内各校、実施機関、総合教育センター	高野英美、井上和之、三木舞子
先取り履修 (AP) の取組	信州大学 他	塚田武明、山崎和也、高野英美
遠隔授業配信に係る指導・技術支援	提供校、総合教育センター、ICT 推進教育センター	岡沢啓司、小林邦之、高野英美、齋藤俊樹
教員ネットワーク拡充・運営	実施機関、AL ネットワーク	高野英美、伊藤浩治 (拠点校)、宮坂正議 (共同実施校) 他連携校担当
教員向け研修	実施機関、総合教育センター、ICT 教育推進センター	高野英美、岡沢啓司、小林邦之、齋藤俊樹

組織運営・人的配置	実施機関、提供校、被提供校	高野英美、徳永佳代、井出洋文
事業推進に係る指導及び検証	実施機関	高野英美、徳永佳代、城取恭子
「県立高校特色化方針」の推進	実施機関、総合教育センター、再編推進室	高野英美、徳永佳代、総セ及び再編推進室担当

6. 今年度の計画

(1) 事業項目別実施期間

実施期間：契約締結日～令和8年3月31日												
事業項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ポータルサイトの管理・運営	→	→	→	→	→	→	→	調査	調査	分析	分析	改善
デジタルコンテンツ制作、配信	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
オンライン授業の実施・成果報告会	提供校	提供校	提供校実施機関	提供校、実施機関	提供校実施機関	実施機関	提供校、実施機関	実施機関	成果報告会、全国高校生フォーラム	提供校	提供校	提供校、実施機関
授業評価単位認定の研究	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
各校「探究的な学び」のアップデート	→	調査分析	→	ループリック改善	指標研究WG	指標研究WG	ループリック指標の試行	→	調査分析	→	次年度に向けた改善	→
先取り履修（AP）の取組	信州大学前期AP	県内大学との協議	→	→	→	信州大学後期AP	→	県内大学との協議	→	→	→	→
遠隔授業配信に係る支援・備品購入	提供校支援	備品購入	→	→	研修会	→	提供校支援	→	研修会	→	→	→
教員ネットワーク拡充・運営	事業担当者会	→	連携校会議	事業担当者会	連携校会議	連携交渉	連携校会議	連携交渉	連携校会議	事業担当者会	→	→
組織運営・人的配置	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	事務職員	事務職員
事業推進に係る指導及び検証				運営指導委員会						運営指導委員会	検証会議報告書作成	事業報告
「県立高校特色化方針」の推進に係る連携	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→

(2) 今年度の具体的な事業計画

ア オンデマンド配信による学習機会の創出

(ア) デジタルコンテンツを一元的に共有できる汎用的システム「まなび助 ポータルサイト」改善に向けた取組

- ・令和6年度実施のアンケート結果をもとに、生徒が主体的に活用したくなるコンテンツの拡充とレイアウトの最適化など、情報の検索性、利便性の向上を図る。
- ・ポータルサイトに「グローバル探究事例集」コーナーを追加し、他校の成功事例を県内の高校生が閲覧可能にする。
- ・提供校5校が自校で実施する授業を掲載する YouTube チャンネルを開設し、ポータルサイトにリンク一覧を掲載するなど、「まなび助ポータルサイト」が各校の「学び」をつなぐハブとして機能する環境を構築すると共に、専門学科、県外の連携校との学習コンテンツの共有を図る。

(イ) ポータルサイトの管理・運営に向けた取組

- ・教員間での情報共有を促進する機能として、昨年度試作した「まなび助ポータルサイト for Teachers」の活用を進める。
- ・YouTube チャンネル掲載の視聴数などのアクセスデータや事業関係校生徒教員によるアンケートを基に、ポータルサイトにおける情報検索性、レイアウトなどの改善頻度を高める。
- ・連携校からもコンテンツ提供がしやすくなるよう、ポータルサイトの共同管理機能についての研究を進める。

(ウ) 「高度な学び」「個別最適な学び」に資するデジタルコンテンツのオンデマンド配信

- ・提供校・被提供校の教員による「コンテンツ開発教員コミュニティ」をつくり、学習コンテンツ作成のための動画編集に関する研修や、すでに掲載の学習動画のアップデートを行う。
- ・DX ハイスクール研究事業対象校と協働し、探究学習の質的向上、STEAM 教育の充実、イノベーターティプなグローバル人材に必要な資質能力の育成に資する教員研修及び教材制作を行う。

(エ) コンテンツの質的改善に向けた取組

- ・生徒・教員のニーズを収集し、コンテンツ改善の基盤とするため生徒・教員へのアンケートを実施する。配信コンテンツの満足度等を収集し、効果的な改善策の立案に活用する。
- ・連携企業等による支援：協働機関及び県教育委員会と包括連携協定を締結している株式会社 KDDI や EdTech 企業との連携により、技術的支援及び革新的な教材作成に向けた助言を仰ぐ。

イ オンラインによる合同授業の実施に向けた調整

多様な他者との協働的な学びの機会充実とイノベーターティプなグローバルリーダー育成

(ア) 提供校主催の合同授業の実施に向けた取組（令和7年度計画）

- a. 基礎的探究スキルやデータ収集方法、探究のサイクルを体験するワークショップ（野沢北）
- b. 教員の学校間連携による教科等横断型講座や異なる教科を統合した授業の開発（伊那北）
- c. 社会のテーマを探究的アプローチとフィールドワークによる小論文講座（松本県ヶ丘）
- d. SDGs などテーマにより英語と日本語によるグローバル課題に関するシンポジウム（上田）
- e. 中山間地域校連携による地域資源を活用した課題解決型学習の実施（蘇南）
- f. AL ネットワーク各校による「海外での学び」「探究的な学び」の県内高校への配信、生徒の共同研究に繋がる環境構築、全国高校生フォーラムへの生徒派遣（連携校）
- g. 総合学科、工業、商業、農業等の専門学科を有する学校発の「高度な学び」「専門的な学び」の提供（蘇南、駒ヶ根工業、他専門学科を有する高校）

(イ) 実施機関主催による合同授業の改善に向けた取組（令和7年度計画）

- a. アカデミック（学術）プレゼンテーション講座：海外の大学や学会で発表経験のある大学教授や外部講師を招き、英語による学術プレゼンテーション能力を強化する。
- b. 海外大学進学・留学講座：AL ネットワーク卒業生 OB 等をメンターとして招聘し、海外大学進学を目指す生徒のためのオンライン及び対面による特別授業を実施する。
- c. 高校生の主体的な国際協力活動を支援するためのオンライン座談会：高校生の国際協力活動の報告会や現役海外派遣隊とのリモート対談を通じて、多文化共生や異文化理解を深める。
- d. リーダーシップに関する講座：社会の課題を見抜き、協働しつつ解決策を見つけ、新しい価値を創造する力を育成するための講座を行う。
- e. 高校生探Qカフェ：探究学習の過程における悩みや学習の進め方について、ワークショップ形式で高校生が相談できるオンライン相談会を実施する。
- f. 信州 WWL グローバルカフェ（長野県高校生探Qカフェ 高校生国際会議）：国内外の生徒や県内の高校で学ぶ留学生と共に探究活動の共有と社会課題を議論する場を提供する。

ウ オンライン授業における評価及び単位認定の研究

(ア) 各校の探究的な学びのアップデートに向けた取組

事業関係校の「総合的な探究の時間」の時間割調整及び合同実施、「自校の探究学習のフェーズを測定できる指標」の研究、「WWL ルーブリック」(R3作成)のブラッシュアップに取り組む。

(イ) 大学との連携(信州大学先取り履修)

高校生が大学授業を履修できる制度を周知し、各校生徒の積極的な参加を促す。また、生徒への動機づけとして、先取り履修で学んだ生徒の学びを「校外の学びにおける単位認定」として各校で認定できる教育課程の編成の研究をALネットワーク校へ依頼する。

(ウ) 海外連携校とのオンライン合同授業の取組

本県では平成30年に台湾高雄市と教育交流の覚書を締結し、令和6年度にオンライン交流の項目を新たに加え覚書を更新した。これら台湾との教育交流協力を活かし、複数回のオンライン授業交流や海外連携校との年間を通じた合同授業の実施について研究する。

(エ) 遠隔授業配信にかかる指導助言、各校への支援

実施機関担当者による効果的な遠隔授業の実施に向け、具体的な機材操作や環境準備のためのアドバイスや資料提供、研修会の実施などを開催。授業を行う学校に実際に出向いて配信のサポートについて支援員を派遣し、各校の円滑な授業配信を支援する。

エ 環境整備にむけた備品整備

以下に挙げる備品を購入し、オンライン同時双方向型授業の実施とデジタル学習コンテンツの作成を通じて、県内の生徒に等しく高度な学びを提供する環境整備を行う。

【購入予定備品】PC接続用ハブ、Type-Cケーブル、HDMIケーブル、マイクスピーカーセット、授業者用ピンマイク、コンデンサーマイク、ワイヤレスマイク、カメラ三脚、授業動画撮影用カメラ、キャプチャーボード、スイッチャー、オーディオインターフェイス、オンライン授業用PC、壁掛けプロジェクター、スクリーン

【使用用途】 全てハイブリッド開催を予定。(※「配信スタジオ」は総合教育センターを予定)

- ・WWL グローバル講座(配信元:実施機関、配信スタジオ、配信先:各校、各生徒)
- ・生徒による成果報告会(配信元:実施機関、総合教育センター、各地区会場)
- ・信州WWL グローバルカフェ(国際会議等含む):松本市勤労者福祉センター 他
- ・オンライン同時双方向型授業(配信元:提供校 配信先:被提供校、県外、海外連携校)
- ・探究成果報告会(配信元:提供校他、参加校:ALネットワーク校他、県内高校生)

オ 教員ネットワーク拡充及び組織の効果的な運営に向けた取組

(ア) 教員間の「ヨコの関係」の構築

年度当初、事業担当者連絡会を開催し、事業関係校の管理職、担当対象とした事業連絡会を実施。最終年度としての重点項目及び推進事業計画について共有を図る。昨年度に引き続き、本事業関係校含め、ALネットワーク校の教員向けの定期的なネットワーク会議をオンラインで開催し、成功事例や課題を共有することで、教員間連携を強化する。

(イ) ネットワークの拡充に向けた取組

専門学科と普通科の共習の可能性を模索するため、専門学科を有する学校含め、本事業への新規校参画校の開拓によりネットワーク校の拡大を目指す。全国の拠点校の先進的な取組に学ぶとともに、事業連携に向けて訪問交渉を行い、本県のALネットワーク校との連携拡大、強化

による生徒教職員のオンライン、対面による相互交流や学習コンテンツの提供を促進する。

(ウ) 教員向け研修

本事業の円滑な推進に向け、ICTの授業等への活用及びAI活用、遠隔授業配信に係る技術的内容に係る教職員向け研修を実施する。オンライン授業実施にあたり、同時双方向型授業に効果的なオンラインコミュニケーションツールの活用例などの職員研修を実施する。

カ 組織の効果的な運営

(ア) 事務職員・同時双方向型オンライン授業補助員等の配置

各校におけるオンライン授業補助、授業者のサポーター及び指導メンターとして、県内ALT、大学生、GIGAスクールサポーター等、支援内容に応じた人的支援を行う。また、最終年度の事業報告に係る業務補助のための事務職員を実施機関等に配置する。

(イ) 実施機関担当主事等による指導助言

事業担当主事等が年間を通して各校を訪問またはオンライン会議等の開催により、事業関係校における研究内容の取組における指導助言及び教員間連携のための調整を行う。

(ウ) 事業推進に向けた指導助言及び検証会議の実施

- a. 運営指導委員会の開催（年2回）：事業に係る進捗状況の報告及び目標達成に向け、委員及びアドバイザーに指導助言を仰ぐ。
- b. 検証会議の開催（年1回）：本年度及び3年間の事業研究に関する検証を行う。

キ 「県立高等学校特色化に関する方針」の推進と連携

本県では、今年度生徒の興味・関心を尊重し、多様な学びの選択肢を提供することを目指し「県立高校の特色化に関する方針」を策定した。この方針は「生徒の個別の学びを尊重し、社会で活躍できる力を育成する」点でWWL事業の目標と一致している。本方針による本県の高校改革の推進に当たっては、WWL事業が中核的役割を果たすと考える。来年は以下に挙げる共通の重点領域において事務局内担当課と協働し研究を進めていく。

(ア) ICT活用による遠隔授業の推進：WWL事業による知見や技術活用、中山間地の高校に通う生徒に対する質の高い探究的学びの提供と配信拠点整備に向け、総合教育センターと協議を進める。

(イ) イノベティブなグローバルリーダーの育成：「高度な学び」「国際的な学び」「探究的な学び」の実践を通して英語教育の強化や国際交流、国際理解に係る学習プログラムの提供。

(ウ) 探究的な学びの充実及び地域連携：本事業による探究カリキュラムを地域に根差した探究学習の事例として、中山間地域の学びの拠点として蘇南高校の取組を広く県内へ発信する。

7. 所要経費（様式第1-1）委託費所要経費積算に記載

8. 再委託の有無 無

9. 担当者

担当課・室	学びの改革支援課	担当者 職・氏名	指導主事 高野 英美
電話番号 (直通)	026-235-7435	メール アドレス	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

信州IBLプロジェクト (Inquiry-Based Learning)

一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」を
とことん追求できる「探究県」長野の学びを推進

高度な学びの享受による個別最適な学びの環境整備



STEAM教育の推進



実社会の複雑な文脈における課題解決
文理融合・教科横断的な学び 探究のプロセスを展開

新たな社会を創造する力の育成



個人と社会のウェルビーイング



様式第4（事業完了（廃止）報告書）

事業完了（廃止）報告書

令和8年3月31日

支出負担行為担当官
文部科学省初等中等教育局長 殿

（実施機関名） 住 所 長野県長野市南長野幅下
692-2
名称及び 長野県教育委員会
代表者名 武田 育夫

令和7年4月1日付け令和7年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業）は、令和8年3月31日に完了（廃止）したので委託契約書第10条の規定により、下記の書類を添えて報告いたします。

記

1. 事業結果説明書（別紙イ）
2. 事業収支決算書（別紙ロ）

様式第4(別紙イ)

事業結果説明書

1. 事業の概要

(1) 事業の実施期間

令和7年4月1日(契約締結日)～ 令和8年3月31日

(2) 実施機関名

機関名：長野県教育委員会

(3) 構想の概要

構想名

「信州 IBL プロジェクト」が紡ぐ探究県長野発世界へ繋げる学びのネットワーク

概 要：

Society5.0 に向けた社会の大きな変動と、予測不可能な時代の到来を見据え、本県では平成29年3月に策定した「学びの改革基本構想」で、次代を担う子どもたちに必要な資質・能力を「新たな社会を創造する力」と謳い、以来、この力を育成するため、全県立高校の授業に「探究的な学び」を取り入れた学びの改革を進めている。

そのような中、令和2年度から取り組んでいる WWL コンソーシアム構築支援事業において、信州版 AL ネットワークを形成し、イノベティブなグローバル人材を育成する新たなカリキュラムを開発してきた。

高校生がこのカリキュラムを、広く享受できる配信システムを整備し、個別最適な学びの環境を構築する本事業を「信州 IBL プロジェクト」として推進することで、学びの改革を一気に加速させる。そして、学びの充実による「新たな社会を創造する力」の育成を通じて、第4次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」を目指す。

(4) 調査研究の方法 ※複数選択可、具体的な内容については公募要領に記載

- ①オンデマンド配信による学習機会の創出
- ②オンライン授業による学習機会の創出
- ③大学教育の先取り履修に資するコンテンツによる学びの提供

2. 事業の実績

(1) 実施日程

事業項目	実施期間（令和7年4月1日～令和8年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ポータルサイトの管理・運営	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
デジタルコンテンツ制作、配信	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
オンライン授業の実施・成果報告会			●					●	●	●	●	
授業評価単位認定の研究	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
各校「探究的な学び」のアップデート		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
先取り履修（AP）の取組		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
教員ネットワーク拡充・運営	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
組織運営・人的配置	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
「県立高校特色化方針」の推進に係る連携	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
事業関係校訪問指導	●	●	●				●	●	●	●		
学習コンテンツ制作・提供		●	●		●		●	●	●	●	●	
遠隔授業配信研究、研修会	●	●	●				●	●			●	●
授業メンター派遣		●	●						●		●	
信州WWLグローバル講座			●		●		●	●	●			
運営指導委員会				●						●		
事業推進に係る指導及び検証											●	
事業報告（報告書作成）									●	●	●	●

※行は適宜追加して差し支えない

(2) 実績の説明

ア オンデマンド配信による学習機会の創出

(ア) デジタルコンテンツを一元的に共有できる汎用的システム「まなび助ポータルサイト」改善に向けた取組

昨年度実施した生徒アンケートにおいて、学習プラットフォームの利便性および検索性に関して多数の意見が寄せられた。これらの調査結果を分析し、下記の改善を行なった。

・生徒が主体的に活用したくなるコンテンツの拡充

現在、ポータルサイトでは、実施機関及び各校作成の動画 68 本と学習教材等を公開・掲載している。コンテンツの作成にあたっては、動画の長さや字幕など編集に工夫を加えることでより「見たくなる」コンテンツ作りに努めた。より多くの生徒に活用してもらえるよう、英語によるプレゼンテーション講座などについては、県教育委員会が主催する海外研修における事前学習として位置づけるなどの工夫を図った。

(主な動画コンテンツ) 探究基礎講座、英語による発信力強化のための講座、国際協力海外進学および海外研修に関する講座 等

- ・ポータルサイトレイアウトの最適化

情報の検索性・利便性向上を図るため、ポータルサイトのレイアウトを見直し、プログラム情報や教材の再整理を図った。

- ・生徒の探究テーマリスト、指導教材・ループリックの共有

AL ネットワーク校から生徒の探究テーマ一覧及び各校の探究学習教材の提供を依頼するとともに、各校において探究の支援として活用できるよう、教材等を「まなび助ポータルサイト for Teachers」に掲載し各校と共有した。

- ・提供校による YouTube チャンネルの開設

「まなび助ポータルサイト」で有用な情報リンク一覧を掲載し、全県に紹介した。提供校の YouTube チャンネル開設については、個人情報などの調整が難しく、今年度は一斉開設に至らなかった。今後も AL ネットワーク校や専門学科、県外連携校と学習コンテンツを共有できる環境づくりを進めていく予定である。

(イ) ポータルサイトの管理・運営に向けた取組

- ・教員間の情報共有を促進する機能として、「まなび助ポータルサイト for Teachers」を活用し、教科横断授業や授業ループリックの共有に努めた。
- ・ポータルサイトの共同管理機能を活用し、実施機関が提供する「学びのプラットフォーム」において、各担当者が生徒向けの情報を掲載できる体制を整えた。

(ウ) 「高度な学び」「個別最適な学び」に資するデジタルコンテンツのオンデマンド配信

- ・提供校および被提供校から学習コンテンツの提供を受けるとともに、実施機関が作成した動画については、今年度も内容のブラッシュアップを図った。
- ・DX ハイスクール研究校と協働し、探究学習の質的向上や STEAM 教育の充実、授業における ICT や生成 AI などの利活用に資する教員研修を開催した。また、各校の取組については県内の高校に公開することで、知見の共有を図った。

(事例) 生成 AI プロンプトハンズオン研修 (上田高校 4 月 23 日、30 日実施)

(エ) コンテンツの質的改善に向けた取組

- ・デジタルコンテンツの作成

海外進学留学講座など、希望生徒が少数のため単独校では実施が難しいものについて、実施機関が主催する「信州 WWL グローバル講座」のプログラムとして取り入れた。講座の内容をアーカイブ動画としてポータルサイトに掲載した。既存のコンテンツについても、内容をブラッシュアップするなど、内容をより充実させるとともに、希望する生徒がいつでも視聴できるように努めた。

- ・連携企業等による支援

協働機関及び県教育委員会と包括連携協定を締結している株式会社 KDDI や Inspire High と連携を図り、生徒の探究支援の充実や教員研修に資する講座構築に向けて助言を仰いだ。

(事例) 学校の探究フェーズを測定指標の作成に向けた指導助言 (協働機関 Inspire High 8 月 29 日、1 月 14 日実施)、教育委員会×KDDI 共創プロジェクト初任者を対象としたオンライン座談会「チキンスープの会」の実施 (協働機関 KDDI 株式会社：7 月 15 日キックオフ、8 月 26 日、1 月 19 日実施)

イ オンラインによる合同授業の実施に向けた調整

多様な他者との協働的な学びの機会充実とイノベティブなグローバルリーダー育成

(ア) 提供校主催の合同授業の実施に向けた取組（令和7年度実施の講座）

- a. ミニ探究 Day 配信：基礎的探究スキルやデータ収集方法、探究のサイクルを体験するワークショップ（野沢北高校 4月21日実施）
- b. コラボ授業動画コンテンツの作成：英語と社会等による教科等横断型授業の実施と動画コンテンツの提供（提供：伊那北高校）
- c. 小論文講座デジタルコンテンツ作成：探究的アプローチとフィールドワークによる小論文講座。講座の動画をデジタルコンテンツとして提供（松本県ケ丘高校 2月5日～6日実施）
- d. 第8回北陸新幹線サミットの開催：英語と日本語によるグローバル課題に関するシンポジウムの実施。オンラインと参集の併用で実施し、当日の様子は広く県内の高校に配信
県内参加校：長野、屋代、松本県ケ丘、伊那北、上田（参加者46名）
県外参加校：仙台城南、佼成学園女子、新潟県立三条、金沢大附属、石川県立七尾、福井県立美方（参加者27名）（上田高校 6月21日実施）
- e. 海外研修報告会：県教育委員会が主催する高校生海外研修「信州つばさプロジェクト」参加者及び学校独自のカンボジア研修等の「海外での学び」報告会県内高校への配信（野沢北高校 5月1日実施）
- f. アカデミックプレゼンテーション講座：生徒の主体的な活動や海外での学びを保護者や中学生、地域に対面及びオンラインを活用し広く公開。参加者は講師との対話を通して自らの活動を振り返るとともに、学びを広く世界に向けて発信するためのグローバルコミュニケーションのスキルを学んだ。（上田高校 4月19日、10月19日実施）
- g. 総合探究学年発表会のオンライン配信：ALネットワーク校で唯一総合学科を有する蘇南高校における地域との協働による探究的な学びを全県へ配信（蘇南高校 12月12日実施）
- h. 全国高校生フォーラムへの生徒派遣：本県の代表として、5校（屋代、上田、野沢北、飯田、松本県ケ丘）の生徒11名を派遣した。全国レベルの発表に学ぶとともに、参加校には報告会の開催を計画・実施するよう依頼した。参加校では、英語による探究発表やディスカッションを通じて得た知見を県内の高校生と共有を図った。
（国立オリンピック青少年記念総合センター 12月21日（日）開催）
- i. Global Studies Program：生徒が英語による対話を通じて多様な価値観・考え方に触れ、グローバルな課題と向き合い「思考法」「解決法」「リーダーとしてのアクション」等を学ぶ英語づけの3日間集中講座を上田高校と長野西高校が共同で実施した。拠点校と連携校による共同企画として、両校の生徒が学校の枠を超え、多様な考えや価値観に出会う機会の醸成とALネットワークのさらなる拡充につながるものとして、意義深い取組であった。
（12月26日～28日実施 上田高校27名、長野西高校6名参加 上田高校にて実施）

(イ) 実施機関主催による合同授業の改善に向けた取組（オンライン併用により実施）

- a. **アカデミック（学術）プレゼンテーション講座**：長年研究者として国際学会で発表経験をもつ外部講師を招き、英語による学術プレゼンテーション講座を実施。実施機関からオンラインにより講座を配信。今年度は県教育委員会が主催する海外研修（信州つばさプロジェクト STEAM コース）及び全国高校生フォーラム参加生徒に本講座を事前学習として位置づけることにより、本課が展開する各プログラムとの連携を図った。参加した教員からは、本講座の自校開催を望む声も多数寄せられた。次年度は、本講座を教員の指定研修選択講座に位置付け、さらなる普及に努めたい。

（実施機関 全県向け：10月～12月3回シリーズ、11校21名受講、屋代高校出前講座：12月3回シリーズ、1年生120名受講）

- b. **海外大学進学・留学講座**：海外大学進学・留学講座では、ALネットワーク校卒業生等をメンターとして招聘し、海外大学進学を目指す生徒を対象に実施した。また、8月には教員向け研修を開催し、海外大学受験のための基礎知識や各国の入試制度の違いについて理解を深めるとともに、各校における進路指導の充実につなげた。（実施機関、生徒向け講座：6月14日実施、6校19名参加、教員向け講座：8月6日実施、10校16名参加）
- c. **高校生探Qカフェ**：探究学習の過程における悩みや探究活動の進め方について、ワークショップ形式で高校生が相談できる機会を提供した。「総合的な探究の時間」の授業内で受講できるように平日開催としたことで、多くの生徒が参加することができた。（実施機関、全県向け：6月5日実施、5校249名参加）
- d. **探究伴走者フォーラム**：生徒の探究を支援するため、教員を対象とした研修を実施した。職員研修会として位置付けて参加した学校もあり、参加者は探究サイクルを効果的に回すための具体について見識を深めた。（実施機関 全県向け：5月28日実施、22校198名参加）
- e. **信州WWLグローバルカフェ（長野県高校生探Qカフェ内）**：JICA東京、JICA長野デスクとの共催により、高校生の国際協力活動を支援するワークショップを実施した。「高校生が考える、長野の多文化共生」をテーマに、ALネットワーク校の生徒が日頃の活動発表を行った。当日はJICA海外協力隊OGによる出前講座やJICAパキスタン事務所とリモートで繋ぎ、現地の様子を伺うことで、同じ探究テーマに取り組む高校生のコミュニティーづくりと、様々な立場や世代の参加者とともに社会課題を議論する機会を提供した。当日はオンラインと対面のハイブリッド形式で開催し、全県の高校生や保護者も参観可能とした。会場には学校関係者のほか、中学生や一般の方の参観もあり、本事業による生徒の学びの成果を広く発信することができた。（12月14日実施、6校から15名発表者として参加）

ウ オンライン授業における評価及び単位認定の研究

(ア) 各校の探究的学習の高度化に向けた取組

- a. **探究活動支援のための情報および教育教材の共有**

学校間の枠組みを超えた学習機会の拡充を目的として、ALネットワーク校合同授業や探究学習に関連する外部機関から提供される情報の集約及び各校との共有を推進した。今年度は「総合的な探究の時間」に関する時間割調査を実施した。全県の高校生が高度な学びを高いアクセ

シビリティで享受できるよう、本課主催の生徒向け探究相談会等講座を平日の日課に合わせてオンライン形式で実施した。

b. WWL ルーブリックのブラッシュアップと「探究力アセスメント」の実施

今年度は、信州 WWL ルーブリックの3つの柱（課題発見・協働・創造力、人生を主体的に構想する力、信州で育まれた文化や価値観を自分の軸に世界へと視野を広げる力）及び11の資質・能力の育成状況を検証するため、ルーブリックの見直しを行った。生徒自身による自己分析アンケートを通じて、資質・能力の変化を定量・定性的に把握した。また、「自校の探究学習のフェーズを測定できる指標」の研究も進め、現場教員の支援体制強化に資する測定ツールの検討を進めた。外部アドバイザーの助言や全国の知見も活用し、今後はこれらの成果を県内全高校の探究担当教員向け研修教材として活用し、学びのプラットフォームを通じた生徒の成長を可視化するツールとして今後も活用していきたい。

(イ) 大学との連携（信州大学先取り履修）

本県では信州大学が高校生を対象とした先取り履修を実施している。本制度を県内各校に対して周知を図り、生徒の積極的な参加を促した。令和5年度の開始以来、これまでに32校、151名の生徒が参加しており、AL ネットワーク校のほか、中山間地域校や工業科、農業科などの専門学科の生徒も履修している。信州大学では、履修した単位については、同大学に入学した場合、卒業単位とすることができる科目もあり、拠点校では、先取り履修の単位を増加単位として認定するなど、WWL 事業の取組を反映した教育課程の編成に努めている。

(ウ) 海外連携校とのオンライン合同授業の取組

本県では平成30年に台湾高雄市と教育交流の覚書を締結し、令和6年度にはオンライン交流の項目を新たに加えて覚書を更新した。県内では、複数校が台湾等への海外修学旅行を実施している。AL ネットワーク校では、台湾との教育交流協力を活かして、事前研修として複数回のオンライン授業を行い、交流を深めている。また、野沢北高校では国際理解をテーマに独自の海外研修を実施し、カンボジア、バングラデシュ、韓国の高中生とのオンライン交流も行っている。さらに、AL ネットワーク校には訪日教育旅行を積極的な受入を依頼しており、異文化理解や国際協働につながる学びの機会の創出に努めている。

(エ) 遠隔授業配信にかかる指導助言、各校への支援

効果的な遠隔授業の実施に向け、実施機関担当者が各校を訪問し、具体的な機材操作や環境準備のための指導助言を行った。11月に実施した専門科目「福祉」における同時双方向型授業では、実施にあたり、担当指導主事がCanva、Google Classroomを活用した教材共有方法、授業配信に必要な機材接続方法などの助言を行い、当日の円滑な授業配信をサポートした。（例：阿南高校、塩尻志学館高校 11月26日実施）教科「情報」でもの3校配信授業実施に係り、機材の選定及び環境整備のための研究及び助言を行った。（配信テスト 2月4日、17日実施）

エ 環境整備にむけた備品整備

今年度は、オンライン同時双方向型授業の実施とデジタル学習コンテンツの作成を通じて、県内の生徒に等しく高度な学びを提供できる環境整備を進めた。具体的には、所要経費報告書に記載した、備品及び消耗品等の多様な備品を整備した。これらの機材は、WWL グローバル講座や成果報告会、信州 WWL グローバルカフェ、オンライン同時双方向型授業、探究成果報告会など多様な学びの場面で

活用した。特に、ハイブリッドで開催した講座では、活発なグループワークの様子をオンライン参加者に伝えるため、複数のマイクを活用したり、多角的な視点からの画面撮影をしたりするなど、多様な環境下でのオンライン配信の質的の向上に努めた。

これまでの研究を通して、オンラインでも十分主体的で対話的で深い学びを実現できる一方、より良い学習環境を整えるためには、配信機材や設備、環境の整備が不可欠であることが明らかになった。今後は、オンラインと対面の双方の利点を融合させることで、より効果的な授業が展開できることについて周知するとともに、各校における授業改善にむけて、引き続き適切かつ有用な支援を行っていきたい。

オ 教員ネットワーク拡充及び組織の効果的な運営に向けた取組

(ア) 教員間の「ヨコの関係」の構築

年度当初には事業関係校の管理職、担当対象とした事業連絡会を実施し、今年度の重点項目及び推進事業計画について共有を図った。また、AL ネットワーク校の担当者が参加するチャットグループを活用し、各校からの講座案内や生徒募集などの情報共有を行い、教員間の連携構築に努めた。(R8.3月現在チャットグループ登録者数 55名)

(イ) ネットワークの拡充に向けた取組

提供校5校では、生徒の探究活動を通して県内外の高校との交流を通して、本県のAL ネットワークの連携拡大、強化を図るとともに、オンライン、対面による多様かつ協働的な学びの推進に努めた。(例：上田高校：北陸新幹線サミットへの県内外校の招聘、蘇南高校：名古屋外国語大学との協働活動、北海道連携交渉先との探究発表会交流、松本県ケ丘：石川県能登地域の高校、大学、研究機関との連携によるフィールドワーク実施 等)

(ウ) 教員向け研修

県教育課程研究協議会では今年度の研究テーマを「ICTの授業における効果的な活用」とし、すべての教科において主体的、対話的で深い学びの実現に向けたICTの活用について研究を行った。英語教員研修では、授業における生成AIの活用についての研修会をオンラインで実施した。また、県教育委員会では、文部科学省による「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン」の策定を受け、生成AIの授業及び校務における効果的な活用についての教員向けリーフレットを作成し、県内の高校へ周知した。

カ 組織の効果的な運営

(ア) 事務職員・同時双方向型オンライン授業補助員等の配置

- 各校におけるオンライン授業補助、授業者のサポーター及び指導メンターとして、県内ALT、大学生を派遣した。(6月海外進学留学講座、12月信州WWLグローバルカフェ、1月上田高校GS報告会 等)
- 担当指導主事が各校を訪問し、オンライン同時双方向型授業にかかる技術面でのサポートなどの支援等を行った。(7月上田高校、11月阿南高校 等)
- 事業報告に係る業務補助のための事務職員については、事業の円滑な推進に支障がない範囲での対応が可能であったため、実施機関関係者で対応した。

(イ) 実施機関担当主事等による指導助言

事業担当主事等が年間を通して各校を訪問し、事業関係校における研究内容の取組における指導助言及び教員間連携のための調整を行なった。今年度の各校への訪問及びオンラインによる指導助言実績は以下の通り。

(※) オンラインによる

4月19日	(土)	上田高校訪問 (アカデミックプレゼンテーション指導助言)
5月21日	(水)	上田高校訪問 (松尾ゼミナール指導助言)
5月26日	(月)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
6月19日	(木)	総合教育センター担当者打合せ (※)
6月21日	(土)	上田高校訪問 (北陸新幹線サミット指導助言)
7月9日	(水)	上田高校訪問 (遠隔授業支援・指導助言)
7月30日	(水)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
10月10日	(金)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
10月18日	(土)	上田高校訪問 (アカデミックプレゼンテーション講座指導助言)
11月26日	(水)	阿南高校訪問 (福祉オンライン双方向型授業指導助言)
12月14日	(日)	信州 WVL グローバルカフェ開催 (松本市勤労者福祉センタ)
12月26日	(金)	上田高校訪問 (グローバルスタディプログラム指導助言)
1月27日	(火)	AL ネットワーク校ミーティング (兼) 提供校担当者会 (※)
1月28日	(水)	上田高校訪問 (グローバルスタディーズ報告会指導助言)
3月23日	(月)	遠隔授業教員研修会 (総合教育センター)

(ウ) 事業推進に向けた指導助言及び検証会議の実施

下記の日程で本年度の運営指導委員会、検証会議を実施した。昨年度の成果、今年度の事業報告及び事業の成果と課題、今後の方向性について専門的見地から指導助言をいただいた。

○運営指導委員会 第1回：令和7年7月30日、第2回：令和8年1月27日実施

【運営指導委員】

信州大学教育学部	学部長	村松 浩幸 (座長)
東京インターナショナルスクール	理事長	坪谷 ニュウエル 郁子 (副座長)
KDDI 株式会社経営戦略本部	副本部長	江幡 智広
信州大学教育学部	准教授	佐藤 和紀
株式会社 Inspire High	CEO	杉浦 太一

【カリキュラムアドバイザー】

ベネッセ総合教育研究所教育イノベーションセンター長 小村 俊平

○検証会議 令和8年2月27日実施

【検証委員】

慶應義塾大学総合政策学部 教授 清水 唯一朗

キ 「県立高等学校特色化に関する方針」の推進と連携

本県では、今年度生徒の興味・関心を尊重し、多様な学びの選択肢を提供することを目指し「県立高校の特色化に関する方針」を策定した。「生徒の個別の学びを尊重し、社会で活躍できる力を育成する」こと目標とする本方針による本県の高校改革の推進に当たり、WWL 事業と共通の下記に挙げる重点領域において、事務局内担当課と協働し研究を進めた。

(ア) ICT 活用による遠隔授業の推進

本県では、WWL 事業による知見や技術を活用し、地理的条件等に関わらず県内の希望する全ての生徒に質の高い学びを提供できるよう、実施支援機関である総合教育センターとともに遠隔授業の研究を進めてきた。今年度は、教育委員会事務局4課室および総合教育センターからなるワーキンググループを組織し、配信機器の調達、授業時間割や単位認定の在り方について研究した。これらの取組により、地域や学校間の格差を是正し、誰もが等しく学びにアクセスできる体制の構築を目指し、令和8年度4月に遠隔教育配信センター（仮称）を開所する。これにより、今後も引き続き、学びの機会の拡充と教育環境の整備を図っていく。

(イ) 遠隔授業配信にかかる教員研修

3月には、WWL 事業を通して得たオンライン授業実施に必要な技術等の知見を活用し、主体的で対話的な授業展開するための研修会を実施した。来年度から開始する遠隔教育配信センター（仮称）を会場に、参集で開催するとともに、授業配信の様子を希望する高校の教員に公開した。

(ウ) イノベティブなグローバルリーダーの育成

今年度も「高度な学び」「国際的な学び」「探究的な学び」の実践を通じて、英語教育の強化および国際交流の推進に努めた。本課が実施する英語教員向け研修では、ALT との協働による授業実践をテーマとし、4地区でALT を配置する学校を対象に研修を実施した。また、グローバルな世界で活躍できる生徒の育成を目指し、SSH 校とも連携を図り、同校に配置しているグローバル講師による「研究成果を英語で発信するための指導法等」について研修を実施した。

(エ) 探究的な学びの充実及び地域連携

地域に根差した探究学習を展開する蘇南高校では、探究の指導助言を仰ぐ地域コンソーシアムを構築している。今年度も中山間地域の学びの拠点として、自校の探究成果報告会をオンラインで広く県内へ配信した。これにより、積極的に県外の高校との連携を図り、学びのネットワーク拡大に努めた。

3. 目標の進捗状況、成果、課題

(1) 事業検証アンケート「探究力アセスメント」の実施

令和2年度から研究を開始した WWL の取組は、信州 WWL ルーブリックに示す3つの柱として掲げる資質・能力を持つ生徒の育成を目指し、①課題発見・協働・創造力、②人生を主体的に構想する力、③信州に根差したアイデンティティーという3つの資質・能力を持つ生徒の育成を目標とし、これまで整備を進めてきた「学びのプラットフォーム」を、県内の希望する生徒が参加できる形に再構築することであった。

事業研究の最終年度を迎えるにあたり、本事業を通じて生徒にどのような資質・能力を育成できた

く 44 の質問を作成し、下記によりアンケートを実施した。

【ねらい】

WWL 事業をとおして生徒はどのような資質・能力を身に付けたかについて 3 つの柱・11 の資質・能力「WWL ルーブリック」を指標に生徒の成長を分析。

【概要】

実施期間：令和 8 年 10 月～12 月

対 象：県教委が主催する「学びのプラットフォーム」事業に参加した県内の高校生

回 答 数：181 名

質 問 数：44 項目（「WWL ルーブリック」S（理想の姿）～C（努力が必要）レベル対応）

※事後アンケートには自身の変容を記述する質問を追加。

内 容：11 の資質・能力の変化と生徒の変容を分析（研修前後）

方 法：Google フォームによる

(2) 成果と課題

ア 成果 ※肯定率＝各質問に対して、「できる」と回答した割合を算出。

(ア) 定量的成果（回答データから）

- ・ 11 項目すべてで肯定率が上昇。（事前→事後）
- ・ 特に伸びが大きい項目
 - 地域に根差したアイデンティティ：18.8 ポイント増
 - 新しい価値や社会を創造する力：18.3 ポイント増
 - 課題発見力：18 ポイント増
- ・ 事前から高水準だった項目
 - グローバルなマインドセット：0.7 ポイント増（高止まり）

(イ) 定性的成果（生徒の記述回答から）

- ・ 「問いを立てる力」、「対話する力」の向上を実感する生徒が増加。
- ・ 生徒の学ぶ姿が「受け手」から「発信者・実践者」へ転換。
- ・ 海外研修・高度な学びを通して、主体的な進路選択や人生を構想する力が内在化。
- ・ 多様な他者との学びを通して、社会的参画意識や使命感への意識が向上。

イ 課題

- ・ 地域との具体的な協働・行動段階は、グローバル視点に比べ相対的に弱い。
- ・ 独創的な解を生み出す力（ゼロからの創造）に課題を感じている。
- ・ 試行錯誤を繰り返す局面で、「やり抜く力」への自己肯定感が低下する傾向。

【考察】

生徒アンケートの結果から、学びのプラットフォームで提供してきた各講座には、生徒が新たな知識や体験を通じて自己理解を深め、学びを行動へつなげるという重要な役割があることが明らかとなった。その役割を活用するためには、生徒の探究的な学びの段階に応じて講座を選択できる仕組みや、複数の講座を組み合わせ一連の学習プロセスを経験できるパッケージ型プログラムの構築が必要である。一方で、目指す生徒像の育成は学びのプラットフォームのみで完結するものではなく、各校の教育活動との相互作用によってより大きな成長が促されると考える。

今後は、県の事業と学校の教育活動の効果的な往還を図り、生徒が自身の成長や学びの深まりを実感

できる学びのプラットフォームの構築をしていきたい。

4 次年度以降の課題及び改善点、今後の方向性

(1) 個別最適な学習環境の構築

まなび助ポータルサイトの開設により、県内の探究プログラム情報の一元化を図ってきた。成果としては、各校のホームページや特設サイト、理数科探究 HP、産業教育関係のリンクも掲載し、高校生の探究的な学びを支援する多様な情報を提供することで、生徒が幅広い視点から社会課題を見つめる機会の創出につながったと考える。一方で活用が十分になされていたとは言えず、しっかり周知をすることと、生徒自身の動機づけや主体的な活用を促す工夫が今後の課題である。

各校の特色ある取組を集約しつつある一方、今後は生徒教員が日々の学習等において効果的に活用できる仕組みが必要である。解決策の1つとして、既存事業への効果的な移行があげられる。本事業で構築した生徒向けオンライン講座を外国語教員向け研修や初任者研修選択講座に取り入れるなど、教員育成の観点からも先進的な学びの普及を図っていきたい。

(2) 「学びのプラットフォーム」の再構築

「学びのプラットフォーム」の再構築にあたっては、前述の生徒自己評価アンケートの分析結果を踏まえ、三つの重点領域を掲げて取り組んでいきたい。

第一に、世界で得た知見やグローバルな活動経験を地域課題に還元する「グローバルな探究サイクル」の構築である。第二に、成果だけでなく成長のプロセスを教員が適切に評価し、学校内外で探究を支える支援体制を確立することである。第三に、学校の枠を超えた学びの場を創出し、多言語で世界に発信できるコミュニケーション力を強化することである。

また、これまで蓄積してきたデジタルコンテンツ等については、来年度開所予定の遠隔教育配信センター（仮称）でも活用していきたい。さらに、県教育委員会のプログラムと各学校の取組が相互に作用し合う仕組みを整え、個々の生徒の学習段階に応じて参加できる学びの機会を、今後も継続して提供していきたい。

最後に、これまでの WWL 事業による研究は、文部科学省が掲げる「高校教育改革を先導する拠点のパイロットケースを創出し、その取組や成果を域内に普及すること」を目的とした N-E. X. T.（ネクスト）ハイスクール構想への参画を検討するうえで、有用な知見となった。事業研究を通して、研究拠点校を中心とする複数校によるネットワーク形成のノウハウだけでなく、そのネットワークを維持する際の課題も明らかとなった。

今後は、これらの課題に対応しながら、本県の高校改革がめざす学びの改革をさらに加速させ、第4次長野県教育振興基本計画に掲げる「個人と社会のウェルビーイングの実現」に向けて取組を進めていきたい。

【実施機関の担当者】

担当課・室	学びの改革支援課	担当者 職・氏名	主任指導主事 高野 芙美
電話番号 (通)	026-235-7435	E-mail	kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp

構想名：「信州IBLプロジェクト」が紡ぐ「探究県」長野発世界へつなげる学びのネットワーク

WWLで育成したい生徒の資質能力

社会の創造者としての力
自分らしく生きる力
グローバルなマインドセット

探究活動の裾野拡大
ポータルサイトやオンライン講座を通じてより多くの生徒に探究学習の機会を提供

学びの発信力強化
学術プレゼン講座や全国フォーラムへの参加を通じて、学びのアウトプットの場を創出

多様な他者との対話
オンラインを活用し、国内外の様々な人々との対話による学びの充実

海外進学・留学支援
現役海外大学生との対話により主体的な進路選択とキャリアデザイン力を醸成

ALネットワークの最適化
連携校が行う高度な学びの発信と、県内各校から広がる学びの共有



まなび助ポータルサイト
デジタルコンテンツ60本以上を掲載。R8開設の遠隔授業配信センターで活用。

信州WWLグローバル講座
インバティブなグローバル人材育成に資する講座を実施。遠隔地の学校からのオンライン参加増。

アカデミックプレゼンテーション講座
論理的思考や課題解決力を養うオンライン講座に生徒18名が参加。県教委主催の海外研修、全国フォーラムの事前学習としても活用。

全国高校生フォーラム派遣
5校11名の生徒を派遣。全国レベルの探究に学ぶとともに英語での発信力を向上。

WWLグローバルカフェ@長野県高校探Qフェスティバル
JICAと連携し、高校生の国際協力活動を支援。「多文化共生」をテーマにハイクラスと中継したワークショップを開催。15名の生徒が発表。

オンライン同時双方向授業の実施
塩尻志学館高校と阿南高校（約100kmの遠隔地）をオンラインで結び「福祉」の同時双方向授業を実現。多様な考えに出会う機会を提供。

生徒・教員対象「海外進学講座」の実施
日本と海外の大学入試制度の相違点や求められる能力を理解し、自分の強みを把握することで、自ら進路を切り拓く意識を育む。

STEAM教育に資する学び
協動的な学びの場づくり
FWJ小論文講座、生成AIプロンプトハンズオン研修、北陸新幹線サミット、グローバルプログラム

拠点校発のプログラムの伝播
出前講座の実施
アカデミックプレゼンテーション講座を屋代高校1学年120名を対象に実施。

生徒の成長分析：成果と課題

全11項目で成長を実感
「探究力アセスメント」によりWWLルーブリックで定めた3つの柱に基づく11資質・能力の全てにおいて、肯定的な自己評価（「できる」と回答）の割合が上昇。

地域に根差したアイデンティティ	+18.8pt
新しい価値や社会を創造する力	+18.3pt
課題発見力	+18.0pt

学びの姿勢が「受け手」から「発信者」へ
生徒の回答からは、「自ら問を立てる力」や「対話する力」の向上を実感し、学びの主体者へと変化している様子が見られた。

乗り越えたい3つの課題
①ゼロからの創造
②アクション持続力
③地域貢献に向けた行動力

今後の方向性

「グローバルな探究イクル」の構築
世界で得たグローバルな視点を地域の課題解決に還元する探究サイクルの確立

学校の枠を超えた学びの場の創出
オンラインを活用し、多様な生徒が集い、協働により学習の機会を創出

成長プロセスを評価する探究伴走型支援
成果ではなく、生徒一人ひとりの試行錯誤や成長過程を評価し支える支援体制の強化

遠隔教育配信センターにおける知見の活用
令和8年開設の遠隔教育配信センターにおいてポータルサイトを活用することでWWL事業に研究成果を持続可能な形で展開

事前43.2%→事後62.0% 事前46.8%→事後65.1% 事前58.1%→事後76.1%

2 実施報告



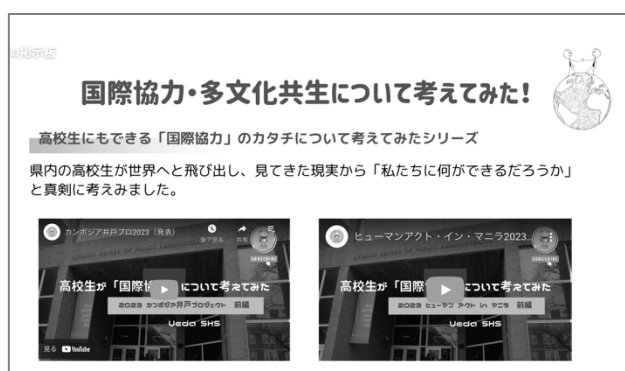
学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

オンデマンド配信による学習機会の創出 実施機関の取組

今年度も実施機関及び提供校で作成した教材をデジタルコンテンツとして制作し、「まなび助ポータルサイト」へ掲載するとともに、県教育委員会が主催するさまざまな事業及び生徒向け講座をポータルサイト上でも周知することにより、生徒が直接届く仕組みの構築に努めた。また、生徒の探究テーマのリストや探究的な学びを支援するための資料やワークシート、HPのリンクなど、ALネットワーク校から提供いただいた資料を「まなび助ポータルサイトfor Teachers」に掲載することで、各校発の学びの共有に努めた。

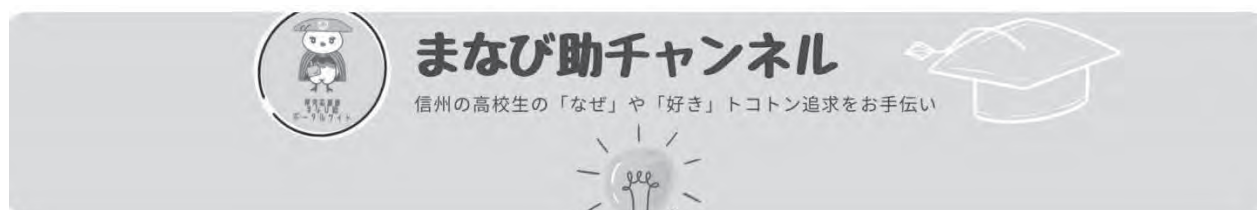
1 まなび助ポータルサイト

イノベティブなグローバルリーダーの育成に資する学びの提供としてこれまで実施した講座の様子をアーカイブ動画として編集し、ポータルサイトに掲載している。学校の枠にとらわれず、県内の希望するすべての高校生が高度な学びを享受できる「学びのプラットフォーム」構築にむけ、これまでに度制作したコンテンツの一例を掲載する。



2 まなび助チャンネル

信州の高校生の「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求する探究的な学びをサポートするために、YouTube チャンネルを開設。実施機関が主催するイベントや研修講座をアーカイブ動画として配信するほか、提供校など県内各校から寄せられた先進的な取組を動画で紹介している。



シリーズ 探究基礎講座		シリーズ 高校生が国際協力について考えてみた！	
ファシリテーション 研修		信州つばさプロジェクト トウィングシェア	
Try! Presentation in English		シリーズ 海外進学留学講座 for Students	
アカデミック プレゼンテーション 講座		シリーズ 海外進学留学講座 for Teachers	
学校×KDDI 共創 プロジェクト 「長野発！宇宙ビジネスを 考えてみよう！」		シリーズ 異文化コミュニケーション講座	
学校×KDDI 共創 プロジェクト 「南極から地域の将来 について考える」		哲学対話 「哲学的に探究する」	

信州 WWL グローバル講座の取組

イノベティブなグローバル人材の育成に資する学びの機会を提供することを目的に、実施機関が主催する「信州 WWL グローバル講座」をオンラインで実施した。今年度は生徒向け講座に加え、教員対象の研修講座としても開催した。これらの講座については録画し、学習動画としてポータルサイトに掲載した。また、12月には今年度3回目となる信州 WWL グローバルカフェを開催し、AL ネットワーク校の生徒が参集し共に学びを深めた。以下、本年度実施した講座について報告する。

信州 WWL グローバル講座実施要項

1 目的

- (1) 長野県 WWL コンソーシアム AL ネットワーク参加校生徒に、文理横断的な多様な科目等によるグローバルで高度な学びに触れる機会を提供し、自らの学びを深める機会とする。
- (2) AL ネットワーク内の他校生徒との交流を通じて互いに刺激をうけ、主体的に学ぶ態度の涵養を図る。
- (3) AL ネットワークの取組を広く県内高等学校に還元する。

2 主催

長野県教育委員会

3 事業内容

協働機関関係者、運営指導委員、AL ネットワーク校教員、卒業生、外部講師等による講義及びワークショップ等を実施する。

4 実施期日及び会場

第1回 令和7年6月14日（土）13:00～15:00（オンラインによる）
以降は講師と随時相談の上、設定する。

5 対象

- ・AL ネットワーク参加校の生徒及び教職員
- ・AL ネットワーク参加校以外の生徒及び教職員も参加可能とする。

6 参加方法

申込フォームから希望する生徒及び職員が直接申し込む。

7 参加費

無料とする。（但し、通信料等オンライン開催に参加するための通信費等諸経費に関しては参加者が負担する。）

8 令和7年度開講講座

(1) 「進路をデザインする一私の海外大学進学までのロードマップ」

実施日 第1回：6月14日（土） 13:00～15:00（オンライン）

内 容 県内の高校から海外大学等へ進学した先輩の進学に至るまでの経緯や高校時代の過ごし方、海外の入試事情を理解することで、海外進学を現実的な進路選択の一つとして考え、「自分らしい進路をデザインするヒント」を参加者と共に考える機会とする。

講 師 白井 まお 氏（米国ノックス大学 1年）

村木 裕太 氏（米国ペンシルベニア大学 1年）

参加校 長野、屋代、諏訪清陵、飯田、塩尻志学館、松本深志（生徒19名）

参加者 生徒19名



【参加者の感想】

- ・ 課外活動への意欲が高く、刺激になった。
- ・ 海外進学の準備は国内進学にも役立つと理解し、早めの対応の重要性を認識した。県内進学者の話も参考になった。
- ・ 受賞歴や活動計画の話が役立ち、自分の活動を見直して今後につなげたいと思った。
- ・ 参加だけでなく、何かを創り社会に変化をもたらすことが大切だと感じた。
- ・ 課題研究に本気で取り組む重要性を知り、海外進学には積極的な姿勢が必要とわかった。
- ・ 主体性を持って自分から取り組むことの大切さを学んだ。
- ・ 深い課外活動が魅力的で、人として成長できると感じた。情報提供に感謝し、他国の講座やオーストラリア進学事情、留学支援プロジェクトにも興味を持った。

【成果・今後の展望】

本講座は、海外進学および留学に関心を有する高等学校生徒を対象として実施された。参加者アンケート結果では、「とても良かった」が76.9%、「良かった」が23.1%となり、高い満足度であった。生徒の自由記述からは、海外大学への進学に際しては、学力のみならず課外活動・探究活動・主体性が重要視されることに対する理解の深化が認められ、高等学校時代の過ごし方や自己の強みの表現方法に関する意識の向上がうかがえる。また、先輩による具体的な体験談の共有が、参加者の不安の軽減及び主体的行動意欲の増進に寄与したとも思われる。今後は、参加者のニーズを踏まえ、体験談に加えて入試・奨学金・キャンパスライフ等に関する情報や、生徒の関心領域に応じた段階的な支援などを充実させていきたい。

(2) 海外進学留学講座 For Teachers

実施日 8月6日(水) オンライン

内容 海外大学等への進学を希望する生徒への指導に有用な情報を紹介し、海外の教育機関への進学に関する理解を深める。

講師 宇都宮 啓昭 氏 (ベネッセコーポレーション名古屋支社
高校営業本部 国内・海外進学情報担当)

参加校 須坂、長野、長野西、上田染谷丘、野沢北、諏訪清陵、飯田、
飯田風越、松本県ケ丘、松本筑摩 (通信制)

参加者 教員16名



【参加者の感想】

- ・TOEFLの目標スコアや国ごとの難易度、費用の違いなどが把握でき、大変参考になった。
- ・海外進学では自分自身について理解し、それを話せる力が必要であること、また国により制度が異なること、入りやすい方法で入学し編入するなど柔軟な選択肢が重要で、高校時代から計画的にスケジュールを考えることがポイントだと理解できた。
- ・海外の大学へ進む具体的な流れを知ることができ、国や大学ごとにシステムが大きく異なることに驚いた。
- ・メリットだけでなくデメリットもしっかり伝える重要性を感じました。語学力や数学力の不足によって予想外の費用が発生する可能性もあるため、信頼できる留学エージェントを選ぶことが必要だと感じた。
- ・留学までの流れが明確になり、生徒が自ら留学を進める際に一緒に考える手助けになると思う。
- ・今後は、国内大学進学後の留学についてより詳しく学べる機会が増えると、選択肢を生徒に提案しやすくなると思う。
- ・高校から直接留学する場合と大学入学後に留学する場合のメリット・デメリットや、国内大学の学歴の有無がどのように影響するか理解できれば、生徒支援にさらに役立つと考える。

【成果・今後の展望】

今年度は、海外進学支援の一環として教員向け講座を新設した。参加した教員からは、「とても良かった」が54.5%、「良かった」が45.5%と、全体的に高い満足度が得られた。アンケートからも、肯定的なコメントや複数回の開催を希望するコメントが多く寄せられた。

グローバルな人材育成を目指す本事業では、海外進学支援のさらなる充実も求められている。今後は、推薦書作成や出願スケジュール、奨学金といったテーマで、内容を充実させた教員対象の講座を開催していきたい。

(3) アカデミックプレゼンテーション講座

○全県の高校対象 オンライン講座

実施日 第1回：10月19日（日）

「入門編：論理の設計図をつくる」

第2回：11月1日（土）

「製作編：三部構成によるスライドの作り方」

第3回：12月6日（土）

「発表編：伝わる！発表の仕方」

内 容 学際的研究の場で必要とされるアカデミック（学術）プレゼンテーションについての講義と実践発表を通して、効果的なプレゼンテーションスキルを身に付けるとともに、これからの社会で求められる自らの考えを多様な他者へ英語で論理的に伝えるための発信力およびグローバルなコミュニケーション力の向上を目指す。

講 師 蝦名 恵 氏（グローバル教育企画社 ポストンブリッジ 代表）

参加校 長野、長野工業、上田染谷丘、軽井沢、野沢北、佐久平総合技術、諏訪清陵、岡谷南、下諏訪向陽、飯田、松本県ケ丘

参加者 21名（生徒18名、教員3名）



○出前講座@屋代高校

実施日 第1回（入門編）：12月22日（月）

第2回（製作編）：12月23日（火）

第3回（発表編）：12月24日（水）

講 師 同上

参加者 屋代高校 1年生120名（1組、4組、7組）



【参加者の感想】

- ・プレゼンテーションの方法だけでなく、海外の学びについても知ることができ良かった。
- ・スクリプトはスライドの単語を読むだけでなく、分かりやすく丁寧に説明することが大切だと思った。
- ・プレゼンテーションの重要なポイントを分かりやすく教えてもらい、特に聴衆と一緒に進める工夫が大事だと感じた。興味を持ってもらう工夫が必要だと思った。
- ・具体的な例で説明いただき、想像しやすく知識が身についた。質疑応答のマナーや、発表は語り手と聞き手の協力で作り上げるものだと感じた。
- ・「講座内容は英語・日本語どちらのプレゼンにも役立つと感じ、先生の具体的な進行やフィードバックがとても参考になりました。自分の授業でもフィードバックをもっと意識しようと反省しました。（教員）」

2 実施報告

- ・このような学ぶ機会を作っていただきまして、ありがとうございました。自分が高校生だった時には学ぶ機会のなかった分野ということもあり、生徒を導く立場の現在、手探りの状態です。大変勉強になりました。（教員）
- ・この講座を来年度はぜひ本校でも実施してもらいたい。総合的な探究の時間に開催できれば、多くの生徒が参加できるのではないかと感じた。（教員）

【成果・今後の展望】

今年度の重点項目として「学びの発信力強化」と「アウトプットの場の創出」を掲げ、英語によるアカデミックプレゼンテーション講座を開催した。昨年度からALネットワーク校以外の高校からの参加も増加しており、WWL拠点校で実践されていた本講座がオンライン化されたことで、県内の希望する生徒が受講できる機会が広がっている。

オンライン講座では、論理的思考力や英語による発信力、グローバルコミュニケーション力の向上を目指した。また、屋代高校の1年生120名を対象に出前講座も実施した。

県内の高校では、WWL ALネットワーク校やSSH指定校などでは、生徒が探究活動や研究成果を英語で発信する機会が増えてきている。一方、英語によるアカデミックプレゼンテーションについては体系的な指導は十分でなく、教員も手探りで行なっている現状がある。本講座に参加した教員からは、教員向け研修の実施を求める声も寄せられた。

グローバルな舞台で活躍することが期待される県内の高校生が、多様な他者と協働し、複雑な社会課題の解決に向かうことができる力を育成するため、来年度以降も本講座の継続実施を目指したい。

(4) 信州WWLグローバルカフェ

主 催 長野県教育委員会（実施機関）

実施日 12月14日（日）

会 場 松本市勤労者福祉センター 3-2会議室

内 容 県内の高校から集まった生徒・教員が一堂に会し、学校の枠を超えて互いに学び合う機会とする「長野県高校生探Qフェスティバル2025」を開催している。今年で3回目を迎える本フェスティバルにて、ICTを活用した本事業における学びの成果報告会である「信州WWLグローバルカフェ」を実施した。今年度は、「長野県の多文化共生について考える」をテーマにJICA東京・長野デスクとの共催により、高校生の取組発表及びJICA海外派遣OG、現地派遣員を交えてのワークショップを行った。当日の日程は以下の通り。

(1) テーマ

「語ろう、気づこう、動き出そう。高校生が多文化共生について考えてみた。」

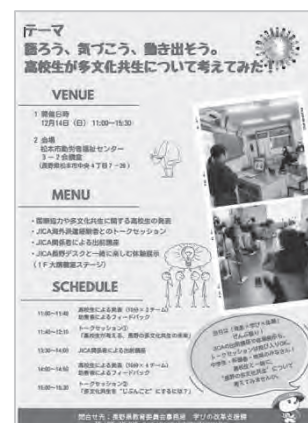
(2) 内 容

- ・高校生による多文化共生にかかる探究発表及びJICA関係者による助言



2 実施報告

- ・「2050年の長野県のありたい姿・高校生が考える多文化共生の未来」
トークセッション
 - ・JICA 長野デスク共催による体験展示（1F 大講義室ステージ）
- (3) 参加校及び参加者
長野、上田、上田染谷丘、野沢北、飯田 ODIE 長姫、松本県ケ丘
15名（当日の一般来場者は含まず）
- (4) 助言者
JICA 長野デスク ムーア美紀 氏、
JICA 東京 開発教育担当 高橋 雪子 氏
JICA 海外協力隊経験者 下村 幸 氏
JICA パキスタン事務所 中山 宏伸 氏（パキスタンからオンライン参加）
- (5) タイムスケジュール



時 間	内 容
10:30~	参加者受付、オンライン接続確認 等
10:50~11:00	オープニング
11:00~11:40	高校生による発表（10分×3チーム）・助言者によるフィードバック 松本県ケ丘、野沢北、長野①
11:40~12:10	トークセッション① 「高校生が考える、長野の多文化共生の未来」
12:10~13:30	昼食休憩、JICA 展示見学、館内参観（他の分科会見学等）
13:30~14:00	JICA 関係者による出前講座 「アフリカでの2年間」 JICA 海外派遣隊員 OG ガボン派遣 助産師 下村 幸氏
14:00~14:50	高校生による発表（10分×4チーム）・助言者によるフィードバック 長野②、上田、長野③、長野④
15:00~15:30	トークセッション② 「多文化共生を“じぶんごと”にするには？」
15:30~15:40	クロージング

生徒発表テーマ

No.	学校名	発表タイトル
1	県ケ丘	留学生と日本の学生が交流できる場をつくる！
2	野沢北	Bridging the Educational Gap Between Japan and Cambodia
3	長野	長野県の日本語教育！
4	長野	異文化をもっと身近なものにするには
5	上田	来日外国人に日本のルールを知ってもらうには
6	長野	長野県から考える多文化共生
7	長野	多文化共生社会を実現するには？

【参加者の感想】

- ・ハードルを下げる。一回話してみたら意外といけるということが多い。自分から積極的に。知る。周りを巻き込む。
- ・「違う高校の人々と自分が思うことを話し合えて有意義な時間となりました。いろんな視点に気付けたし、今まで気が付かなかったことも知ることができました。
- ・「2050年の長野県の未来」について話をした。友達も私も将来長野に居ない気がする。若者の流出が心配だと感じた。
- ・自分の考えを相手に伝えたり、テーマがあることによってより自分の中で多文化共生について考えることができたりしてよかったです。
- ・日本で『あたりまえ』のことは世界では『あたりまえではない』、『私たちにできることは何かある』、考えさせられました。とても分かりやすい講義でした。
- ・本当に世界中にいる人の立場で考えるためには、現地に足を運ぶべきだと思いました。今日の話聞いたことはモチベーションに、自分の将来に繋がりたいです。
- ・みんなすごい『多文化共生』について考えているんだなと感じた。共生するには、相手を巻き込んだり、勇気を出して“会話”をしたりしてみるといった主体的に、『自ら』を大事にすることがいいと思った。

【成果と今後の展望】

本イベントは、長野県内の高校生や教員、JICA 海外派遣経験者など多様な参加者が集まり、国際協力や多文化共生について主体的に学び合う貴重な機会となった。生徒による発表や JICA 関係者とのトークセッション、出前講座、体験展示を通じて、異なる視点や価値観に触れ、国際社会の課題を自分ごととして捉えるきっかけを得られた。JICA パキスタン事務所の派遣員とライブで繋ぎ、現地の現状を会場に届けていただいた。

参加生徒のアンケート結果からは「積極的に発言する」「相手を知る勇気を持つ」「自分の考えを伝える」といった主体的な姿勢への変化や、国際協力への関心の高まりがみられた。また、日本の常識が世界では必ずしも通用しないことに気づき、現地で実際に体験する重要性を認識できたとの生徒の変容も見られた。同年代の仲間との交流を通じて、共生社会の実現に向けた意識を高めるとともに、高校生同士の具体的なアクションが共有された。参加した生徒たちには、この学びをさらに広げ、地域社会にも還元していくことを期待したい。



オンライン授業等による学習機会の創出

将来、県内の生徒が学科や学校、地域や国の違いを超えて、希望する学びと多様な他者との協働的な学びの機会を享受できる環境整備の構築にむけ、各校の先進的な教育実践を共有する手段としてのオンラインの有効活用について研究を行った。

(1) 第8回北陸新幹線サミット

実施校 上田高校

期 日 6月21日（土）

参加校 （県内）長野高校、屋代高校、伊那北高校、松本県ヶ丘高校 計8名

上田高校参加者 38名

（県外）仙台城南高校、佼成学園女子高校、新潟県立三条高校、

金沢大附属高校、石川県立七尾高校、福井県立美方高校 計27名

内 容

基調講演：Inspire High 代表取締役 杉浦 太一氏

分科会助言者

第1分科会：吉村牧氏（長野県環境部ゼロカーボン戦略推進課）、
塚瀬進氏（長野大学環境ツーリズム学部長）

第2分科会：森俊也氏（長野大学企業情報学部長）

第3分科会：丹野傑史氏（長野大学社会福祉学部大学教育センター長）
岡宮美樹氏（長野工業高等専門学校講師）

第4分科会：Amy Zau(上田高校グローバル講師)、Bailey David(上田高校ALT)

【参加者の感想】

- ・自分とは全く異なった視点を提示され、深く感心しました。自分の視野の狭さを痛感し、もっと自分に何ができるか、高校生の今何ができるかを改めて考えるいい機会になりました。
- ・リモート参加校の発表が聞き取りにくかった。
- ・運営生徒の方が校内を案内してくれたり、分科会も丁寧に進行してもらったり、本当に良かったです。

【成果・今後の展望】

県内・県外・海外の高校生同士が、対面及びオンラインによる意見交換を通じて学びの輪を広げ、グローバル課題について議論し、課題解決のために自分たちに何ができるかを提言にまとめて発信する。「環境問題」「教育格差・貧困」「地域活性化」をテーマにした3分科会と、英語による発表・ディスカッションが行われ、参加生徒による活発な意見交流が行われた。

県内外の高校生の発表交流を通して、多くの新しい気づきを得て、今後の高校生や将来の展望を意欲的にとらえる生徒が多く見られた。また、対面・オンラインを通して

2 実施報告

初対面の人とのコミュニケーションを通して、機会を捉えて臨機応変に対応するスキルを身に着ける貴重な機会となっていた。

参加した様々な学校の高校生の実践内容に触れることによって、限界を設けずに挑戦をすることの大切さに気付き、自分も何か行動を起こしたいと多くの生徒が前向きにとらえていた。

対面とオンラインのハイブリッド開催に伴う、音声の共有の面で十分でない面が顕在化していたので、次年度へ向け関連機器やシステムの充実を図るために努力したい。



(2) 上田高校グローバルスタディーズ (GS) 報告会

本活動は、2年生がGS IIにおいて遂行した課題研究の成果発表及び討議等の過程を通じて、1年間の探究活動の総括を行うことを目的としている。1年生は、2年生による成果発表の聴講並びに討議への参加を通じて、次年度のGS II 課題研究に対する主体的な取り組み姿勢の醸成を図る。以下に有志生徒による英語プレゼンテーションを行ったEnglish Room 分科会について報告する。

実施校 上田高校 324教室

期 日 1月28日(水) 12:30~16:15

発表者 上田高校2年8名

参加者 上田高校1年生20名 ほか地元中学生、本校職員

ファシリテーター: ALT 3名、JTE 1名、

発表テーマ:

- Why are fermented foods good for your health?
- Designing Nature into Modern Society: Reimagining Nature-Inclusive Urban Design
- Realizing telemedicine x Eliminating technological gaps
- Does music improve concentration?
- How can we reduce food waste at farm shops and at home?
- Thinking about disasters due to global warming: Global warming and disaster mitigation

【参加生徒の感想】

- この経験で自信がついた。今後も同様のイベントに参加したい。
- ディスカッションの時間はちょうど良かったが、質疑応答の時間が少し短かった。

- ・練習を重ねたから当日の発表がうまくいった。
- ・発表者の話し方がとても明瞭で流暢だった。
- ・発表者がとても魅力的だった。
- ・最初は緊張したけど、日本語のところより英語の方が楽しかった。

【ALTファシリテーターの感想】

- ・The students' research exceeded my expectations.
- ・I was amazed that the students could handle the Q&A time so well.
- ・I think the low-pressure and relaxed atmosphere made it easy for students to open up and talk.
- ・I appreciated changing seats after the 1st session and talking to a variety of students.

【成果・今後の展望】

本校グローバル担当講師と県内高等学校所属の外国語指導助手（ALT）4名がファシリテーターとして参加し、テーマごと課題についてディスカッションを行った。今年度は平日実施ということもあり、ALTファシリテーターの調整や1年生の参加者募集等に課題を残したものの、参加者の満足度は非常に高く、発表のみならず、英語による対話を通じた学びの深化につながった。

本報告会は県内高等学校にも公開するとともに、今年度は地元中学生も招待することで、高校生による探究学習活動の実際の様子を体験的に理解できる機会となった。



(3) 専門科目「福祉」におけるオンライン同時双方向授業

今年度は、教育課程委員の協力により、阿南高校と塩尻志学館高校の3年生による「福祉」授業オンライン合同授業を実施した。本年度の教育課程研究の重点テーマ「主体的・対話的で深い学びの実現に向けたICTの効果的な活用」について研究の一環として、福祉を学ぶ両校の生徒がGoogle MeetとCanvaを活用し、オンラインで合同授業を実施した。授業の概要と当日の流れは以下の通り。

- 実施校：阿南高校 3年生 地域探究（福祉系）9名
 塩尻志学館高校 3年生「介護福祉基礎」選択者13名
 科目：阿南高校：「こころとからだの理解」（1単位）
 塩尻志学館高校：「介護福祉基礎」（4単位）



内 容：

事前準備：第1回ミーティング（10月23日）アイスブレイク、自己紹介

第2回ミーティング（11月18日）意見共有、ディスカッション練習

導 入：本時の目標、ワークシート及びCanvaホワイトボードへのアクセス確認

展 開：

- ・新設公園整備予定地の視察をもとに、障がいのある方にとって利用しやすい公園について発表。（阿南高校）
- ・盲導犬ユーザーと実施した校内バリアフリー調査を報告。（塩尻志学館高校）
- ・両校の発表内容について「共感したこと」「質問したいこと」「新たなアイデア」をCanvaホワイトボードに入力し、ディスカッションを実施。

ま と め：ディスカッション内容の振り返りと両校の教員からのフィードバック。

【生徒の感想】

- ・普段関わらない高校とディスカッションできて楽しかった。
- ・自分たちとは違う視点で学習していることが興味深かった。
- ・オンラインで聞きにくい部分もあったが、要点を伝え合い意見交換できて良かった。
- ・同じテーマでもアプローチが異なり、新しい学びや発見が多かった。
- ・他校の意見や発表を聞くことで自分の視野が広がった。
- ・先生と生徒ではなく、生徒同士で授業を進めることで共感や新たな発見につながった。
- ・これまで公園と福祉を結びつけて考えたことがなかったが、新しい視点を得られた。
- ・直接会って交流する機会も持ちたいと感じた。

【成果と今後の展望】

今回の取組により、ICTを活用することで、遠隔地の生徒同士が主体的かつ対話的に学び合う機会を創出できた。特に、県内でも選択者が多くない福祉等の専門教科の授業や中山間地域の小規模校において、他校の生徒との交流や多様な他者との意見交換を通じて、自分とは異なる視点や考え方を学ぶ機会が得られたことは大変意義深く、学びをもっと深めたいと希望する生徒の学習機会の保証にも有益であることが明らかとなった。今後は、本取組について広く県内の教員と共有していきたい。また、遠隔地の学校同士による同時双方向型授業のさらなる実施や、外部講師による講座の共同開催などを通じて、県内の全ての高校生に等しく学びの機会を提供できるよう努めたい。これにより、各校において教員自身がICT活用の研鑽を深め、生徒の主体的な学びを促す授業づくりに取り組むことを、県教育委員会として引き続き支援していきたい。



提供校 5 校の取組

実施機関では、今年度も 5 校の提供校と連携し、本県の個別最適な学習環境の構築と高度な学びの提供に資する取組として、県内の高校の特色ある教育活動や学習プログラムの共有について研究を進めた。

下記に、本事業で掲げる主な 3 項目について、各校の取組を報告する。

【提供校の主な取組】

取組 1：自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等

keywords：デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画作成、
オンライン配信 等

取組 2：学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び

keywords：他校との合同授業（オンライン・対面）、合同発表会、他校（県内・県外・
海外）との連携企画 等

取組 3：AL ネットワーク拡充に向けた取組

Keywords：他校との連携：県外高校、海外の姉妹校などの関係校、機関等との連携

1 蘇南高等学校 【資料スライド 1～6】

(1) 自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等（スライド 2）

- ・Wi-Fi 機器を活用した探究発表や学年発表会をオンライン配信。発表スタイルの向上とクリアな収録を実現。
- ・発表内容は「まなび助ポータルサイト」に今後掲載予定。
- ・全県への Zoom 配信や、地域住民・中学校生徒を招いた発表会も実施し、地域連携・中高連携を推進。

(2) 学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び（スライド 3）

- ・名古屋外国語大学とのグループディスカッションや「好きなこと会議」など、大学生と高校生が交流する機会を創出。
- ・生徒が自分の興味や経験を発表し合い、多様な視点や考え方を吸収し、進路の幅を広げている。

(3) AL ネットワーク拡充に向けた取組（スライド 4～6）

- ・台湾「臺中市立西苑高級中學」とのオンライン交流や、海外語学研修でのプレゼンテーションを実施。
- ・北海道や山梨県の高校との連携・視察、遠隔授業の受信、探究発表会の発信依頼など、県外・海外とのネットワーク拡充を積極的に推進。

2 伊那北高等学校 【資料スライド7～10】

(1) 自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等（スライド8）

- ・「コラボ授業」実践風景を撮影し、まなび助ポータルサイト for Teachers に投稿。教科横断授業を通じて、県内教職員の教材研究に資する情報を提供。
- ・生徒からは「教科の枠を超えた学びが面白い」「新しい学びができた」など高評価。

(2) 学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び（スライド9～10）

- ・台湾国立臺南第一高級中学との対面交流やオンライン交流を実施。坊主めぐりや折り鶴作りなどの文化体験を通じて海外への興味・関心を高めた。
- ・カンボジア研修では、学年やクラスを越えたつながりや個々の成長が見られた。参加生徒は現地の子どもたちとの交流を通じて新たな視点や広い視野を獲得。

(3) AL ネットワーク拡充に向けた取組（スライド9～10）

- ・台湾やカンボジアなど海外の学校との交流を積極的に実施。オンラインや対面での交流を通じて、異文化理解や多様な価値観に出会う。

3 野沢北高等学校 【資料スライド：11～16】

(1) 自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等（スライド12～13）

- ・「ミニ探究 day」や「探究基礎」と「探究」の連携を強化し、探究サイクルの経験を重視。
- ・海外研修報告会（韓国、カンボジア、マレーシア等）をLHRで全校向けにプレゼン、WWL関係校向けに配信。
- ・生徒のマインド変容や協働の経験を重視し、失敗から学ぶ姿勢を育成。

(2) 学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び（スライド14～15）

- ・普通科探究発表会や理数科課題研究発表会を県内外の会場で実施し、他校生徒と交流。
- ・全国高校生フォーラムや日韓高校生交流など、他校との合同発表やディスカッションを積極的に実施。

(3) AL ネットワーク拡充に向けた取組（スライド16）

- ・韓国の高校生との交流や、今後のチョンソン高等学校との交流計画など、海外校とのネットワーク拡充を推進。

4 松本県ヶ丘高等学校 【資料スライド17～20】

(1) 自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等（スライド18）

- ・探究科課題探究発表会や全国高校生フォーラムオンライン報告会を同時双方向で実施。
- ・保護者や中学生、教員、企業など多様な参加者が発表に参加し、進路意欲や学びへの関心を高めた。
- ・英語での発表や質疑応答も実施し、国際的な発信力を育成。

(2) 学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び（スライド19）

- ・松本美須ヶ丘高校とのオンライン合同授業や、能登臨海実習で石川県の高校と交流。
- ・金沢大学や能登里海教育研究所などと連携し、実習・発表会を実施。

(3) AL ネットワーク拡充に向けた取組（スライド 20）

- ・小論文講座や国際理解講座（ペルー編）など、海外や地域の機関と連携した講座を実施。
- ・動画をデジタルコンテンツとしてまなび助ポータルサイトに提供。異文化理解や発信力の向上を図る。

5 上田高等学校 【資料スライド 21～30】

(1) 自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等（スライド 23～26）

- ・生成 AI プロンプトハンズオン研修をデジタルコンテンツ化。生徒の AI 活用スキルの向上のための教材として活用。
- ・台湾研修旅行事前学習ワークショップをオンラインで実施。動画と教材をセットで提供。

(2) 学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び（スライド 27～29）

- ・北陸新幹線サミットを対面・オンラインのハイブリッドで開催し、県内外・海外の高校生と意見交換や発表交流を実施。
- ・グローバル課題について議論し、課題解決の提言をまとめて発信。

(3) AL ネットワーク拡充に向けた取組（スライド 25～30）

- ・台湾研修や県外高校との交流を通じて、国際的なネットワーク拡充と異文化理解を推進。
- ・アカデミックプレゼンテーション等のオンライン配信、他校との合同企画グローバルプログラム等の実施により他校との連携を強化。
- ・グローバルスタディーズ（GS）報告会では、ALT をメンターとして招聘し、英語によるプレゼンテーション及びディスカッションを実施。
- ・GS 報告会を地元中学生にも公開することで、中学生に高校での高度な学びや探究的な学びを体験する機会を提供。

提供校の取組

蘇南高等学校

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5～R7) 蘇南高等学校 2

自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等
 ~keywords: デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画配信、オンライン配信 等~

Wi-F機器を活用した探究発表



Wi-F機器の活用

Wi-F機器の活用により、発表スタイルの向上と、よりクリアな収録をすることができた。
 まなびすけ信州等に掲載予定

総合探究 学年発表会 オンライン配信



総合探究発表会 発表風景

全県へのZoom配信、コンソーシアム委員+地域の方+南木曾 中学校生徒を招いての総合探究発表会

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5～R7) 蘇南高等学校 3

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び
 ~keywords: 他校との合同授業(オンライン・対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等~

名古屋外国語大学とのグループディスカッション



【第0回 好きなこと会議】
 R8.1.15(木)LHRにて、名古屋外国語大学の学生主催の企画に本校の生徒も参加し、自身の好きなことを発表し合った。



話し合いをする中で、自身の考えや経験を交えながら自身に合った今後の進路について話し合った。今回は、合同の話し合いで出た回答をもとに、同じについて取り組むのが機軸中。

【きっかけ】
 今回の企画のきっかけとして、名古屋外国語大学の学生が大学の講義にて、自身の探究活動を通して、自分を知りたい、自分を知りたい、自分の進路選択に良い影響があった経験から企画した。背景として、高校生の時代は気軽に相談できなかつた経験や、もっと早くに知っておけば多様な進路選択にもつながり得たこととして、学生自らが企画した。

【わらい】
 高校生が、年齢の近い学生と気軽に話し合うことにより、対談員とは違った視点や考え方を伺取ることができたり、多様な進路選択にもつながり得ることとして、今回の企画に本校も参加した。

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5～R7) 蘇南高等学校 4

AIネットワーク拡充に向けた取組
 ~ keywords: 他校との連携、県外高校、海外の姉妹校などの関係校・機関等との連携 等 ~

台湾「臺中市立西苑高級中學」と交流



・来月2月6日(金)、海外語学研修に参加する10名が、木曾を紹介するプレゼンテーションを行い、お互いの国、地域についてオンラインで交流する予定です。当日は2つの教室をオンラインで繋ぎ、ビデオカメラと360°カメラを使い、さまざまな角度からの映像を使ってライブ感のある交流を目指します。

蘇南高校: 関直哉 教諭、コーディネーター 村上 樹 教諭
 西苑高級中學: 王 雅駿 教諭
 協力: 長野県観光機構 パブリック事業部(山崎 宏 氏)

ALネットワーク拡充に向けた取組

～ keywords: 他校との連携、他校との連携、他校との連携等 ～

【平取高等学校】令和7年度北海道連携交渉・視察
北の大地で学校設定科目「アイヌ文化」を学べる全国唯一の学校」



オンラインで授業を受信するための教室(左)
校舎全面改装「地域みらい留学」により、町支援で教室完備(右)

・「アイヌ文化(各学年1単元)」は、平取町の職員(まちづくり課)に地域コーディネーターを依頼し、学校内の担当者2名(教務主任、推進係)と連携することで授業を展開している。

・「総合的な探究の時間」では、1年次に北海道大学(山中康裕教授)による講話や、探究の基礎的なスキルに関して学ぶ。交渉後の取り組み

・本校探究発表会を発信する依頼(今年度は日付が合わず、良い返事を得られなかった)。

・北海道の高校の発表にオンラインで参加を依頼。

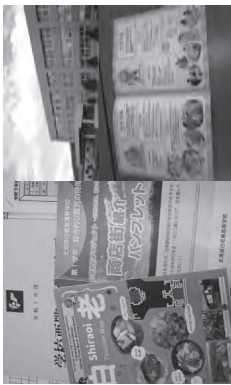
・教員勉強会を想定して、遠隔授業を受けられる教室を設備。
地域コーディネーターが興味し、探究教室としていく計画。
(週隔で情報・英語・数学などを受信準備中)

・教育課程を見直すカリキュラム編成委員を充足。総合探究の単位数を増やし、卒業単位なども見直す。

ALネットワーク拡充に向けた取組

～ keywords: 他校との連携、他校との連携、他校との連携等 ～

【白老東高等学校】令和7年度北海道連携交渉・視察
「地域における学びを重視する高校」「多様な学びを重視する学校」を目指す学校



総合探究の時間を取り組んでいる、白老商店街パンフレットなど(左)
校舎、生員就職希望の生徒であるため、進学希望者は若小牧へ(右)
山梨県立鹿川高校のパンフレットを参考に学校を広報(右)

・1年次ではひとし、2年次では「ごごじ」(おびせ町)内で働いているのか、今の仕事を維持するまでの背景について、地域に出向いてインタビューを行う(3年次では「まち(くら)」に集点をあて、探究サイクルを通して、地域(町)と学校で「キャリア教育」の築地づくりを行う。

・教員が手を加え過ぎないという方針を貫く一方で、「商店街紹介パンフレットのような成果物を作りあげていくことで、生徒が自己肯定感、達成感を抱ける(変化でできるきっかけを与える)ものを成果物として残す。

・遠隔授業の受信を(過去に)申請しており、北海道有朋高等学校(遠隔センター)から「情報」などの授業を受信して授業を行っていた。該当教科についてはClassroom上のMeetを用いて授業を受信しており、授業コマが少くない教員が監督、接続を行っていた。

交渉後の取り組み
・本校探究発表会を発信する依頼(今年度は日付が合わず、良い返事を得られなかった)。
・北海道の高校の発表にオンラインで参加を依頼。

提供校の取組

伊那北高等学校

自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等

～ keywords: デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画作成、オンライン配信等 ～

「コロナ授業」実践風景の撮影およびポータルサイトfor Teachersへの投稿



まなびポータルサイトfor Teachersに本校の授業実践を掲載し、県内の教職員の教材研究に資することを目的に、教科横断授業(本校では「コロナ授業」と呼称)を行い、撮影した。

以下、生徒感想

- ・英語と社会で教科の概念を超えた学びや考え方があったりして、面白いと思います。
- ・教科の括りを超えた学びが面白かったし、考え深い内容で話し合いが盛り上がった。
- ・教科書の知識だけでなく、一つの分野にとらわれず一歩踏み込んで考えてみるという新しい学びができたことは貴重な経験だったと思う。

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協力的な学び
 ~keywords: 他校との合同授業(オンライン・対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等~

台湾 国立臺南第一高級中学(高校)との交流



オンラインでの交流を通じて、互いの国の文化を紹介しあつた。日本文化を英語表現に置き換えて伝えることに苦戦しながらも、未知の文化に触れ、多様な価値観を体験し、多様な価値観を受容することの重要性を感じる生徒たち。

SISケラバガデザインとの交流



坊主めぐりや被災地に送る折り紙作り等を行つた。過去5年で初の対面交流。交流後もやり取りを続ける生徒も。自身の対話を通じて、海外への興味関心が高まった様子。

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協力的な学び
 ~keywords: 他校との合同授業(オンライン・対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等~

伊那北高校主催 カンボジア研修



満足度はほぼ100%(1名が70%、2名が90%)。海外研修がカンボジアだったことについては9割が「とてもよかった」「割がよかった」と回答。事前学習や交流・発表、7日間を通して生徒どうしの学年クラスを越えたつながりや個々の成長が現れた。研修だった。
 ・交流や留学を通して、新たな視点と広い視野を持つことができ、行つて良かったと思えた。
 ・ポルポト政権の歴史や在連国にはない課題と直接接して、発展途上国に対するイメージを大きく変えるきっかけになった。
 ・物よりも海外の同年代から受ける刺激ははるかに大きいから現地の子どもたちと多く交流できて本当によかった。

提供校の取組

野沢北高等学校

自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等
 ~keywords: デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画作成、オンライン配信 等 ~

「三二探究day」

「探究基礎」と「探究」のつながりが不明確という振り返り
 →「探究」の流れの「失敗」を「探究基礎」で学ぶ

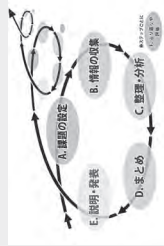
時期:1年4月

形式:1日まるごと使つての「探究」サイクルの経験

目的:「探究」のサイクルを経験する

「失敗」から「探究基礎」の学びにつなげる

「仲間との協働」を経験する



生徒感想:「信用できる情報を収集しなきゃ」、「発表するとき、説明するときの根拠を明確に」、「参考文献・URLをきちんと掲載することの必要性」等 → 探究基礎への動機付け

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 野沢北高等学校 13

自校のキャリアコラム共有・学習コンテンツ等の提供等
 ~ keywords : デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画作成、オンライン配信 等 ~

海外研修報告会

信州つばさプロジェクト・韓国、カンボジア、マレーシア
 Change Our Mindset(本校独自の海外研修) *昨年度カンボジア、今年度バンングララデシュ
 報告会実施・令和7年度5月1日
 形式：LHRで全校向けにプレゼン、WWL関係校向けに配信、本校探究アドバイザーからの講評



バンングララデシュ現地の学生との交流
 Daily Sun youtubeチャンネル



生徒感想：「知見が広がった」「今まで日本にいて当たり前、普通と思っていたことが、当たり前ではないこ
 とを学んだ」「海外で働くのもいいと思った」等 マインドの変容

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 野沢北高等学校 15

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び
 ~ keywords : 他校との連携(オンライン・対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等 ~

全国高校生フォーラム 参加



令和7年12月14日(日)
 国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)
 参加生徒2名：「たまたま英語が話せるというだけでなく、自分の意見や提案をどのような伝え方をすれば人に伝
 わりやすくなるかを意識することが大切」「他校の発表から新しい視点をたくさん知ることができた」「ディス
 カッションで他校の英語力に圧倒された」 etc.

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 野沢北高等学校 14

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び
 ~ keywords : 他校との合同発表(オンライン・対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等 ~

普通科探究発表会



令和7年12月20日(土)
 長野県立誠道館
 主会場15か所に分かれて、カベ二で
 撮影して発表

理数科課題研究発表会



令和8年1月31日(土) 実施予定
 品川会館(本校同窓会館)
 クループごとホールで発表

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 野沢北高等学校 16

AIネットワーク拡充に向けた取組
 ~ keywords : 他校との連携、県外高校、海外の姉妹校などの姉妹校・機関等との連携 等 ~

韓国の高校生との交流



令和7年12月23日(火) ソニール情報高等学校生徒9名と本校生徒9名の交流
 本校職員が日韓教職員交流会(11/8 日韓・アジア文化)主催に参加したことをきっかけに交流がスタート
 今後(令和8年4月以降)チヨンソン高等学校との交流も計画中

提供校の取組

松本県ケ丘高等学校

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 松本県ケ丘高等学校

自校のカリキュラム共有・学習コンテンツ等の提供等
 ~ keywords : デジタルコンテンツ教材、ポータルサイト、動画配信、オンライン配信 等 ~

探究課題探究発表会(同時双方向によるオンライン)



課題探究発表会の様子
 参加者: 保護者、中学生、教員、教育委員会、企業、本校探検科1、3年
 ・あためて魅力を強く感じ進路実現の意欲が高まった(中学生)
 ・発表に引き込まれた(教員)
 ・中学校の総合的な学習の時間にも高校の探究につながる学びとなるよう、御校の良風から学び、努力したい(中学校教員)

全国高校生フォーラムオンライン報告会



全国高校生フォーラム当日の発表の様子
 開催日時: 令和8年1月30日(金)午前
 実施形態: 対面実施(同時双方向によるオンライン)
 実施内容: 本題で発表、その後質疑応答を実施
 参加申込: 参加までご連絡ください(02-63-32-1142)
 ZoomミーティングIDとパスワードをお知らせします

学校の枠を超えた学び、多様な他者との協働的な学び
 ~ keywords : 他校との合同授業(オンライン/対面)、合同発表会、他校(県内・県外・海外)との連携企画 等 ~

(公共) におけるオンライン合同授業

- 1 参加校: 松本県ケ丘高校 松本美須ヶ丘高校
- 2 実施形態: オンラインによるオンライン
- 3 授業者・講師等: 松本美須ヶ丘高等学校 教諭 島津健太郎
 授業者: 松本美須ヶ丘高等学校 教諭 加藤康
 講師: 信州大学教育学部 松島 恒照 氏
- 4 参加者: 松本美須ヶ丘高等学校 国際探検科 2年
 松本美須ヶ丘高等学校 普通科 3年
- 5 感想等:
 ・協議に基き、お互いの意見が出たときには、自分の意見、グループの意見を伝えることができ、お互いに意見を聞き、考え、討論することができた。
 ・相手の意見は新しい視点が多くて勉強になった。
 ・お互いの意見について質問し合える時間があればもっと面白そう。

能登臨海実習(令和3年~)

- 1 連携 協力
 金沢大学環境日本海海産物研究センター、
 能登臨海教育研究所
 石川県立二水高校
 のと海芋ふれあいセンター
 能登里通コミュニケーション
- 2 実施内容
 (1) 本校で栽培
 (2) 能登研修
 ・臨海実習
 ・能登里通ふれあい海洋生物の生態を観察し、分選装置で採育活動で使用する生物を採取
 ・採育実験
 終日実録等探究活動
 ・発表会
 発表会の感想を発表、二水高校、七尾高校と交流



事前講義の様子



合同発表会の様子

信州WWL 個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業 取組報告(R5~R7) 松本県ケ丘高等学校

ALネットワーク拡充に向けた取組
 ~ keywords : 他校との連携、県外高校、海外の姉妹校などの関係校・機関等との連携 等 ~

小論文講座「横浜寿町」ワールドワークゼミ



ワールドワークの様子(令和5年度)

実施形態: 対面にて実施
 実施期間: 2月5日(木)~6日(金)
 参加者: 本校生徒、Tera Klaso生徒
 教材内容: 動画をデジタルコンテンツとして提供

国際理解講座ペルー編の開催



ペルー編講師陣集いの集合写真

実施形態: 対面にて実施
 講師: JICA嘱託員 井上清司 さま(ペルー出身)
 生徒の感想:
 ・伝えたい内容、対象によって伝える方法や技術を変えることが必要になることを知り、今後の授業の場にも活用したいと思った。
 ・好きな人に発信するのではなく、嫌いな人にも伝えようとする姿勢が大切だと思った。

提供校の取組

上田高等学校

WWL個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業

令和7年度 事業取組報告

長野県上田高等学校

① オンデマンド配信による学習機会の創出

取組1 生成AIプロンプトハンズオン研修

実施期間：令和7年4月23日（水）・30日（水） 13:45～15:45

場所・対象生徒：長野県上田高等学校 2学年HR教室
2学年生徒全員（8クラス、320名）

実施形態：オンラインを活用した4クラス一斉配信授業

講師・授業者：NTT東日本の担当者

<内容・成果と課題など>

- カリキュラム概要
- 1 生成AIとは
 - 2 プロンプトエンジニアリングの実践
 - 3 プロンプト作成演習
 - 4 各種プロンプトテクニックの紹介

課題探究のテーマ決めの前段で、生成AIを効果的に活用し、単なるテーマの設定にとどまらず、具体的な取り組みの設計を総合的に組み立てることができるようになることを本年度のゴールに設定した。本研修は、そのための活用スキルを身に付けることを目的とし、専門の担当者による講義と実践演習を行った。本研修の内容については、著作権の関係そのままの形で再現することはできないが、本校情報担当の職員を中心に研修を行っており、次年度以降は、校内の職員の手で自走的に研修を進めることを想定している。



テキスト生成AIで出来ること

- テキスト生成AIの活用により、単に「文章生成」だけでなく「授業計画」の作成も可能になる。
- 授業計画の作成に活用することで、各科目の授業で活用している。



25

① オンデマンド配信による学習機会の創出

取組 2 2学年台湾研修旅行事前学習ワークショップ

実施期間：令和7年11月12日(水)・18日(火) 13:45～14:40

場所・対象生徒：長野県上田高等学校 2学年HR教室

2学年生徒全員(8クラス、320名)

実施形態：オンラインを活用した8クラス一斉配信授業

講師・授業者：G I 講師 Amy Zau

<内容・成果と課題など>

1回目：学校交流でのコミュニケーション力を高めよう

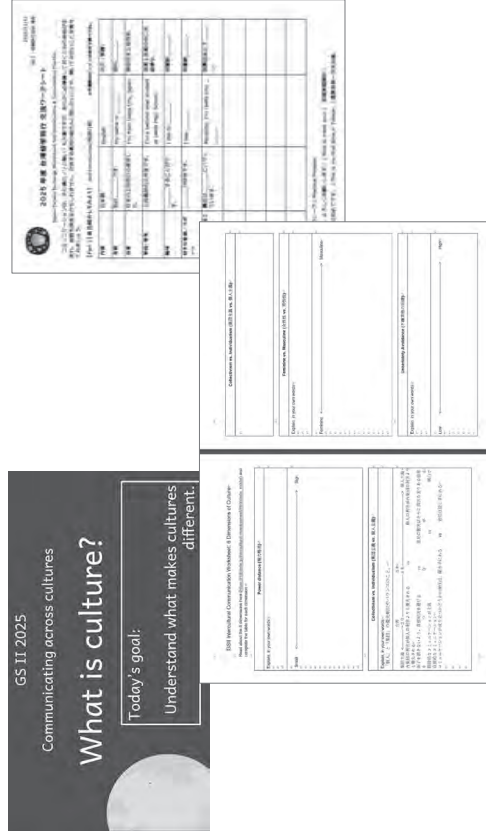
2回目：What is culture?

2学年で実施した台湾研修旅行の事前研修として、GS IIの時間を活用し、オンラインで行った授業をまとめました。

講座の動画と使用教材をセットして提供することができます。

昨年度実施した内容をベースによりコンパクトにブラッシュアップした内容となっています。

26



27

②-2 他校を招聘しての発表交流会等の取組

取組 1 第8回 北陸新幹線サミット

実施日：令和7年6月21日(土)

場所：長野県上田高等学校

実施形態：対面とオンラインによるハイブリッド開催

講師・授業者

基調講演：Inspire High 代表取締役 杉浦 太一氏

分科会助言者

第1分科会

吉村敦氏 (長野県環境部ゼロカーボン戦略推進課) 塚瀬進氏 (長野大学環境ツーリズム学部長)

第2分科会

森俊也氏 (長野大学企業情報学部)

第3分科会

丹野隆史氏 (長野大学社会福祉学部大学教育センター長)

第4分科会

岡宮美樹氏 (長野工業高等専門学校講師)

Amy Zau(上田高校GI)、Bailey Davd(上田高校ALT)

28

②-2 他校を招聘しての発表交流会等の取組

取組 1 第8回 北陸新幹線サミット

参加者

県内参加校

長野高校、

県外参加校

伊那北高校

計 8 名

仙台城南高校、

佼成学園女子高校、

新潟県立三条高校、

金沢大付属高校、

石川県立七尾高校

福井県立美方高校

計 27 名

本校参加者

計 38 名

内容

県内・県外・海外の高校生同士が、対面及びオンラインによる意見交換を通じて学びの輪を広げ、グローバル課題について議論し、課題解決のために自分たちに何ができているかを提言にまとめて発信する。「環境問題」「教育格差・貧困」「地域活性化」をテーマにした3分科会と、英語による発表・ディスカッションを行う

②-2 他校を招聘しての発表交流会等の取組

取組1 第8回 北陸新幹線サミット

当日の様子・課題・今後の展望 など

- ・県内外の高校生の発表交流を通して、多くの新しい気付きを得て、今後の高校生や将来の展望を意欲的にとらえる生徒が多かった。
- ・対面・オンラインを通して初対面の人とのコミュニケーションを通して、機会を捉えて臨機応変に対応するスキルを身に着ける貴重な機会となっていた。
- ・参加した様々な学校の高校生の実践内容に触れることによって、限界を設けずに挑戦をすることの大切さに気付き、自分も何か行動を起こしたいと前向きにとらえる生徒が多かった。
- ・対面とオンラインのハイブリッド開催に伴う、音声の共有の面で十分でない面が顕在化していたので、次年度へ向け関連機器やシステムの充実を図るために努力したい。



信州 WWL ルーブリックに基づく生徒アンケート分析

自分の強みを知る自己分析- What' s my greatest strength?-

1 調査の目的

本事業は、信州 WWL ルーブリックに示される3つの柱に基づく資質・能力を備えた生徒の育成を目的として、令和2年度より研究を進めてきた。具体的には、「社会の創造者としての力」「自分らしく生きる力」「グローバルなマインドセット」という3つの資質・能力の育成を目標とし、これまで整備してきた学びのプラットフォームを、県内のどの学校の生徒も参加できる形に再構築することを目指して取り組んできた【スライド2】。

令和2年度から6年間の研究期間を経て、本事業を通じて生徒にどのような資質・能力を育成できたのかを検証することを目的として実施したアンケートの結果を、下記に報告する。

WWL 事業により育成を目指す生徒の資質・能力（3つの柱と11の項目）

(1) 社会の創造者としての力

- ①課題発見力
- ②協働力
- ③最適解を創り出す力
- ④アクションを自ら起こす力
- ⑤新しい価値や社会を創造する力

(2) 自分らしく生きる力

- ⑥自らの行動を振り返る力・レジリエンス
- ⑦人生を構想する力

(3) グローバルなマインドセット

- ⑧地域に根差したアイデンティティ
- ⑨グローバルなマインドセット
- ⑩世界に通じる教養
- ⑪世界に通じるコミュニケーション力

2 アンケート調査の概要

実施期間：令和7年10月～12月

対象：長野県内の高校生181名（延べ数）

内容：「WWLルーブリック」に基づく44項目の質問（事前・事後比較）

方法：Googleフォームによる

本事業では、信州 WWL ルーブリックに基づき、育成を目指す資質・能力を「社会の創造者としての力」「自分らしく生きる力」「グローバルなマインドセット」の3つの柱に整理した【スライド5】。令和3年度に作成したルーブリックを今年度ブラッシュアップし、県教育委員会の実施する様々な事業と紐付けて活用した。

アンケート調査は、県内高校生 181 名を対象に、11 の資質・能力を 4 つのフェーズに分類した 44 項目の質問を用いて、プログラム参加前後で実施した。Google フォームを用い、自己評価（できる＝3・どちらでもない＝2・できない＝1 の 3 段階）を集計した【スライド 6, 7, 8】。

【スライド 7, 8】では、WWL ルーブリックの全体像とアンケート内容を掲載している。左側に「育てたい資質・能力」の 3 つの柱と 11 項目、右側にそれらをルーブリックに落とし込んだ具体的な評価基準が示されている。44 項目の質問は 4 つのフェーズに分けて設計されており、事前・事後で同じ質問に回答することで成長度を測定した。

3 アンケート結果に見る生徒の自己認識

アンケート結果より、全ての項目で成長幅は大小あるものの、肯定率（「できる」と回答した割合）は増加した。特に「地域に根ざしたアイデンティティー」「新しい価値や社会を創造する力」「課題発見力」で伸び率が高かった。一方、「グローバルなマインドセット」「協働力」はもともと高水準であったため、伸び幅は小さかった。

(1) 11 項目の資質・能力における肯定率の変化と具体的な成長内容

アンケートの結果については、11 項目の資質・能力ごとの肯定率の変化を棒グラフや折れ線グラフで示した。「課題発見力」は事前 58.1%→事後 76.1%、「地域に根ざしたアイデンティティー」は事前 43.2%→事後 62.0%、「新しい価値や社会を創造する力」は事前 46.8%→事後 65.1%と、いずれも大きな伸びが見られ、すべての項目で平均値が上昇している。【スライド 11, 12, 16, 17】

「地域に根ざしたアイデンティティー」では、地域の人や活動に積極的に加わろうとする姿勢が顕著に伸びた。アンケートの各項目でも、地域貢献やネットワークの拡大、地域社会との協働などで前向きな変化が見られた。「新しい価値や社会を創造する力」では、自分のアイデアを実際に社会や身近な人たちの中で試してみようとする行動力の項目が伸びている。未来への使命感や当事者意識など、主体的な姿勢についても肯定的な回答が増加した。「課題発見力」については、身近な問題を自分の生活や学校での経験と結びつける力が向上し、本質的な問いを立てたり、多角的な視点で課題を設定しようとしたりする姿勢が見られた【スライド 13, 14, 15】。

11 項目について、プログラムの実施前後での比較結果では、全ての項目で「できる」と答えた生徒の割合が上昇したが、特に「最適解を創り出す力」「地域に根差したアイデンティティー」「新しい価値や社会を創造する力」については、プログラム後も「できる」と自己評価する生徒の割合は他の項目よりやや低めの数字となった【スライド 16, 18】。

(2) 生徒の「強み」と「乗り越えたい壁」

【スライド 28】には、生徒のアンケート回答に基づき、生徒が自身の「強み」と「課題」をどのように認識しているかについて示した。強みとしては「課題発見力」（76.1%）、「グローバルなマインドセット」（73.3%）、「自己理解・レジリエンス」などが挙げられ、「何事にも挑戦するマインドが身についた」「グループ活動に自信が持てるようになった」といったコメントが見られた。一方、課題としては「ゼロから 1 を生み出す創造力」「アクションの継続力」「地域貢献への具体的な行動力」などが挙げられ、「困難に直面したときにやり抜く力への自己肯定感が低い」「地域の人や

活動に積極的に加わろうとする姿勢は伸びたが、実際の行動にはまだ課題が残る」といったコメントが見られた。

(3) 個々の生徒の変容

【スライド 29】では、生徒 A の個別事例を示した。協働力は 1.00→3.00 (+2.00pt)、レジリエンスは 1.50→3.00 (+1.50pt)、人生を構想する力は 1.50→2.50 (+1.00pt) と大きく伸びている。「何事にも挑戦するマインドが身についた」「語学への関心が高まった」などのコメントが特徴的であった。

【スライド 30】では、生徒 B の事例を示した。人生を構想する力は 3.0→1.0 (-2.0pt)、地域に根ざしたアイデンティティは 3.0→1.0 (-2.0pt)、課題発見力は 1.25→2.75 (+1.50pt) など、項目によっては自己評価が下がっているものもある。「海外研修を通じて自分の知識の不足やできないことを再認識し、メタ認知が向上した」「社会で活躍したいという意識が高まった」といったコメントが見られた。

4 考察

本事業を通じて、全体として生徒の資質・能力に向上が見られた。特に「地域に根ざしたアイデンティティ」「新しい価値や社会を創造する力」「課題発見力」で顕著な伸びが見られた。これは、プログラムを通じて生徒が地域や社会との関わりを意識し、主体的に課題を発見し、解決に向けて行動する力が育まれた結果であると考えられる。

一方で、「最適解を創り出す力」「ゼロから 1 を生み出す創造力」「アクションの継続力」など、自己肯定感や持続的な行動力に関する項目では、依然として課題が残る。これは、挑戦や失敗を繰り返す中で自己評価が一時的に下がる現象や、グローバルな経験を通じて自分の限界を認識することが影響していると考えられる生徒 B の事例のように、海外研修を通じて自己認識が深まり、メタ認知が向上した結果、自己評価が低下するケースも見られた。

今後の課題としては下記に挙げる 3 つの領域の取組を充実させることが必要である。【スライド 28, 29, 30】。

【3つのアプローチ】

- 1 世界で得た知見やグローバルな活動を地域課題に還元する「グローバルな探究サイクル」の構築
- 2 成長プロセスを評価し、生徒の実行力を高め、学校や様々な場面での探究活動を支援体制の確立
- 3 学校の枠を超えた学びの場づくりと、多言語で世界に発信できるコミュニケーション力の強化

学びのプラットフォームで提供した講座を整理すると、「新しい知識を獲得し、価値観が変容する講座（パラダイムシフト）」、「リアルな現場での学びや自己理解を深める講座（リアリティショック）」、「学んだことをアクションにつなげるアウトプット型の講座（アクション）」など、段階的な成長プロセスが明確に見えてくる。

これらの講座を、県教育委員会として意図的にパッケージ化し、学びへの動機づけが高まった生徒が、各学校の取組を通じてさらに学びを深められるようにすることも有用である。今後は、学校と県教育委員会の相互作用によって生徒の成長を促す仕組みを構築していきたい。

5 まとめ

今回のアンケートから、県教育委員会が提供する学びのプラットフォームに参加した県内高校生が、多様なプログラムを通じて自らの資質・能力の向上を実感していることが明らかになった。特に「地域に根ざしたアイデンティティー」「新しい価値や社会を創造する力」「課題発見力」において顕著な成果が見られる一方、創造力や持続力、社会参画意識のさらなる深化が今後の課題である。

これまで本事業では、物理的なプラットフォームやポータルサイト、動画コンテンツの整備を進めてきたが、今後はこれらを有機的に連携させ、生徒の成長段階に応じた体系的な学びへと進化させることが重要である。具体的には、講座やプログラムを「新しい知識の獲得」「価値観の変容」「リアルな現場での学び」「自己理解の深化」「アウトプット・アクション」といったプロセスに整理し、生徒が興味・関心や課題意識に応じて最適な学びを連続的に選択できる仕組みを構築することで、学びのプラットフォームの再構築を図りたい。

アンケート結果からは、プラットフォームの学びが知識・技能の習得だけでなく、自己理解や社会参画意識、自己効力感やレジリエンスの向上にも寄与していることも確認できた。今後は、こうした成長過程を教員が適切に評価し、学校と県教育委員会が連携して、生徒の挑戦や試行錯誤を肯定的に支える環境づくりを進めていく必要がある。

また、本事業で開発した学習プログラムは教員研修としても有効である。来年度は外国語教員向け研修や初任者研修の選択研修としても活用を予定しており、教員自身がグローバルな視点や探究的な学びを体験し、その成果を教育実践に還元できる体制の構築を図りたい。

さらに、学校の枠を超えた学びの場の創出、多言語での発信力の育成、グローバルな経験を地域課題の解決に生かす循環の構築など、これからの社会で求められる資質・能力の育成に資する取組を、本事業の成果を基に推進していきたい。加えて、来年度4月に開設する遠隔教育配信センター(仮称)では、ポータルサイトや動画コンテンツを活用し、地理的・時間的制約を超えた学びの機会拡大を図ることで、個別最適な学習環境の実現をさらに進めていきたい。

6年間にわたる研究成果を基盤とし、県教育委員会の施策と学校の主体的な取組との有機的連携を深めることで、すべての生徒が能力を最大限に発揮できる学習環境の構築に引き続き取り組んでいきたい。

信州WWLの取組

成果と課題



自分の強みを知る自己分析

—What's my greatest strength?—

信州WWLレブリックに基づく生徒アンケート分析

令和8年1月27日
長野県教育委員会事務局 学びの改革支援課



【第3部】 WWL事業の成果と課題 (要約)

- 1 ねらい
WWL事業をとおして生徒はどのような資質・能力を身に付けただかについて3つ柱・11の資質能力(WWLレブリック)を指標に生徒の成長を分析。
- 2 主な成果 ※生徒の自己分析による回答データから分析
 (1) 定量的成果(回答データから)
 ・11項目すべてで肯定率が上昇。(事前→事後)
 ・特に伸びが大きい項目
 ○地域に根ざしたイデデンティティ: +18.8ポイント
 ○新しい価値や社会を創造する力: +18.3ポイント
 ○課題解決力: +18ポイント
 ・事前から高水準だった項目
 ○グローバルなマインドセット: +0.7ポイント (高止まり)
 (2) 定性的成果(生徒の記述回答から)
 ・問いを立てる力+11対話する力の向上を実感する生徒像。
 ・海外研修・高専進学をきっかけに、主体的な進路選択や人生を構想する力が内任化。
 ・多様な他者との学びを通して、社会的参画意識や使命感への意識が向上。
 ※肯定率 = 各質問に対して、「できる」と回答した割合を算出。
- 3 見えてきた課題
 ・地域との具体的な連携・行動段階は、グローバル視点に比べ相対的に低い。
 ・独自の強みを生み出す力(ゼロからの創造)に課題を感じている。
 ・出前学習を繰り返す局面で、いやり強く力への自己肯定感が低下する傾向。
- 4 今後の方向性
 ・世界で得た学びを地域課題に還元する「グローバルな探究サイクル」構築。
 ・成果ではなく成長プロセスを評価する伴走型支援の強化。
 ・学校の特長を超えた学びの場の創出。
 ・プログラムの学びのプラットフォームでの持続的展開
 ・ポータルサイト等の遠隔授業配信センターでの活用。

「探究県」長野の学びを通して生徒に育成したい資質・能力 3つの柱と11の項目

(WWLルーブリックより)

5



社会の創造者としての力



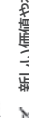
現地とした社会の中で課題を克服し、他者と協働してアクションを通じて新しい価値を創造する力



課題発見力



協働力



最適解をつくり出す力



アクションを自ら起こす力



新しい価値や社会を創造する力

自分らしく生きること



社会(世界)との関わりの中で「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」と人生を構想する力



自らの行動を振り返る力

レジリエンス

人生を構想する力

グローバルなマインドセット



信州に根差した豊かなアイデンティティと世界に通じる広い視野



地域に根差したアイデンティティ

グローバルなマインドセット



世界に通じる教養

世界に通じるコミュニケーション力



アンケート調査概要

- 実施期間 令和7年10月～12月
 - 対象 県教委が主催する「学びのプラットフォーム」事業に参加した長野県内の高校生181名(延べ数)
 - 質問数 44項目(「WWLルーブリック」S～C対応) *別紙参照
- ※事後アンケートには自身の姿容を記述する質問を追加。
- 内容 11の資質・能力の変化と生徒の変容を分析(研修前後)
 - 方法 Googleフォームによる

6

育てたい生徒像



7

WWL ルーブリック

項目	S	A	B	C
1. 課題発見力	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。
2. 協働力	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。
3. 最適解をつくり出す力	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。
4. アクションを自ら起こす力	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。
5. 新しい価値や社会を創造する力	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。



WWL ルーブリック

項目	S	A	B	C
6. 課題発見力	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。	社会生活の中で課題を自ら発見し、他者と協働して解決策を模索する。
7. 協働力	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。	他者と協働して課題を解決し、新しい価値を創造する。
8. 最適解をつくり出す力	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。	課題を解決するために、最適な方法を模索し、実行する。
9. アクションを自ら起こす力	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。	課題を解決するために、自ら行動を起こし、実行する。
10. 新しい価値や社会を創造する力	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。	社会生活の中で課題を克服し、他者と協働して新しい価値を創造する。



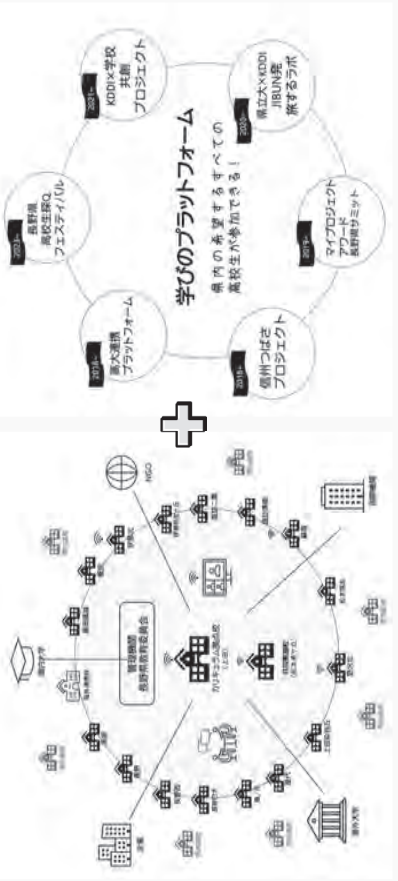
自分の強みを知る自己分析 44の質問 -What's my greatest strength?-

長野県教育委員会 教育政策課 作成

質問番号	質問内容	質問事項
1	1. 誰かから褒められたこと	質問1 誰かから褒められたこと
2	2. 誰かから励まされたこと	質問2 誰かから励まされたこと
3	3. 誰かから助けられたこと	質問3 誰かから助けられたこと
4	4. 誰かから教わられたこと	質問4 誰かから教わられたこと
5	5. 誰かから叱られたこと	質問5 誰かから叱られたこと
6	6. 誰かから怒られたこと	質問6 誰かから怒られたこと
7	7. 誰かから愛されたこと	質問7 誰かから愛されたこと
8	8. 誰かから尊敬されたこと	質問8 誰かから尊敬されたこと
9	9. 誰かから信頼されたこと	質問9 誰かから信頼されたこと
10	10. 誰かから感謝されたこと	質問10 誰かから感謝されたこと
11	11. 誰かから励まされたこと	質問11 誰かから励まされたこと
12	12. 誰かから助けられたこと	質問12 誰かから助けられたこと
13	13. 誰かから教わられたこと	質問13 誰かから教わられたこと
14	14. 誰かから叱られたこと	質問14 誰かから叱られたこと
15	15. 誰かから怒られたこと	質問15 誰かから怒られたこと
16	16. 誰かから愛されたこと	質問16 誰かから愛されたこと
17	17. 誰かから尊敬されたこと	質問17 誰かから尊敬されたこと

8

信州WWL AL (アドバンス・ラーニング) ネットワークとは？



「学びのプラットフォーム」とは？

(R2WWL事業継続計画による)

「探究的な学び」を深化

県内大学と連携し高度な学びを提供

高校生の海外留学支援と留学機運の醸成

「新しい価値の創造」や「社会における自己のあり方」を考えながら新たな社会を生き抜く力の育成

学びのプラットフォーム

県内の希望するすべての
高校生が参加できる！

プログラム前後に見る各項目ごとの変化

全項目で「できる」と回答した生徒の割合(肯定率)が上昇

3つの柱	資質・能力項目		成長幅(pts)	
	事前 (%)	事後 (%)		
社会の創造者としての力	課題発見力	58.1	76.1	18
	協働力	65.5	70.2	4.7
	最適解を創り出す力	54.1	66.9	12.8
	アクションを自ら起こす力	60.5	68	7.5
自分らしく生きる力	新しい価値や社会を創造する力	46.8	65.1	18.3
	自らの行動を振り返り振り返る力・レジリエンス	62.2	72	9.8
	人生を構想する力	52	66.8	14.8
	地域に根差したアイデンティティ	43.2	62	18.8
グローバルマインドを育む力	グローバルなマインドセット	72.6	73.3	0.7
	世界に通じるコミュニケーション力	57.5	71.2	13.7
	世界に通じる教養	56.8	73.2	16.4

できる=3、どちらでもない=2、できない=1として回答したもののうち、「できる」と回答した割合を肯定率として算出

項目別の特徴

最も伸びが大きい項目

+18.8 pts

地域に根差したアイデンティティ

43.2%→62.0%

比較的变化が小さい項目

+0.7 pts

グローバルなマインドセット

72.6%→73.3%

+18.3 pts

新しい価値や社会を創造する力

46.8%→65.1%

+18.0 pts

課題発見力

58.1%→76.1%

+4.7 pts

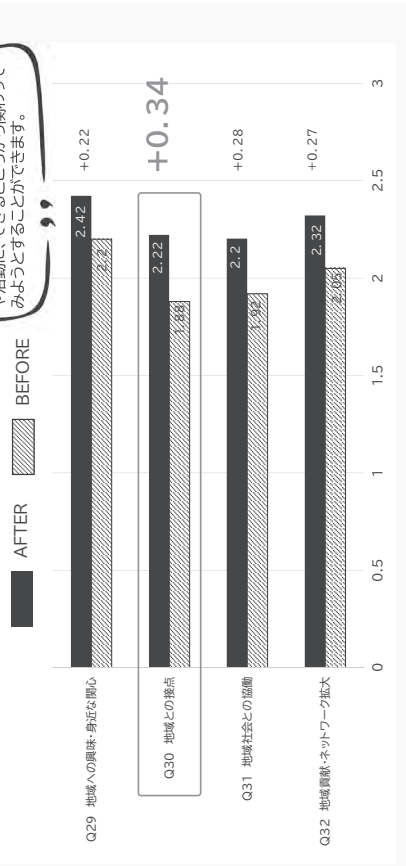
協働力

65.5%→70.2%

13

「地域に根差したアイデンティティ」 各質問の変化

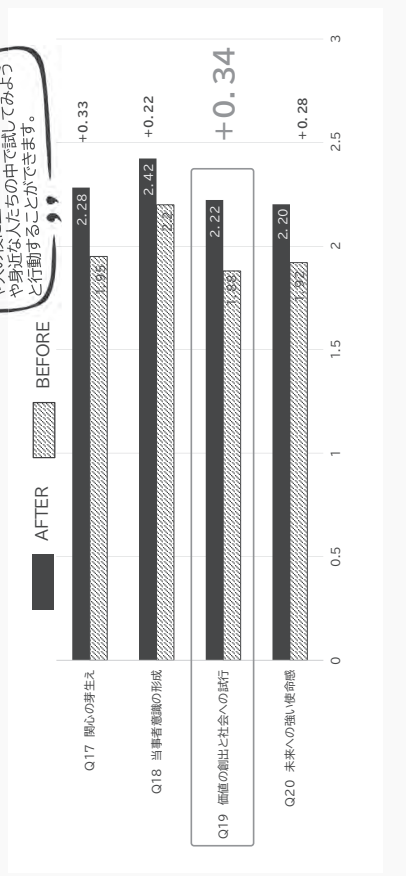
Q30 私は、課題に取り組む中で、地域の人や活動にできることから関わってみようと思えます。



14

「新しい価値や社会を創造する力」 各質問の変化

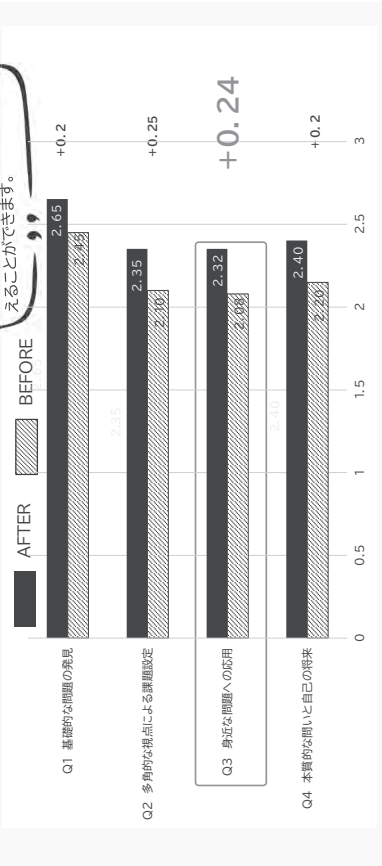
Q19 私は自分で考えたアイデアや人の役に立つ工夫を実際に社会や身近な人たちの中で試してみようと思えます。



15

「課題発見力」各項目変化

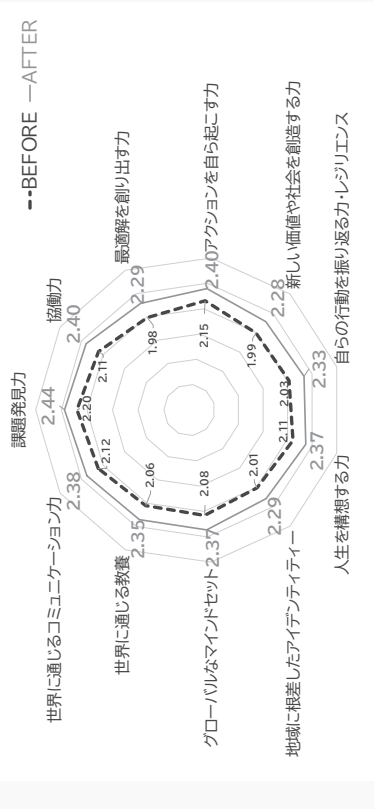
Q3 私は見つけた課題を、自分の生活や学校での経験とつなげて考えることができます。



16

11項目 BEFORE & AFTER (事前事後比較)

質問ごと「できる=3, どちらでもない=2, できない=1」と回答した平均値を11項目ごと算出



プログラム前後に見る資質・能力の変化

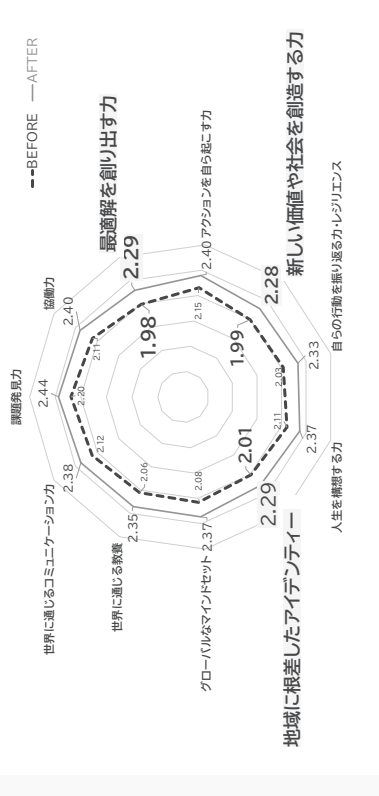
【定量的な成果(成長幅) 全項目で肯定率が上昇しているもの…】

3つの注	資質・能力項目	事前 (%)	事後 (%)	成長幅(pts)
社会の創造者としての力	課題発見力	58.1	76.1	18
	協働力	65.5	70.2	4.7
	最適解を創り出す力	54.1	66.9	12.8
	アクションを自ら起こす力	60.5	68	7.5
	新しい価値や社会を創造する力	46.8	65.1	18.3
自分らしく生きる力	自らの行動を振り返るカ・レジリエンス	62.2	72	9.8
	人生を構想する力	52.0	66.8	14.8
グローバルマインドを育む力	地域に根差したアイデンティティ	43.2	62	18.8
	グローバルなマインドセット	72.6	73.3	0.7
	世界に通じるコミュニケーション力	57.5	71.2	13.7
	世界に通じる教養	56.8	73.2	16.4

できる=3、どちらでもない=2、できない=1として回答した割合を肯定率として算出

11項目 BEFORE & AFTER (全体事前事後比較)

質問ごとでできる=3、どちらでもない=2、できない=1と回答した平均値を11項目ごと算出



「できる」率が高かった・低かった質問 BEFORE (生徒の自己分析による)

↑

課題発見力 **2.5**

Q1 【基礎的な問題の発見】

私は、みんなが興味をもちそうなテーマの中から、自分なりの視点で課題を見つけることができます。

協働力 **2.3**

Q5 【個人の活動を優先】

私は、チームで協力するの比し苦手ですが、自分の力で活動を進めることはできます。

課題発見力 **2.3**

Q36 【視野の拡大と自己啓蒙】

私は、世界の様々な考え方に触れ、それを自分の中に取り入れて、自身の行動を広げたり、自分をよりよく変えていくことができます。

最適解を創り出す力 **1.8**

Q37 【基礎知識の不足】

私は、知らないことが多いと感じながら、課題の解決に必要なことと本質的な知識について学ぼうとすることがあります。

協働力 **1.9**

Q11 【オリジナルの創造】

私は、これまでのやり方にとらわれず、自分で新しい方法を考え、課題に合ったオリジナルの解決策を提案することができます。

グローバルなマインドセット **2.3**

Q22 【困難に向けた意欲の再生】

私は、失敗の理由を振り返らうと、次はもっとよくしたいと前向きな気持ちになることができます。

「できる」率が高かった・低かった質問 AFTER (生徒の自己分析による)

↑

課題発見力 **2.7**

Q1 【基礎的な問題の発見】

私は、みんなが興味をもちそうなテーマの中から、自分なりの視点で課題を見つけることができます。

世界に通じる教養 **2.5**

Q40 【社会への還元】

私は、世界に目を向けて、多様な考えや価値観を前向きに取り入れながら、自分の知識や教養を深め、それを社会や身近な場面で活かして行動することができます。

人生を構想する力 **2.5**

Q44 【目的意識と計画の共有】

私は、言語や文化の違いに関わらず、相手との対話を大切にし、そのやり取りの中で、自分ひとりでは思いつかない新しい考えや価値を、一緒に生み出すことができます。

世界に通じる教養 **2.2**

Q37 【基礎知識の不足】

私は、知らないことが多いと感じながら、課題の解決に必要なことと本質的な知識について学ぼうとすることがあります。

新しい価値や社会を創造する力 **2.2**

Q20 【未来への強い使命感】

私は、身のまわりの問題を解決しながら、新しい仕組みやアイデアを考案出して、社会をもっとよくしたいという強い気持ちを持って行動することができます。

地域に根差したアイデンティティ **2.2**

Q31 【地域社会との関わり】

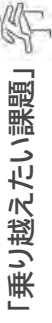
私は、地域のことを自分ごととして考え、地域の人たちと関わって行動することができます。

原点の再確認

各プログラムを通じて、生徒はどのような
資質・能力を身に付けた(と考えている)のか。



学びのプラットフォームに参加した生徒の回答から見てきたこと



課題発見力

「事後肯定率(できると回答した生徒数の割合)」76.1%と全項目中最高値。身近な経験から問いを立てる力が定着(Q1、Q4)

グローバル意識

「グローバルなマインドセット」事後肯定率73.3%。未知の文化や価値観を受容する姿勢が醸成(Q34)

社会的使命感

以前は漠然とした意欲だったが、事後には「自分のアイデアを試す」という平均値が1.9から2.2に上昇し、個人的な関心から社会的使命へと変化。(新しい価値や社会を創造するガ-ルーブリックA~Sレベル)(Q17、19)

ゼロからの創造

既存の情報の組み合わせ(Q10)は得意だが、新しい解を創出する(Q11)段階で自己評価が低下する傾向。

アクション持続力

計画(Q14)までは得意だが、試行錯誤を繰り返す「反復」のプロセス(Q13、Q16)で肯定率が低下。学びの実際の社会での活用や応用に
向けた支援が必要。

地域貢献に向けた行動力

グローバルな視点は高い一方で、「地域との接点」や「地域社会との協働」、「地域でのネットワーク拡大」の肯定率は62%と他項目より低く、
地域貢献への具体的な行動に課題があることが示唆される。(Q30、Q31)

「乗り越えたい課題」

育成を目指す3つの生徒像と各プログラムの相関

社会の創造者として 自分らしく生きる力 グローバルなマインドセット

成果
課題発見力は事後肯定率76.1%。問いを立てるガ-対話する力の獲得。学びの「受け手」から「発信者」へと変容
【貢献プログラム例】
マイプロジェクト
信州WWLグローバルカフェ
高校生による合同高校説明会

成果
人生を構想する力の事後肯定率+14.8ポイント。探究活動が自分の生き方として内化し、就職への高関心の発露とレジリエンスの獲得
【貢献プログラム例】
信州つばさP STEAMコース
科学エキスポパート講座

成果
世界に通じる教養は+16.4ポイント。異文化理解が「変容」から「活用」へ。自己表現から他者理解へ
【貢献プログラム例】
信州つばさP 国際理解コース
アカデミックブレゼンテーション講座

各プログラムに参加した生徒が獲得した資質・能力

<p>科学エキスポパート講座 (専門性と論理的思考)</p> <p>高度な知識との接触を通じた教養の習得、理解や後進への発信を通じて、自身の行動を振り返る力を獲得。</p>	<p>信州つばさP 国際理解コース (多様性と共生)</p> <p>異文化理解を通じた自己認識。積極的な探究心の確立。</p>	<p>信州つばさP STEAMコース (挑戦と主体性)</p> <p>理地学生・研究者の熱意に触れ、キャリアデザイン力や探究心が進化。専門領域への挑戦。</p>
<p>マイプロジェクト (内発的動機と人生構想)</p> <p>自己決定による探究活動。「自分はどうか生きていきたいか」問いに向き合い、主体性とレジリエンスを確立。</p>	<p>アカデミックブレゼンテーション講座 (対話と共創)</p> <p>職業本位へのブレゼンテーションへ。世界に向けた自らの学びの発信力の向上。</p>	<p>信州WWLグローバルカフェ (社会とのつながり・連携)</p> <p>ピアラーニングによるコミュニケーションの形成・グローバル課題に 対する「当事者意識」を醸成。</p>
<p>高校生による合同高校説明会 (アイデンティティと責任感)</p> <p>学校代表としての責任感が自信を生み、地域に根ざした学校のあり方を考える視点を育む。</p>	<p>アカデミックブレゼンテーション講座 (対話と共創)</p> <p>職業本位へのブレゼンテーションへ。世界に向けた自らの学びの発信力の向上。</p>	<p>信州WWLグローバルカフェ (社会とのつながり・連携)</p> <p>ピアラーニングによるコミュニケーションの形成・グローバル課題に 対する「当事者意識」を醸成。</p>

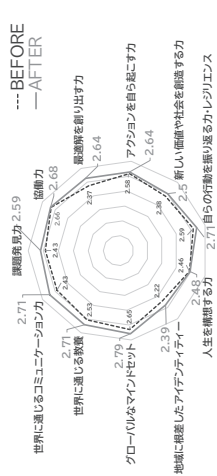
事例1：信州つばせプロジェクト STEAM コース 米国 “学びの受け手”から“主導者”へ

ボストン、ニューヨークの世界最先端の研究拠点での体験により、生徒が学びに対する主体性を獲得



生徒のコメント

研究、探究の本質についての考
えや、良いアイデアを作るため
に大事なことを学び、探究活動
に対する気持ちが強くなった。



主な成果

・ハーバード大やMITの研究者の熱意に触れ、「今日の行動が将来の自前に近づくのか」と自問。
・人生を構築する力が、単に将来を懸念するレベル(B)から、特定の学習領域と「自己の使命を結
びつけるレベル(S~A)へと移行。

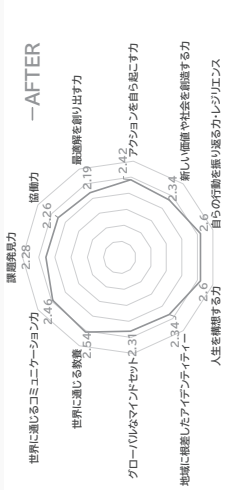
事例2：信州WWVLグローバルカフェ “学びの受け手”から“発信者”へ

グローバルな視点を持つことで、自らの生き方や内面の強さを再評価。
仲間との出会いが学びを具体的な行動へと結びつける原動力。



生徒のコメント

自分と同じような意見を持つ高
校生がこんなに沢山いるんだと
わかった。みんなもっと一緒に
活動したりできたらいいなと思っ
た。



主な成果

「自己と「未来」への意識が高く、「人生を構築する力」と「行動を振り返る力・カリブリエンス」
の項目が高い。
・リアーニングや社会課題へのアクションプランの創出を通じて主体的な学びと社会参画
意識が高まった。

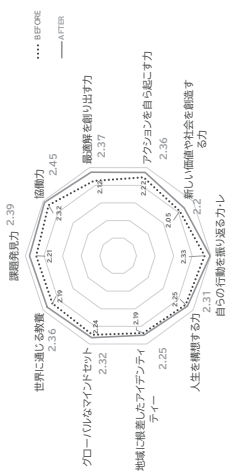
事例3：アカデミックプレゼンテーション講座 “発表”から“共創”へ

研究成果を論理的に伝え、聴衆と価値を共有する能力を高めることで、グローバルな対話力の獲得に。



生徒のコメント

プレゼンテーションは自分
で作るものから聴衆と一緒
に作るもの、というイメージ
ができた。



主な成果

プレゼンテーションを「自分の発表で終わらせる作業」から「聴衆と共に対話を通じて進
めるもの」へと再定義。
・「世界に通じるコミュニケーション」の最高基準である「対話を通じた新価値の共創」へ
の到達に近づく。

原点の再確認

個々の生徒の変容



生徒A 「個」から「協働」へ

1年生 信州つばさプロジェクト STEAMアメリカコース、アカデミックプレゼンテーション講座参加



協働能力が著しく向上し、グループでの活動に対する自信が高まった。コミュニケーションスキルの向上、特に海外に向けた発信力や対話力の強化の必要性を実感。記述コメントからは、挑戦意欲や探究心、自信及び留学への関心といった点面的な成長がうかがえる。

協働力	1.00	→	3.00	(+2.0)
振り廻りレジリエンス	1.50	→	3.00	(+1.5)
人生を構築する力	1.50	→	2.50	(+1.0)



「何事にも挑戦するマインドが身についた。人の目を気にしないで自分のやるべきことをやる自信がいった。」



「積極的に物事に挑戦できるようになった。努力を重ね、自分の力をさらに高めて、社会で活躍できる人になりたいと思うようになった。」

生徒B 自己理解、メタ認知の向上

2年生 信州つばさプロジェクト STEAMアメリカコース参加

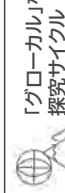


主体的な行動や課題解決力は向上した一方で、海外研修を通して自分に足りない点を客観的に認識したことで、将来や地域に関する自己評価が相対的に低下した。『わかったつもり』から脱却したことによるメタ認知の向上も認められる。

人生を構築する力	3.0	→	1.0	(-2.0)
地域に根拠したアイデンティティ	3.0	→	1.0	(-2.0)
課題発見力	1.25	→	2.75	(+1.5)

3つのアプローチ

これまでの成果をもとに、生徒の成長をさらに促すための3つ領域の取組を充実



「グローバルな探究サイクル」

グローバルな視座に比べ、「地域アイデンティティ」に対する肯定的評価が低い。

アプローチ：世界で得られた知識を信州の地域課題に還元し、実践させる仕組みを探究プロセスに取り入れる。これを具体的な地域版プロジェクトとして展開していく。

(例)「海外研修」×「信州学」



「実行力」を高める伴走支援体制

探究の試行錯誤の段階における生徒の自己肯定感が低い。

アプローチ：地域だけでなく成長のプロセスを評価する支援体制の確立。ARサイクル(見通し、行動、振り返り)を回すための対話的な伴走支援を指導の中に組み込む。「個」から「学校組織」への支援へ。

(例)県立高校「未来の学校」



多様な他者と学ぶ機会創出

言語文化を超えて意見を伝え合う段階における生徒の自己肯定感が低い。(Q42, 43)

アプローチ：他者と協力しながら複雑な課題を学際的アプローチで解決できる力を育むため、学校の特長を活かした学際的アプローチの推進による発力強化のプログラムの実施。

(例)マイプロジェクト、北陸新幹線サミット、WWLグローバルカフェ

多様な講座の組合せによる多角的な刺激

信州つばさP STEAMコース (挑戦と主体性)

理地学生・研究者の熱意に触れ、キャリアデザイン力や探究心が進化、専門領域への挑戦。

信州WWLグローバルカフェ (社会とのつながり・連携)

ヒアラーニングによるコミュニケーションの形成・グローバル課題に對する「当事者意識」を醸成。

アカデミックプレゼンテーション講座 (対話と共創)

職業本位へのプレゼンテーション。世界に向けた自らの学びの発信力の向上。

科学エキスパート講座 (専門性と論理的思考)

高度な知識の体験を通じた探究の浸透、理解を深め、自身の行動を振り返る力を養育。

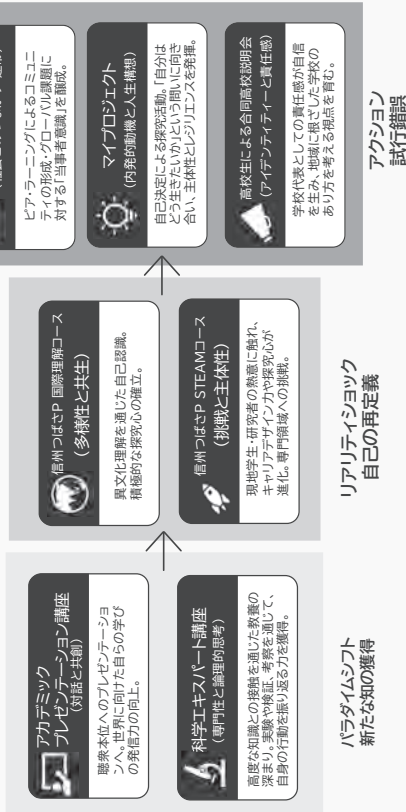
マイプロジェクト (内発的動機と人生構想)

自己決定による探究活動(自分はどう生きたいか)という問いに向き合い、主体性とレジリエンスを養育。

高校生による合同高校説明会 (アイデンティティと責任感)

学校代表としての責任感が自信を生み、地域に根ざした学校のあり方を考える視点を育む。

多様な講座の組合せによる多角的な刺激



多様な講座の組合せによる多角的な刺激



各校発の学び

個別最適な学習環境は構築できたのか？

- 「まなび助ポータルサイト」を開発し、県内の探究プログラムにかかる情報を一元化
- 各校のHPや理数科特設HP、産業教育MIRAIフェア等のリンクも掲載
- 主催者側が事業を関連づけてパッケージ化することでアクセス数増加
- 生徒自身の動機づけや生徒の主体的活用を促す工夫が今後の課題



研究成果の活用

最後に・・・



既存の事業への効果的な移行

- 外国語教員向け研修としての実施
- 初任者研修選択講座への拡大
 - アカデミックプレゼンテーション講座
 - 海外進学留学講座
 - 長野県高校生探Qフェスティバル
 - WWL関係校による公開講座



学びのプラットフォームの再構築

- 地域貢献や協働的学びの強化を旨としたプラットフォームの再構築



(例)グローバルな学びとローカルな学びの循環

(例)学校の枠を超え多様な他者と学ぶ機会の創出

遠隔教育配信センター(仮称)での実証研究

- 「まなび助ポータルサイト」の活用
- 学習動画のオンデマンドコンテンツの活用





学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

NAGANO WWL KEY COMPETENCIES

探究CAN-DOリスト

「社会の創造者」に関する資質・能力

混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる

1 課題発見力

世の中の事象から課題を見つけ出し、自分ごととして設定することができる

2 協働力

人と協働してともに活動することができる

3 解をつくり出す力

試行錯誤を繰り返す中から最適な解をつくり出すことができる

4 アクションを自ら起こす力

問題解決のために、アクションを起こすことができる

5 新しい価値や社会を創造する力

課題解決を通じて、新しい価値や社会を創し、世の中を良くしようという志を持っている

「自分らしく生きる力」を培う資質・能力

社会（世界）との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想する力

6 自らの行動を振り返る力、レジリエンス

自らの取組を評価し、失敗しても試行錯誤を繰り返し、努力し続けることができる

7 人生を構想する力

課題に取り組む中で、自分の人生や生き方を構想することができる



グローバルマインドを育む資質・能力

信州に根ざした豊かなアイデンティティと世界に通じる広い視野、資質・能力

8 地域に根差したアイデンティティ

地域と積極的に関わることができる

9 グローバルなマインドセット

世界を見る視野を持ち、他者の多様な考えや価値観を理解し、受け入れることができる

10 世界に通じる教養

幅広い知識と教養を身につけ、生涯にわたり学び続けることができる

11 世界に通じるコミュニケーション力

自分の考えを書いたり話したりすることで伝え、人の考えを書物や対話を通して理解し、恐れず対話することができる

WWL ルーブリック

令和4年度作成を基に改訂

混沌とした社会の中にある課題を見抜いて、テーマを設定し、チームとして協働しつつ、対立やジレンマを乗り越えて解を見つけ、アクションを通じて新しい価値や新しい社会を主体的に創造していくことができる						学びのMENU	
育成したい力	具体的な生徒の姿	S	A	B	C	学びP	各校発
課題発見力	世の中の事象から課題を見つけ出し、自分ごととして捉え、主体的に設定することができる。	課題を自らの生き方と結びつけて設定することができる。	見つけた課題を自分の身の回りの事象と結びつけて設定することができる。	事象を多角的に見て、オリジナルの課題を見つけることができる。	課題を設定できるが、オリジナルリティが感じられず、一面的である。		
協働力	他者と共に活動し、チームワークを発揮することができる。	学校の外の人とつながり、協働することができる。	自ら仲間を探し、協働することができる。	グループの人と協力することができる。	自主的に人と協力する姿勢が見えない。		
解をつくり出す力	試行錯誤を重ねながら最適な解を導き出すことができる。	自らつくり出した解を試行錯誤を重ねて改善していくことができる。	自分が取り組む課題にふさわしい解をつくり出すことができる。	一般的に知られている解を組み合わせて自分の解とすることができる。	インターネットや書物などから、一般的に知られている解を見つけることができる。		
アクションを自ら起こす力	課題解決のためにアクションを起こすことができる。	起こしたアクションを改善しつつ継続することができる。	自ら必要なアクションを起こすことができる。	指示によりアクションを起こすことができる。	アクションプランがプランにとどまっている。		
新しい価値や社会を創造する志	課題解決を通じて新しい価値や社会を生み出し、世の中をよりよきように志を持っている。	自ら生み出した新しい価値や考え方を実社会に応用しようとしている。	新しい価値や社会を生み出そうとしている。	新しい価値や社会を創り出すことに興味を持っている。	考えが現状にとどまっている。		

長野県高校生探Qプロジェクト講座
マイプロジェクト探Qカプエ
探究交流会（関係校発）

社会(世界)との関わりの中で、「一度しかない人生を自分はどう生きたいか」という自分の人生を構想することができる						学びのMENU	
育成したい力	具体的な生徒の姿	S	A	B	C	学びP	各校発
自らの行動を振り返る力・レジリエンス	自らの取組を評価し、失敗しても試行錯誤を繰り返し、努力し続けることができる。	失敗を省みて試行錯誤を繰り返しながら、改善に取り組むより良い解にたどり着いている。	失敗を省みて改善に取り組んでいる。	失敗を省みて改善に取り組もうとする。	失敗を省みることができる。		
人生を構想する力	課題に取り組む中で自分の人生や生き方を構想することができる。	自分の人生や生き方を構想している。	高校卒業後の将来の自分について考えている。	短い期間の将来の自分について考えている。	考えが現状にとどまっている。		

JIBUN発旅するラボ
サマースクールラポ

信州に根ざした確かなアイデンティティと世界に通じる広い視野をもち、個人と社会のウェルビーイングを実現することができる						学びのMENU	
育成したい力	具体的な生徒の姿	S	A	B	C	学びP	各校発
地域に根ざしたアイデンティティ	地域と積極的に関わろうとしている。	課題に取り組む中で広く地域と関わり、輪を広げている。	課題に取り組む中で広く地域と関わっている。	部分的ではあるが、課題に取り組む中で地域と関わろうとしている。	自分の考えに固執している。		
グローバルなマインドセット	世界を見る視野を持ち、他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとしている。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し自らに取り入れている。	十分に他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとしている。	他者の多様な考えや価値観を理解し受け入れようとするが不十分である。	自分や自分の価値観に固執している。		
世界に通じる教養	幅広い知識と教養を身につけている。	学んだことを更に深め、実社会に活かそうとしている。	課題解決のために必要な知識を身につけている。	課題解決のために必要な基本的な知識を身につけている。	基本的な知識を一部身につけているが、不十分である。		
世界に通じるコミュニケーション力	自分の考えを書いたり話すことで伝え、人の考えを書物や対話を通して理解し、恐れず対話することができる。	他者と十分に意思疎通を図った上で、対話を通じて新しい考えを生み出すことができる。	十分に他者の考えを理解し、また、自分の考えを伝えることができる。	おおまかに他者の考え理解したり、自分の意見を伝えることができる。	十分ではないが、他者の考えを理解したり、自分の意見を伝えようとしている。		

信州っばさプロジェクト
海外研修
海外学生受け入れ交流

自分の強みを知る自己分析 44の質問 –What’s my greatest strength?–

できる=3, どちらでもない=2, できない=1で回答

長野県教育委員会学びの改革支援課作成

3つの柱	育成したい資質・能力	フェーズ	質問番号	質問事項
「社会の創造者」に関する資質・能力	1 課題発見力	【基礎的な問題の発見】	質問1	私は、みんなが興味をもちそうなテーマの中から、自分なりの視点で課題を見つけることができます。
		【多角的な視点による独自の課題設定】	質問2	私は、いろいろな角度から物事を考えて、自分にしか思いつかないようなオリジナルの課題を見つけることができます。
		【身近な問題への応用】	質問3	私は、見つけた課題を、自分の生活や学校での経験とつなげて考えることができます。
		【本質的な問いと自己の将来】	質問4	私は、課題を、自分の将来の夢や生き方、社会への関心と深く結びつけて、高校を卒業したあとも考え続けたいテーマとして設定できます。
	2 協働力	【個人の活動を優先】	質問5	私は、チームで協力するのは少し苦手ですが、自分の力で活動を進めることはできます。
		【身近な集団での協力】	質問6	私は、クラスや学年など、あらかじめ決められたグループのメンバーと、協力して活動することができます。
		【主体的な仲間づくりと目標達成】	質問7	私は、学年や所属を超えて、自分から仲間を見つけて、一緒に目標を立てて活動することができます。
		【多様な集団との社会的な協働】	質問8	私は、地域の方、専門家や年齢が異なる方など、いろいろな方と協力して、大きな目標に向かって活動することができます。
	3 最適解を創り出す力	【情報の収集・模倣】	質問9	私は、インターネットや本などで調べた一般的な方法を使って、課題を解決する方法を考えることができます。
		【既存の解の組み合わせ】	質問10	私は、調べたいいくつかの方法を参考にして、自分なりに組み合わせで課題を解決する方法を考えることができます。
		【オリジナルの解の創出】	質問11	私は、これまでのやり方にとらわれず、自分で新しい方法を考えて、課題に合ったオリジナルの解決策を提案することができます。
		【実行と継続的な改善】	質問12	私は、自分で考えた方法を実際に試してみ、結果をふり返りながら、もっと良くなるように工夫し続けることができます。
	4 アクションを自ら起こす力	【思考で停止】	質問13	私は、行動にうつすのはまだ難しいこともありますが、活動の計画を立てるところまでは進めることができます。
		【指示による実行】	質問14	私は、先生などから具体的な指示があれば、それに従って行動することができます。
		【自律的な行動の開始】	質問15	私は、誰かに言われなくても、自分で必要なことを考えて、行動を始めることができます。
		【完遂と継続的な改善】	質問16	私は、自分で始めた行動をふり返りながら、やり方を工夫して、最後までやり遂げることができます。
5 新しい価値や社会を創造する力	【関心の芽生え】	質問17	私は、社会を良くするアイデアや考え方に興味をもって、自分でも考えてみるすることができます。	
	【当事者意識の形成】	質問18	私は、単に関心を持つだけでなく、「私が作ろう、良くしよう」という意識をもって物事に取り組むことができます。	
	【価値の創出と社会での試行】	質問19	私は、自分で考えたアイデアや人の役に立つ工夫を、実際に社会や身近な人たちの中で試してみようとして行動することができます。	
	【未来への強い使命感】	質問20	私は、身のまわりの問題を解決しながら、新しい仕組みやアイデアを考え出して、社会をもっとよくなってほしいという強い気持ちを持って行動することができます。	
「自分らしく生きる力」を育む資質・能力	6 自らの行動を振り返る力 レジリエンス	【原因の理解(内省の開始)】	質問21	私は、失敗したときに立ち止まって、「なぜうまくいかなかったか」を考えることができます。
		【改善に向けた意欲の芽生え】	質問22	私は、失敗の理由を振り返ったうえで、「次はもっとよくなりたい」と前向きな気持ちになることができます。
		【教訓の実践と改善行動の開始】	質問23	私は、失敗から学んだことをもとに、次に向けて具体的な改善方法を考え、実際に行動を始めることができます。
		【粘り強い再挑戦と成果への到達】	質問24	私は、失敗しても落ち込むばかりでなく、それを乗り越えて、やり方を見直しながら何度も挑戦し、より良い結果につなげることができます。
	7 人生を構想する力	【現状認識の段階】	質問25	私は、今の自分の気持ちや学校・自分の生活のことなどまわりのことについて考えることができます。
		【近未来の展望】	質問26	私は、数ヶ月～1年くらい先のこと(学習や自分の進路のことなど)について、目標を立てて考えることができます。
		【長期的な進路設計】	質問27	私は、高校を卒業したあとの進路や仕事など、これからの自分の未来について、具体的に考えることができます。
		【自身の生き方構想・社会的使命への気づき】	質問28	私は、日々の課題に取り組みながら、「自分はどう生きたいか」「社会の中で何ができるか」を考えて、実際に行動することができます。
グローバルマインドを育む資質・能力	8 地域に根差したアイデンティティ	【地域への興味・身近な関心】	質問29	私は、自分の住んでいる町や、近くの出来事について、気にしたり、考えたりすることができます。
		【地域との接点】	質問30	私は、課題に取り組む中で、地域の人や活動に、できることから関わってみようとするすることができます。
		【地域社会との協働】	質問31	私は、地域のことを自分ごととして考え、地域の人たちと関わって行動することができます。
		【地域貢献・ネットワーク拡大】	質問32	私は、課題解決を通じて広く地域の人たちと深く関わり、地域のために行動しながら、仲間と一緒に活動を広げていくことができます。
	9 グローバルなマインドセット	【身近な世界への意識】	質問33	私は、学校、家や友達との関係など、いつも身近にあることや地域のことについて興味関心をもって考えることができます。
		【受容への努力】	質問34	私は、いろいろな国や地域、文化の考え方に触れながら、自分と違う意見や価値観を理解しようとするすることができます。
		【積極的な理解と応用】	質問35	私は、いろいろな人の考え方や価値観を理解し、それを自分の考えや行動に活かすことができます。
		【視野の拡大と自己変容】	質問36	私は、世界の様々な考え方に触れ、それを自分の中に取り入れて、自身の行動を広げたり、自分をよりよく変えていくことができます。
	10 世界に通じる教養	【基礎知識の不足】	質問37	私は、知らないことが多いと感じながらも、課題の解決に必要なこと基本的な知識について学ぼうとすることができます。
		【知識の習得と活用】	質問38	私は、目の前の課題を解決するために、自分で必要なことを調べ、身に付けた基本的な知識を活用することができます。
		【知識の幅と深さ】	質問39	私は、課題に必要なことだけでなく、いろいろな分野の知識や教養を身に付けて、それらを結びつけながら深く考えることができます。
【社会への還元】		質問40	私は、世界に目を向けて、多様な考えや価値観を前向きに取り入れながら、自分の知識や教養を深め、それを社会や身近な場面で活かして行動することができます。	
11 世界に通じるコミュニケーション力	【伝える努力の段階】	質問41	私は、言葉や文化の違いがある中で、まだ十分ではないと感じながらも、相手の考えを理解しようと努力し、自分の意見を伝えることができます。	
	【意見の交換の実践】	質問42	私は、言語や文化の違いがあっても、相手の考えを大まかに理解した上で、自分の意見を伝えることができます。	
	【相互理解と明確な発信】	質問43	私は、言葉や文化が違っていても、相手の考えをしっかりと理解して、自分の考えをはっきりと、わかりやすく伝えることができます。	
	【協働的創造と新価値の共創】	質問44	私は、言語や文化の違いに関わらず、相手との対話を大切にし、そのやり取りの中で、自分ひとりでは思いつかない新しい考えや価値を、一緒に生み出すことができます。	

自由記述(質問45)

事業・講座・ワークショップなどに参加する前の自分と比べて、何か変化(物事の捉え方、考え方、行動、学びに向かう姿勢など)はありましたか？(あった場合は)それはどんな変化でしたか？

3 運営指導委員会 検証会議の記録



学び応援キャラクター「信州なび助」
©長野県教育委員会

令和7年度長野県 WVL コンソーシアム構築支援事業
 (個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業)
 運営指導委員・カリキュラムアドバイザー・検証委員

区分	氏名	役職
運営指導委員	村松 浩幸 (座長)	信州大学教育学部 教授
運営指導委員	坪谷 ニュウエル 郁子 (副座長)	東京インターナショナルスクール 理事長
運営指導委員	江幡 智広	KDDI 株式会社 経営戦略本部 副本部長
運営指導委員	佐藤 和紀	信州大学教育学部 准教授
運営指導委員	杉浦 太一	株式会社 Inspire High CEO
カリキュラム アドバイザー	小村 俊平	ベネッセ総合教育研究所 教育イノベーションセンター センター長
検証委員	清水 唯一朗	慶應義塾大学総合政策学部 教授

令和7年度長野県 WWL コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」第1回運営指導委員会 議事録

期 日 令和7年7月30日（水）14時30分から16時30分まで

形 態 オンラインによる（Zoom会議）

参加者（敬称略 50音順）

○運営指導委員

村松浩幸（座長）、江幡智宏、杉浦太一 ※坪谷委員、佐藤委員は所用により欠席

○カリキュラムアドバイザー

小村俊平

○学校関係者

【提供校】 上田、野沢北、伊那北、松本県ヶ丘、蘇南

【被提供校】 須坂、篠ノ井、屋代、上田染谷丘、諏訪清陵、諏訪二葉、飯田、飯田風越、
伊那弥生ヶ丘（管理職及び担当者）

○実施機関

長野県教育委員会 教育次長以下4名、総合教育センター情報産業部専門主事2名

1 開会行事

実施機関挨拶（清水教育次長）

出席者紹介

資料・日程確認

2 議事

(1) 今年度の事業計画について（実施機関）

WWL 事業概要、今年度事業推進計画について説明

(2) 提供校からの報告（野沢北高校：澤田教諭、御子柴教諭）

「佐久エリアコンソーシアム構築と運営について～WWL 実践事例報告～」

○報告内容

- ・佐久エリアコンソーシアム構築と運営の軌跡
- ・令和2年度から協働体制を構築。
- ・地域連携コーディネーター（令和7年度31名、卒業生30名）
- ・サポーター増員→組織化→効果的活用→探究の深化
- ・サポーター会議「ゆるい繋がり」の確認
- ・効果的活用：プレゼンコンテスト、本物に尋ねるワークショップ、地域課題ワークショップ
- ・ミニ探究 day の取組
- ・サポーターから専門の方をつなげてもらう。
- ・大学生（卒業生）サポーターの参画

Q：ミニ探究 DAY の具体的な内容について、入学直後の1年生が対象とのことだが、課題の提示方法などを教えていただきたい。（上田高校：清水教頭）

A：・4月の最初に1日かけて実施。

- ・課題は「空き家問題」または「災害対策」の2つから選択。
- ・生徒は4～5人のグループで活動。「Ai Grow」というAIによる気質診断をもとにバランスよく編成。
- ・午前中は情報収集と分析、午後はスライド作成と発表。
- ・発表は教室ごとに8グループが集まり、振り返りを行い終了。

3 運営指導委員による指導・助言

【村松座長】

気質の分析を踏まえ、1日かけて非常に丁寧に展開されていることが、今のお話からよく理解できました。ありがとうございました。

その他、ご発言を希望される方はいらっしゃいますでしょうか。問題がなければ、後半に移らせていただきます。

それでは、後半は先ほどもご案内がありましたように、意見交換の時間に入りたいと思います。

今年度の事業計画および先ほどのご発表を受け、カリキュラムアドバイザーならびに運営指導委員の皆様から、お一人ずつご指導・ご助言をいただければと存じます。また、これまでのご報告等に関してご質問がございましたら、併せてお願いいたします。

それでは、最初にカリキュラムアドバイザーの小村様、お願いできますでしょうか。

【小村アドバイザー】

本日も、大変充実した取組のご発表をありがとうございました。

一学期が終わってから、教育委員会や学校にお招きいただく機会が多く、先日も名古屋市、兵庫県、オンラインでは福井、仙台三高、島ヶ丘など、私が委員を務めている学校の会議に参加しております。こうした他地域の動向も踏まえ、2点ほど申し上げます。

まず1点目ですが、名古屋市の市立高校改革委員会にて、私もメンバーとして参加しております。名古屋市には市立高校が14校あり、今回の高校無償化の流れの中で、県立高校や私立高校との差別化について議論が行われました。その中で、市立高校14校のネットワークを活用するといことが大きなコンセプトとなりました。

この考え方は、本日のWWLネットワーク構築とも非常に重なる部分があると感じながら、お話を伺っておりました。市立高校では、単位互換や夏休みの合同講座の開催などを通じて、学校間で生じるリソースの格差に対応しようとしています。

本日の話を伺っていて気になった点として、ALネットワークからの参加が減少していることです。ネットワークの価値が、各校において十分に伝わっている方とそうでない方との間にギャップがあるのではないかと感じました。

改めて、こうしたネットワークを持つことで、各校単独では困難なことが容易に実現できること、リソースの共有によって付加価値が高まることなどを、関係者の皆様に周知していく必要があると思います。私のような外部の立場の者も、気づいた際にはしっかりと伝えていかなければと感じました。

2点目ですが、もし現時点でお考えがあれば教えていただきたいのですが、途中のご発表の中で、WWLは新規募集を行わず、DXハイスクールへ移行していくというお話がありました。

WWLがDXハイスクールへ移行する際には、活動の目的が大きく異なると感じています。私は福井県と兵庫県でDX委員を務めておりますが、DXではデジタル人材の育成やデジタル技術の活用が主目的となっており、国際協働をテーマとするWWLとは性質が異なります。

実施機関へのご質問になるかもしれませんが、DXハイスクールへの移行を見据えた際に、どのような準備をされているのか、また、どのような取組が活動の実績として評価されるのか、現時点でのご見解をお聞かせいただければと思います。

【村松座長】

ありがとうございました。最後ご質問いただきました。WWLからDXハイスクールへ移行しているということで、そもそもその事業のそれぞれの狙いが少し異なっているのではないかと、その辺どうなのかについてです。これは、事務局にお願いしてよいでしょうか。

【実施機関担当】

ありがとうございます。先日の協議会にて文部科学省から本件の伝達を受桁ところです。協議会での説明によれば、WWL事業としては、カリキュラム開発拠点校や、昨年度から新たに始まったグローバル人材育成型採択校の研究は継続されているとのことでした。

この流れと、DX加速化推進事業という大きな枠組みの中で、海外との学びをさらに充実させていくという方向性で捉えてよいのか。一方、現在取り組んでいる事業も、オンラインの活用を通じて、学校のDX化を進めながら学びの選択肢を広げていくという点では、方向性としては一致しているように感じております。

現段階では、本県において教育のDX化とグローバル教育の推進をどのように関連づけ、どのように進めていくかについて、事務局内でも統一した見解を持っておりません。本日はこの点について「宿題」をいただいたと受け止め、今後の検討課題として取り組んでまいりたいと考えております。

【小村アドバイザー】

おそらく、今後情報が出てくる中で、新しい枠組みが形成されるのではないかと思います。何か新しい情報が入りましたら、改めてご報告させていただきます。ありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。「学びを広げていく」という点では共通しているものの、そもそもの

出発点の違いが、今後どのように整理されていくのかについて、ぜひ小村様からも情報提供をいただければと思います。

それでは、続きまして運営指導委員の皆様からご意見をいただければと思います。まずは最初に、江幡様、お願いできますでしょうか。

【江幡委員】

はい、ありがとうございます。今期の取組につきましても、前半のお話の中で、いくつか新しい取組がスタートしていることを知ることができ、私自身も非常に多くの学びがありました。

実際、利益を中心とする経済活動とは大きく異なる活動であるため、その内容の急速な変革は非常に難しい面があると感じています。

一方で、生徒に価値を提供することはもちろん重要ですが、現在の活動を地道に継続していく上でも、関わる仲間づくりは非常に重要であると感じています。教職員の方々、教育委員会の皆様、そして生徒たちが、内側からつながっていくこと。さらに、特定の1校の独立した取組から県内全体へ、さらには県外の仲間とのつながりへと広がっていくことは、成果として非常に大きな意味を持つのではないかと思います。こうしたつながりが広がることで、関わる方々の熱量が高まり、それが活動の中で実感できることはとても重要だと考えています。

もう1点、先ほどの小村様と同様に、今期の最終的な活動が次年度以降の活動にどのようにつながっていくのか、また、DXハイスクールとの関わりがどのように展開されていくのかについても関心があります。この点については、今後DXハイスクールの具体的な内容を確認しながら進めていくことになるかと思っておりますので、また機会がありましたら、そのあたりのお話も伺えればと思っております。ありがとうございました。

【村松座長】

ありがとうございました。先ほどのお話にありました「仲間づくり」の重要性について、非常に大切な視点をご指摘いただきました。

それでは、続きまして、杉浦様、お願いできますでしょうか。

【杉浦委員】

はい、インスパイアハイの杉浦です。皆様、ご発表いただきありがとうございました。令和7年度としては第1回となりますので、改めてよろしく願いいたします。

私からは、助言や指導という立場では恐れ多いのですが、少し質問という形でお話を伺えればと思います。

県教育委員会(実施機関)と野沢北高校、それぞれにお伺いしたい点がございます。

まず、県教育委員会様に対してですが、少し根本的な問いになります。WWLが目指している「Society 5.0」や「グローバル人材の育成」というコンセプトは、非常に広く解釈できるものであり、文部科学省、WWL、県教育委員会、そして各校という3つのレイヤーがある中で、それぞれが目指している方向性のつながりが、私の中ではまだ明確に整理できていないと感じております。そのため、理解を深めるために質問させていただきます。

WWL については、先ほど申し上げた通りでよいと思うのですが、長野県教育委員会としては、「まなび助ポータルサイト」の拡充や利用促進を目指しておられます。せっかく素晴らしいルーブリックが作成されているのですから、その活用や利用頻度を高めていきたいという方向性があると理解しています。一方で、前年度からもそうですが、探究に対して先進的に取り組まれている学校の事例がこの場で共有され、参加された先生方が「野沢北高校さんがこうされているから、自校でも取り入れてみよう」と持ち帰られているのだと思います。このような学校側の事例発表というレイヤーと、県教育委員会が目指しているポータルサイトの活用、北陸新幹線サミットの充実、オンライン事業の推進などの取組との関係性について、WWL と県教委のつながりは一旦置いておくとしても、県教委と各校が WWL に対してどのように連携し、共に動いているのかという「一体感」のようなものが、私の中ではまだ十分に理解できていない状況です。

漠然とした質問で恐縮ですが、県教育委員会の役割、各校の役割、それぞれがどのように連携しながら1つの目標に向かって進んでいくのかについて、もう少し噛み砕いた形でご説明いただけるとありがたいです。いかがでしょうか。

【村松座長】

ではこちらについては事務局の方で、県教委の方でお願いできますでしょうか。

【実施機関】

ありがとうございます。ご質問いただいた点についてですが、まさに、本事業の核心をついたご質問をいただいたと思っております。

今回の関係資料の中で、長野 WWL Key Competencies という本事業をとおして生徒に身に付けてもらいたい3つの資質能力を連ねた図をご用意させていただいております。これは長野県の WWL による学びを通して生徒たちに身につけてもらいたい資質、能力の3つの柱になります。そもそもこちらは、平成30年に長野県教育委員会が目指す新たな高校づくり「高校改革～夢に挑戦する学び～」の方針のなかで打ち出した『探究県』長野の学びを通して本県が育成したい、育てたい資質、能力の3本柱です。

これらの力を育成するために、本課でいえば、先ほどご紹介しました「学びのプラットフォーム」というものがあったわけです。

その後、令和元年に文科省から WWL 事業の構想が発表された時、まさにこれは本県が目指している学びのプラットフォームの構築と目的を同じくするものであり、長野県が目指す生徒の育成のために、文科省の研究事業に参画することで本県の学びのプラットフォームをより良いものに再構築していくことを謳い、本事業採択を受けたのが令和2年度のことでした。

そして、県が示す3つの資質能力を育むための探究を核とした学びを実現すべく、各校においては探究活動のみならず、各教科における探究的アプローチによる「主体的、対話的で深い学び」を実践しているところです。また、県立高校における3つの方針やスクールミッションに基づき、特色ある学びの実現にむけ、教育課程の研究や授業改善にお取り組みいただいているところです。

県教育委員会としましては、この大きな目指すところを示しながら、実施機関では、単独校では実現が難しい事業、講座などの学びの機会を提供して参ります。また、各学校に対しては、県

として目指す方向性について、本課のみならず他課とも連携をすることでその方向性を分かりやすく示していくことが課題であると感じております。

今後は、本課が展開する様々な事業の趣旨と、それにより生徒のどのような力の育成に繋がるのかについて、各校の先生方にご理解いただけるよう周知の在り方を見直すとともに、事業内容の充実改善という観点からも「学びのプラットフォームの再構築」を図って参りたいと思います。

【杉浦委員】

ありがとうございます。県教育委員会の取組も、各校の取組も、それぞれが「点」として非常に素晴らしいものだと感じております。

それらがどのように点と点を結び、1つの方向性、1つのベクトルに向かって進んでいくのかという点については、もう少し「合言葉」や「共通の視点」などがあると、学校単位での成果と県教委の成果がバラバラに存在するのではなく、WVLとしての統一的な成果として整理できるのではないかと感じました。

もちろん、それぞれの立場や活動範囲が異なる中でのことだと思しますので、どこまでそれを「線」に繋げられるかという点は非常に重要な課題だと思います。

一方で、各校の先進的な事例がこのように共有されること自体が、非常に価値のあることだと改めて感じてます。こうしたスタンスでも、私自身も引き続き学ばせていただきたいと思っております。

もう1点、野沢北高校様にもぜひ伺いたいと思っております。

地域を巻き込み、サポーターの方々と連携しながら探究活動を進めておられる点は、非常に素晴らしいと感じながら拝聴しておりました。

これだけの取組をなされていること自体が素晴らしいと感じる一方で、当然ながら、ここに至るまでの道のりは決して平坦ではなかったのではないかとお見受けしております。そこで、逆に「難しかったこと」や「現在も課題として残っていること」などがございましたら、ぜひ他校とも共有できると良いのではないかと思います。

もし可能であれば、そうした点についてご教示いただけますでしょうか。

【野沢北高校 澤田教諭】

はい、ありがとうございます。難しい点は多々あります。まず、先ほど申し上げた「ゆるいつながり」という関係性を築くこと自体が、当初は非常に難しかったです。

依頼した以上、何かをお願いしなければということで、最初はその点で苦勞しました。担当教員の負担も増えるのですが、それぞれの行事について報告を行うことも、「ゆるいつながり」の一つの形として、少しずつ理解を得られるようになってきたと感じています。

もう1点、現在も難しいと感じているのが、サポーターとのマッチングです。現在、サポーターは31名おりますが、生徒の探究テーマに「ドンピシャ」で合致するケースはあまり多くありません。たとえば「環境」という大きなテーマで生徒を集めた場合、サポーターの方々の専門分野と完全に一致するわけではないので、専門外の領域でも大人の視点からアドバイスをいただける

よう、会議等でサポーターの皆様をお願いしています。

サポーターの人数を増やせば、よりマッチする可能性も高まるかもしれませんが、現在の学校規模では 30 名程度が運営上の限界だと考えており、その中でやりくりをしているのが現状です。

【杉浦委員】

探究活動において専門性のレイヤーで各分野の方々にご協力いただこうとすると、たとえサポーターが 30 名いても、あるいは 100 名いたとしても、生徒の探究テーマに完全に一致する方を見つけるのは難しいのだらうと思います。

これは、専門性そのものというよりも、何かに取り組む姿勢や、フィードバックの視点といった、より抽象度の高いレイヤーで助言をいただけることが重要なのではないかと感じました。

ただ、その抽象度の高いレイヤーでの助言の仕方や関わり方については、サポーターの方々によっても違いがあると思われ、共通化すること自体が難しいのではないかと想像します。

それらをマネジメントしていくことは、非常に難しい課題であると改めて感じました。貴重なお話をありがとうございました。

【野沢北高校：澤田教諭】

1 点、補足させていただきます。サポーターの方々には、生徒の探究テーマに「ドンピシャ」で合致する専門性をお持ちの方ばかりではありません。そのため、可能であれば、少しでも関連性のある分野の方をご紹介いただけるようお願いしています。そうすることで、テーマとのギャップを少しでも埋められるように工夫しているところです。

【杉浦委員】

素晴らしいですね。ありがとうございます。

【村松座長】

ありがとうございました。最後にご説明いただいた「マッチングの課題」は、おそらく多くの学校に共通する悩みであり、非常に重要なご指摘だったと思います。改めて感謝申し上げます。

それでは、せっかくの機会ですので、これまでアドバイザーや運営委員の皆様からいただいたご意見を踏まえ、今日ご参加いただいている先生方からも、ご感想などをお寄せいただければと思います。まずは上田高校の清水教頭先生、いかがでしょうか。

【上田高校：清水教頭】(7 月 23 日開催の WWL・SGH ネットワーク全国連絡協議会の参加報告含む)

はい、本日はありがとうございました。私は今回初めて参加させていただきましたが、まだまだ勉強不足な点が多く、野沢北高校様の取組などを通じて多くの学びを得ることができました。

また、7 月 23 日に開催された WWL 合同連絡協議会にも参加いたしましたので、その報告と感想を少しお話しさせていただきます。

先ほど実施機関からの資料にもありましたが、午前中は代表校による取組発表がありました。

筑波大学附属坂戸高校、宮崎大宮高校、そして広島大学の3校からの発表を拝聴しました。

筑波大学附属坂戸高校では、大学との連携が非常に充実しており、海外研修に大学生と一緒に参加するという取組が紹介されました。宮崎大宮高校も宮崎大学と連携し、同様の取組を行っているとのことでした。

続いて、専門家セミナーでは、東京大学総長の藤井輝夫氏の講演がありました。2027年秋に新設される「College of Design」という新しい学部について説明があり、文理融合型の学部ということで、入試は学力試験だけでなく面接や高校生活での活動状況などを重視した選抜方法になるとのことでした。

午後のグループワークでは、「グローバル人材育成」や「ICT機器を活用した探究的・文理横断的・実践的な学び」について、各県の状況を踏まえたディスカッションを行いました。「グローバル人材育成」に関しては、どの学校も同様の課題を抱えていると感じました。特に、昨今の円安の影響により、各校が独自に計画している海外研修において渡航費が高騰しており、苦勞されている様子が共有されました。

「文理横断的な学び」については、ある学校が地理と地学を融合させた「SSH地球科学」という学校設定科目を設け、地理と地学の教員が協力して新しい科目を展開しているという事例も紹介されました。

今回の協議会は私にとって初めての参加でしたが、非常に有意義で、学びの多い機会となりました。以上です。

【村松座長】

全国協議会の様子ということで、先進的に取り組まれてる学校、それからまた色々なお悩み等の共有含めご報告ありがとうございました。

それでは、次に飯田風越高校の加藤先生、お願いできますでしょうか。

【飯田風越高等学校 加藤教諭】

飯田風越高校の加藤です。本日は、素晴らしいご発表の数々をありがとうございました。大変参考になりました。私からは、飯田風越高校で7月18日に実施された「風越グローバルキャンプ」についてご報告いたします。

この「風越グローバルキャンプ」は、本校が毎年、留学フェローシップの皆様と協力して開催している行事です。海外留学や海外進学を経験された数名の学生の方々にご来校いただき、留学体験を共有していただくイベントとなっております。

今年度は、本校から38名、近隣の飯田高校から5名の生徒が参加しました。終了後には、生徒たちが積極的に質問する姿も見られました。また、参加者の中には中学校時代の同級生との再会もあり、他校生との交流の場にもなっていたようです。

来年度以降は、中学生にも開放する予定で計画を進めております。さらに、卒業生や地域の方々にもご協力いただきながら、より広がりのある取組として展開していくことも検討しております。

【村松座長】

ご報告ありがとうございました。

留学経験を自校の生徒さんとの共有だけでなく、中学生にも開放していくというお話がありましたが、具体的には、どのようなイメージで考えていらっしゃいますか。

【飯田高校】

今はまだアイデア段階ですが、近隣の中学校の方にもお知らせをしていくという感じでしょうか。数年前に、中学生も参加したことがありまして、結構好評でしたのでこういう素晴らしい機会を、本校の生徒だけではなくて、他校の生徒にも一緒に体験してもらうことを考えています。

【村松座長】

ありがとうございました。意欲や感度が高い中学生もいると思いますので、ぜひ実現に向けて取り組んでいただければと思います。

【村松座長】

それでは、私の方からまとめとして少しお話をさせていただければと思います。

本日は、事務局からこの事業が何を指すのかについて説明がありました。また、江幡様からは、学科を越えた先生方や生徒の交流拡大が仲間づくりにつながり、非常に意義深いとお話いただきました。

私は県内高校の再編に関わっていますが、先日福井県で複数の職業系学科を再編した高校の事例を伺いました。再編は困難も多いものの、異なる学科が集まることで生徒が生き生きとするという話が印象的でした。

野沢北高校の発表で示された「ゆるい繋がり」は、無理なく交流を進めるために重要だと感じます。生徒主体で取り組むことで、交流はより適切に機能します。高校再編の事例からも、学校間の交流や協働には共通点があると思いました。

探究の裾野拡大については、県のポータルサイトと各校の取組事例をどう結びつけるかが今後の課題でしょうか。また、多様な他者との対話の重要性について、上田高校の継続的なサミットや共同運営の取組は非常に意義があります。運営側を経験することで新しい視点やアイデアが生まれるため、共同運営はぜひ進めていただきたいと思います。私どもの附属学校でも STEAM 探究を市立長野高校や屋代附属中学校と連携し、企画・運営を学校ごとに順番で担当し、生徒主体で進めています。こうすることで年度ごとに特色が出て、各校が自分事として捉えられるようになっていきます。この点でも共同運営は非常に重要だと考えます。

小村様からは、AL ネットワーク拡大と DX ハイスクール事業への移行について話がありました。今後、国の方針を踏まえ、事業の原点を再確認し、「生徒のために何を指すのか」を改めて議論を進めてもらえればと思います。学科統合の事例でも、生徒が変わることで先生方も変わると言われます。目標を明確にし、進むべき方向を共有することが重要です。

ネットワークの最適化については、ネットワークに加わる価値をどう自分事として捉えられるか、今後工夫が必要であり、この点についても今後一緒に議論できればと思います。

野沢北高校様の発表では、サポーター制度と「ゆるい繋がり」の重要性が示されました。後半のミニ探究 DAY は、生徒が探究を体験する良い機会です。他校にも広めたい取組です。大学生サポーターの活用も注目です。また、杉浦様からは、成功事例だけでなく「失敗の共有」が重要とのご助言もいただきました。

杉浦様から課題としてご指摘いただきましたが、学校単位でできたことや全体で共有できることを整理し、「これは全体として良かった」という共通化を図ることについてです。このことについては、次回までの宿題として私も考えたいと思います。

DX を活用しながら、どのように生徒の学びをより一層広げていくのかという WWL のキーコンセプト、この点は揺るがないと思います。今後は AL ネットワークの方向性についての情報整理が必要でしょうか。AL ネットワークを持つことの価値、AL ネットワークに参画することの意義、そして各校がどのように自分事として捉え、協力してもらえるかの工夫が今後の課題になると思います。

上田高校からは全国連絡協議会のご報告として、海外渡航費の高騰が全国的な課題であること、文理横断の学びの事例についてお話いただきました。

文理横断の学びについては、信州大学教育学部では昨年度から地域枠を含む総合選抜を導入し、今年度は1年生を迎えました。結果として、学生の意欲が非常に高く、良い取組だと感じています。こうした学生を育てるためには、高校段階での学びや取組が重要です。大学としても、今後総合選抜の枠をさらに拡大し、探究に積極的に取り組んだ生徒が大学でも活躍できる道を広げたいと考えています。

飯田風越高校の高校での取組を中学生へ開放していくというお話は、探究の更なる活性化に繋がるものです。私たちも高校生向けに「My 探究」講座を実施し、県内外から多くの参加がありました。課題は「問いの立て方」と「進め方」であり、生成 AI を活用した支援や、専門分野の先生による探究の進め方の講義を行っています。こうした大学の関わりは WWL 事業にも貢献できると感じています。

探究の問いが未来を開くという視点で、この事業を進めていきたいと思います。資料は県教委を通じて各校に送付しますので、ぜひ参考にしてください。

本年度の事業がさらに充実していくことを願っております。

カリキュラムアドバイザー様、委員の皆様、本当にお忙しい中ありがとうございました。また、参加校の皆様、ありがとうございました。それでは進行を事務局にお戻ししたいと思います。ご協力ありがとうございました。

【進行】

村松様、スムーズな議事進行、ありがとうございました。

ここで、実施機関から追加説明があります。

【実施機関】

皆様、活発なご意見、本当にありがとうございました。実施機関からの説明について補足させていただきます。

本県のALネットワークの参画校ですが、その数は減ってはおりませんで、令和2年度当初よりも増えて、現在18校の連携校で構成しております。一方で、先ほど申し上げました北陸新幹線サミットをはじめ様々なWWLに関する事業やイベントについて、以前はもう少し連携校からの参加があったのですが、最近は少しずつ減ってきている感があるということでございます。引き続き、多くの連携校がALネットワークに参画しているメリットを感じられるように事業を展開して参りたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございました。

閉会行事

- ・ 学びの改革支援課 前山主幹指導主事から御礼の挨拶
- ・ 事務連絡（事業担当者連絡会）

令和7年度長野県 WVL コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」第2回運営指導委員会 議事録

期 日 令和8年1月27日（火）14時00分から16時00分まで

場 所 教育委員会室 オンライン併用

参加者（敬称略 50音順）

○運営指導委員

村松浩幸（座長）、坪谷ニューエル郁子（副座長）、
江幡智宏、佐藤和紀、杉浦太一

○カリキュラムアドバイザー

小村俊平

○学校関係者

【提供校】上田、野沢北、伊那北、松本県ヶ丘、蘇南

【被提供校】須坂、篠ノ井、屋代、上田染谷丘、諏訪清陵、諏訪二葉、
飯田、飯田風越、（管理職及び担当者）

○実施機関

長野県教育委員会 教育長以下6名、総合教育センター情報産業教育部専門主事2名

1 開会行事

実施機関挨拶（武田教育長）

出席者紹介

資料・日程確認

2 議事

(1) 今年度の事業報告について（実施機関）

今年度の重点項目に関する下記の事業報告について説明

【報告概要】

- ・ICT活用で学校・教員・生徒・外部機関をつなぐ学びのネットワークを推進
- ・オンライン講座やフォーラムで探究活動の裾野拡大・発信力強化
- ・全国高校生フォーラムやグローバルカフェ等で多様な交流・発表の場を提供
- ・海外進学・留学支援や現役海外大学生によるメンタリングを実施
- ・オンライン合同授業やICT教材共有を推進
- ・新しい教員研修や遠隔教育配信センター整備に着手
- ・ALネットワーク最適化・プログラム伝播、ループリックの見直しを実施

(2) 関係高等学校からの報告（提供校）

蘇南高校、伊那北高校、野沢北高校、松本県ヶ丘高校、上田高校から今年度及び3年間の事業に係る取組について報告。

【報告概要】 ※詳細は「提供校5校の取組」ページ記載のスライド資料参照

- ・各校が特色ある教育実践を展開し、県内外・海外の学校や機関と連携して学習コンテンツを提供。
- ・オンライン配信やポータルサイトを活用した発表・教材提供を実施。
- ・他校や大学、海外校との交流・合同授業・発表会を積極的に行い、多様な学びや協働を推進。
- ・海外研修や国際交流を通じて異文化理解やグローバルな視野を育成。
- ・AI活用やデジタル教材、英語による発表など、先進的な学びの機会も提供。

(3) 3年間の事業研究の成果と課題について（実施機関）※詳細は pp. の資料参照

WWL 事業で育成したい生徒像に基づいて作成したループブックによる生徒アンケートの分析結果から得られた成果や課題、事業成果の今後の活用について説明。

3 運営指導委員による指導・助言

【村松座長】

本年度の成果や今後の課題について、生徒のデータや様子を交えたお話をいただき、ありがとうございました。ここからは、運営指導委員とカリキュラムアドバイザーの皆様からのご指導やご助言、意見交換の時間としたいと思います。まず、坪谷様お願いします。

【坪谷副座長】

長野県の教育活動の充実ぶり、各学校および先生方のご努力と実行力に深く感銘を受けました。これほどの成果が上がっていることから、ぜひ県内にとどまらず、ポータルサイト等を活用して日本全国に長野県の取組を発信する工夫をされることで、県外や日本全体に対しても皆様の活動が大きな意義を持つものになると思います。さらに、言語の課題はあるものの、他国にも本事業の取組を発信していただきたいと感じました。

また、ご報告で触れられていた課題のうち、特に「やり抜く力」に関する点に強い関心を持ちました。今後、長野県がこの課題をどのように解決していくのか、支援体制を整え、生徒がやり抜く力を育成していくのか、注目しております。これは非認知能力に関わるものであり、近年、現代の子供たちにやり抜く力が弱くなってきていることも課題の一つとなっています。今後、長野県がどのように取り組んでいくのか、引き続き注視してまいります。私自身、これらの活動の一端に関わることができたことを光栄に思います。以上です。

【村松座長】

これまでの実践のご報告や、発信の方法に関するご助言、特に「やり抜く力」についてのご指摘をいただき、ありがとうございました。それでは、江幡委員、よろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。これまでの実践の話、そして発信の方法から「やり抜く力」等もご助言いただきました。続きまして、江幡委員、いかがでしょうか。

【江幡委員】

前半のご報告を受け、学校内での学びという基礎学力の重要性は言うまでもありませんが、他校や大学生、地域の企業の方々との交流を通じて、学校内だけでは得られない知見に触れる機会が設けられていること、そのようなサイクルが継続的に機能することの重要性を強く認識いたしました。また、後半で述べられたこれまでの活動の成果と課題についてですが、社会人になっても同様の課題が多く見受けられます。知識として理解することはある程度可能ですが、その先の「ゼロイチ（ゼロから1を創り出す）」や、持続的に行動する力、最初の一步を踏み出す力といった点は、企業が求める人材像であると同時に、社会人においても不足しがちな力であるのが現状です。したがって、これらの課題に対しては、引き続き社会活動への参加を促すなど、生徒の活動を後押しする工夫をなさると良いのではと考えます。必ずしも新たにプロジェクトを立ち上げる必要はなく、地域の活動に自ら身を置く時間を持つことで、自身が何に貢献できているのか、何ができるのかを考える契機となるのではないのでしょうか。また、前回の会議でも話題となった卒業生との交流について、各校の卒業生が現在どのような活動をしており、どのように成長しているのかを知るためのインタビューや情報があれば、現役高校生にとってとても参考になると思われました。以上です。

【村松座長】

前に進む力や新たなものを創出する力、そして持続力は、企業においても求められる重要な資質・能力であるとのことご指摘をいただき、ありがとうございます。また、卒業生の追跡や交流に関するご提案もいただきました。それでは、続いて佐藤委員、お願いいたします。

【佐藤委員】

高校の先生方による実践は多岐にわたり、取組の多様さや広がりを感じました。高校生にとっても刺激的で、意欲を喚起する取組であったのではないかと感じております。その中で、特に印象に残った取組が幾つかありました。

一つは、伊那北高校におけるコラボ授業です。教科の見方・考え方を一つのツールとして活用し、多様な視点から探究を深めていく実践は、様々な見方や考え方を働かせながら学びを深める点で、非常に優れた取組であると感じました。

どうしても教科の縦割りでの指導が避けられない場面もあるとは思いますが、私たちは日常生活の中で、特定の時間ごとに一つの教科の見方や考え方だけを用いて生きているわけではありません。日頃から多様な見方・考え方をを用いて生活していることを踏まえると、見方・考え方を可能な限り教科横断的に活用し、教科で習得した学びを探究に生かしていくことで、よりオーセンティック（本物の）な学びにつながっていくのではないかと考えます。その点で、大変意義深い取組であると感じました。

また、上田高校では生成AIを活用した実践が行われたとのことですが、私自身も県内で高校生を対象に生成AIに関する講義や講座を行う機会があります。その中で、生成AIの活用が今後前提となっていく一方で、例えばハルシネーションやエコーチェンバー、フィルターバブルといっ

た概念については、高校生の理解が十分でない状況も見受けられ、危惧しております。そのため、こうした内容についても生徒が積極的に学ぶことが非常に重要であると考えます。

全体として、探究を重視した取組は大変素晴らしいものだと感じました。一方で、今後の課題として、取組の整理や表現の在り方について一つ提案を申し上げたいと思います。探究の取組についてはよく理解できましたが、「個別最適な学習環境」という観点が、もう一步明確に示されてもよいのではないかと感じました。

探究には一斉探究やグループ探究、個人探究など様々な形態がありますが、「個別最適な学び」という観点からすると、中心となるのは個人探究であると考えられます。本日は時間の制約もあり、各校の先生方からは全体像についてのご発表が中心であったと思いますが、生徒一人一人の学びに着目した場合、そこには必ず多様性があり、それぞれに葛藤やリフレクション、選択や決定の過程があったはずです。そうした一人一人の葛藤や学びの過程が見えてくることで、どの部分で個別化が図られ、どのように個性が発揮されていたのか、また、そのために実践上どのような工夫やシステム化が行われたのかが明らかになり、「個別最適な学習環境の構築」へとつながっていくのではないかと感じました。今後は、可能な限り「個別最適な」という視点で整理していくことが有効ではないかと考えます。

私からは以上です。本日はありがとうございました。

【村松座長】

教科の見方、考え方をどのように絡めてどのように進めていくか、生成AIについても、基礎的な部分の対応が必要ではないか。そして個別最適な学習についての対応、検討についてもご助言いただきました。では、続きまして杉浦委員、お願いします。

【杉浦委員】

皆様のご発表を拝聴し、長野県の取組が非常に進化していることに感銘を受けました。2022年度に探究が制度化される以前から、各学校で多様な取組が積み重ねられてきたことがうかがえ、日々多くの学校を訪問する中でも、長野県の実践は群を抜いていると感じます。

このような場で、各校の取組と県教育委員会全体の狙いが相互に共有されていること自体が大変意義深いと考えます。私なりに整理しますと、まず学校ごとに多様な取組が展開されている段階があり、次にそれらの取組が共有され、さらに効果が定量的に調査されている段階へと進んでいると感じました。このようにしてレベルが上がっていくのだと思いますが、重要なのは、各校が大きな目的に対する帰属意識を持ちながら、学校ごとに個性を活かして取組を進めている状態です。これが、公立高校において、県教育委員会と各校の関係性の中でどのように構築できるかが、極めて重要な課題であると考えます。これらの取組を目にし、さらに素晴らしい景色として想像することができたのが本日の会議でした。

大きな目的への帰属意識をそれぞれが持つということは、各校ごとの対話があり、個性を活かした個別の学びの目的や学校の教育目標があるのだと思いますが、長野県全体としての大きな枠組みやコンセンサス、すなわち合意形成をどのように図るかについては、やはり対話なくしては

実現できないと考えます。大きな目的への帰属意識を醸成するためには、各校ごとの対話や合意形成が不可欠であり、発表だけでなく対話の機会をいかに設けるかが重要であると感じました。

例えば今回、実施機関からの報告の中で、様々な行事や施策が実施されていますが、それらを全体の中でフェーズごとにマッピングすることができると思います。例えば「これはパラダイムシフト行事である」「これはリアリティ・ショックイベントである」といったように、県内で共通言語として語られるようになれば、先生方が異動により他校へ赴任された場合でも、これらの共通言語を通じて長野県全体の学びの質がボトムアップしていくことにつながるのではないかと考えます。3つの柱や11の資質・能力といった枠組みの中で、各取組がどのコンピテンシーや教養に資するものかを明確にしつつも、目的に縛られすぎて学びの偶発性が失われないよう配慮しながら、こうして大きなうねりを皆で創り出していくことが、連帯感の醸成にもつながると感じました。

加えて、学校ごとの特徴づけについても重要だと考えます。例えば「県ヶ丘といえば探究」という言葉がありました。この言葉を受けて思い出したのは、アメリカのいわゆる公立学校、スクールディストリクトと言いますが、その学区の中に「マグネットスクール」という考え方です。何百校といった一つのスクールディストリクトの中に学校が存在しますが、それぞれの学校は個別に運営されています。そのスクールディストリクト、つまり教育委員会の中で、「この学校とこの学校はグローバルスタディーズに強い学校」「この学校とこの学校はダイバーシティ&インクルージョンに強い学校」といった形で、ある程度特徴付けがなされています。当然ながら、その学校には予算も配分され、そうした取組の推進が図られています。勤務する先生方も「今自分はここにおいて、この学校はダイバーシティ&インクルージョンに強いのだ」と意識しながら日々の実践をされています。もちろん主体は生徒であり、「グローバルを強めればそれだけやればいい」ということではありません。1人ひとりに対して最高の学びを提供することが大切ですが、一方で、学校ごとに個性があることで、先生方が向ける力や取組の方向性が明確になる側面もあるのではないかと感じました。各校の個性が明確になることで、教員や生徒の意識や取組の方向性が定まりやすくなるのではないかと思います。教育委員会と各学校の位置付けや役割についても整理していくようなことも今後のあり方として考えられるのではないかと思います。

私からは以上です。本日は貴重なご発表をいただき、ありがとうございました。

【村松座長】

ここまでの取組のステップについて、整理をいただきました。また、大きな目的を目指した合意形成や、対話の必要性についても、極めて重要な点であると感じております。さらに、フェーズごとのマッピングに関して、最後にご指摘いただいた特徴付けについても、次の課題として、今後ぜひ検討していきたいと考えます。

続きまして、カリキュラムアドバイザーの小村様、よろしく願いいたします。

【小村アドバイザー】

ここまで皆様から大変充実したコメントをいただいております。最後となると話すことが少なくなってしまう面もありますが、私自身、まず感じたのは、長野県の取組が本当に素晴らしいという

ことです。

私自身もそのように感じておりますが、他県で委員などを務める中でも、長野県の取組が話題に上ることが多く、全国的にも認知が広がってきていると感じています。

その上で、二点ほどコメントを申し上げたいと思います。

一つ目は、次のフェーズに向けて、先日、文部科学省が発表した「ネクストハイスクール構想」と、今後どのように連携していくかという点です。現在、どの自治体においても、ネクストハイスクールにおける3年間3,000億円の予算をどのように活用するかについて、検討が進められている状況にあると承知しております。

ご承知のとおり、ネクストハイスクール構想の内容は、遠隔教育や理数系人材育成、学校間連携など、まさに長野県がWWL事業で取り組んできた内容を発展させるものであり、加えて、これまで十分に力を入れてこられなかったアドバンスト・エッセンシャル・ワーカーの育成を強化する機会にもなり得るのではないかと考えております。

ネクストハイスクール構想には指定校の要件が定められる側面もあり、この場では発言しにくい点もあるかと思いますが、差し支えない範囲で構いませんので、ぜひ次年度以降、このネクストハイスクール構想をどのように活用していくお考えなのか、お聞かせいただければと思います。

二点目は、AI活用に関する点です。実は私、昨日まで、世界トップレベルのAI学会とされる「トリプルAI」という国際学会に参加しており、特に教育に特化したシンポジウムであるEAAIにも参加していました。

その中で感じたことのひとつが、AIリテラシー教育の重要性です。ご承知のとおり、近年、一部のデジタル先進国では15歳未満のSNS利用を制限する動きなども見られますが、教育とSNSは別の議論であるとしても、デジタル全体を後退させるのではないかという懸念もあるかと思いますが、しかし、実際に学会に参加してみると、AIリテラシー教育については、各国で引き続き様々な実践が行われていることが分かりました。

AIは、直接的に使う場面だけでなく、最近ではGoogleの検索機能などにも組み込まれており、目に見えないところでも急速に浸透しています。そのため、AIリテラシー教育が必要であるという認識は各国で共有されており、日本においても学習指導要領の改訂の中で一部議論は進められていますが、改めて非常に重要な点であると感じました。

その上で、先ほどAIの使い方に関する研修等のお話もありましたが、私の印象としては、日本のAI教育はやや技術的な側面、すなわち使い方に重点が置かれている傾向があるように感じています。一方で、諸外国では、倫理や社会的責任といった観点をかなり重視して取り入れている例が多く見られました。

技術的な側面と倫理的・社会的な側面を別々に扱うのではなく、セットで扱うことが効果的であるという発表もありましたが、その理由として、AIは単なる便利なツールとしてそのまま使うのではなく、批判的に理解した上で活用していくことが重要である、という考え方が背景にあるのだと感じました。

また、近年、AIによって思考を外部化してしまう、いわゆるオフローディングといった言葉も使われるようになっていますが、例えばシンガポールでは、AIを使う前に自ら試行錯誤する「ティンカリング・ビフォー・AI」という考え方を、シンガポール国立教育研究所が提唱しています。

学習のための AI の使い方は、ビジネスにおける AI 活用とはまた異なる側面があると思いますので、この点については、今後も皆で議論しながら作り上げていく必要がある分野だと感じています。ぜひ、長野県においても、様々な実践が生まれていくことを期待しております。以上です。

【村松座長】

ネクストハイスクール構想への接続や、今後の次のステップに関するお話、また後半でいただきました AI リテラシーに関するご指摘について、いずれも非常に重要な点をご提示いただき、ありがとうございました。

ここまで、運営指導委員の皆様、ならびにカリキュラムアドバイザーの皆様から、多くのご助言をいただき、誠にありがとうございました。

【村松座長】

いただいたお話を踏まえまして、私の方からも少しお話しさせていただければと思います。

まず、本日は素晴らしいご発表をいただき、高校の先生方、ありがとうございました。お話を伺いながら、資料として整理させていただきましたが、テクノロジーを活用した学びや、学校の枠を超えたオンライン授業など、様々なタイプの取組が見られました。

また、海外を含む多様な国々とのグローバルな交流や研修が行われている一方で、地域に根ざした探究活動やミニ探究といった取組もあり、多様な知見が示された実践発表であったと感じています。先ほど委員の皆様からもお話がありましたが、今回の発表からは、各校において年々積み重ねられてきた成果が強く感じられました。

さらに、本コンソーシアム事業について、事務局から前半・後半に分けてご説明いただきましたが、今年度ここまでの様々な取組の成果が、生徒の姿として現れてきていることが確認できたと感じています。

特に成長が著しかった点として、地域に根ざした学びや、新しい価値や社会を創造する力、課題発見力といった点が挙げられます。これらは、今後改訂が進められている学習指導要領において、次の教育の中で大切にしていけるべき視点と重なるものであり、本事業の取組がまさにそこに焦点を当ててきたのではないかと感じました。

今後の方向性についても、先ほど事務局からご説明いただいたとおり、次のステップに向けた様々な検討が進められているものと受け止めております。

本事業の成果を、これまでの取組にとどめることなく、どのように次につなげ、さらに発展させていくかが、今後の大きな課題であると考えます。委員の皆様からも貴重なご意見をいただきましたが、成果を発信していくことや交流の充実、さらには卒業生との交流など、今後も様々な形で情報発信や情報共有を広げていくことが重要であると感じました。

また、学びの在り方としてご指摘のあった、教科の見方・考え方を軸に探究へとつなげていくことは、往還的な学びとして極めて重要であり、教科横断的な取組が探究の質を高め、さらに探究での学びが教科の学習にも還元されていくような関係性を築いていくことが必要であると思いました。加えて、個別最適な学習についても、生徒一人一人の学びの姿に着目し、個々の学びがより深まるよう、今後も引き続き取り上げていくことが重要であると感じました。

また、佐藤委員ならびにカリキュラムアドバイザーからご指摘のあった生成AIの活用については、特にリテラシーの観点が重要であるということです。大学生の様子を見ても、生成AIは既に日常的に活用されており、高校生においても同様の状況が広がっていると考えられます。そうした中で、正しい理解のもとで活用できるよう、リテラシー教育を重視していくことが不可欠であると改めて感じました。

さらに、杉浦委員からご指摘いただいたとおり、合意形成や対話の重要性についても、私自身強く同意するところです。オンラインによる取組は利便性や効率性の面で有効である一方、根幹となる部分については、対面を含めた対話の中でじっくりと議論していくことが必要であると考えます。多忙な状況や広い県域といった課題はありますが、こうした対話がうまく機能することで、継続的な取組へとつながっていくのではないかと思います。

また、学校ごとの特色や特徴付けについても、それぞれの学校で積み重ねられている取組を整理し、共有していくことが今後重要になってくるのだと感じました。

ネクストハイスクール構想については、先ほどもお話がありましたが、DXハイスクールの取組事例も含め、こうした仕組みをてこにしながら、個々の取組にとどまらず、プラットフォームやネットワークを通じて広げていくことが重要であると考えます。

さらに、現在議論が進められている学習指導要領の骨格として示されている「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」、そして何よりも、子供たちが自ら学び、自分の人生を主体的に切り拓いていくという方向性は、長野県が本事業を通して目指してきた3つの資質・能力を備えた生徒像や各取組と非常に強く結びついていると感じました。社会の創造者として、自分らしさを大切にしながら、グローバルな視野と地域に根ざした視点の双方を持って学んでいくこと、そして実行可能な力を高めていくことは、今後ますます重要になっていくと考えます。

そのためにも、グローバルな多様な他者と学ぶ機会を確保することは、非常に意義深い点であると感じました。

こうした点を踏まえますと、長野県がこれまで取り組んできた探究を中心とした学びの方向性については、今後も自信を持って進めていくべきであり、県内にとどまらず、他地域や海外も含めて積極的に発信していく価値があると考えます。

また、これまで構築してきたWWLのALネットワークやプラットフォームについても、充実して活用できる段階に来ていると感じています。一方で、こうしたネットワークやプラットフォームは、構築した後にいかに持続的に運用していくかが大きな課題であり、熱量を維持しながら継続していくための工夫が今後求められると考えます。

探究の取組についても、特別な活動にとどまらず、最終的には教科の授業へと還元され、教科横断的な学びや個別最適な学習が日常の授業の中に根付いていくことで、より実感のある学びへとつながっていくのではないかと思います。

さらに、持続可能な仕組みづくりのためには、情報共有と併せて教員研修の充実や、予算面の検討も重要な要素であると考えます。加えて、長野県の取組が全国的にも認知されつつある今こそ、他の都道府県との事務局レベルでの情報共有や交流を仕組みとして進めていくことで、取組の広がりや価値がさらに高まっていくのではないかと感じました。

最後に、各校の取組、そしてそれらを先導してきた事務局の皆様のご尽力に対し、深く敬意を表したいと思います。私の方からは以上です。

次の段階にむけ、いくつかの課題を残したものの、教育委員会事務局を中心に、各校の皆様のご尽力により、非常に素晴らしい成果が上げられた事業であったと感じております。引き続き、よろしく願いいたします。

それでは、運営につきまして、事務局の方にお返ししたいと思います。

【実施機関】

村松様、スムーズな議事進行をいただき、誠にありがとうございました。先ほど小村アドバイザーからいただいたご質問について、お答えいたします。

まず、一点目のネクストハイスクール構想への接続についてですが、現在、事務局全体で検討を進めているところです。

WWL事業との接続という観点では、あくまで個人的な見解ではありますが、例えばWWLにおける遠隔教育やオンラインの活用については、仮にネクストハイスクール構想がなかったとしても、来年度以降、実証研究の中で十分に活用していくことが可能であると考えております。ゼロからのスタートではなく、WWLでの取組が一つのヒント、あるいは材料となって、今後の取組が進んでいくものと捉えています。

また、ネクストハイスクール構想の一つの視点として、パイロット校の取組を広げ、普及していくという点があるかと思いますが、その際にも、AL ネットワークにおける成果や経験は大いに参考になると考えています。一方で、ネットワークを構築し、持続していくことの難しさや課題も見えてきました。

こうした点すべてが、今後の普及や広がりには資するものになるのではないかと考えており、現状、そのように捉えております。

続いて、二点目の生成 AI の取組についてです。生成 AI に関しては、リテラシーの観点から、教育の分野においても大変重要であると認識しています。県教育委員会では、本課において今年度、生成 AI の活用に関する参考資料を作成し、各校へ周知したところです。今後は、教員研修の中にもこうした観点を取り入れながら、小村様からご指摘いただいた点を踏まえ、生徒が生成 AI を正しく理解し、学習の支援として効果的に活用できるような機会を、教員と共に持つことができれば良いと考えております。貴重なご助言をいただき、誠にありがとうございました。

閉会行事

- ・ 学びの改革支援課 一色参事兼課長から御礼の挨拶
- ・ 事務連絡（事業担当者連絡会）

令和7年度長野県 WVL コンソーシアム構築支援事業

「個別最適な学習環境の構築に向けた研究開発事業」検証会議

期日 令和8年2月27日（金）13時から17時まで

場所 教育委員室（長野県庁本館棟8階）

参加者

○検証委員 清水 唯一朗 氏（慶應義塾大学総合政策学部 教授）

○実施機関 長野県教育委員会 学びの改革支援課 教育幹兼高校教育指導係長 徳永 佳代
（担当）主任指導主事 高野 芙美

内容

1 検証資料説明（実施機関）

2 事業推進に係る検証及び評価と課題について指導・助言（清水検証委員）

(1) 今年度の取組について

- ・従前の取組の質的向上が図られている。今後は成果を整理し、事業終了後の次段階へ確実につなげることが重要。
- ・特に、事業終了後も成果が活用され続けるよう、ポータルサイトの運用体制、コンテンツ蓄積の仕組み、人事異動を前提とした知見継承などの基盤整理が必要。
- ・ネットワークの拡大に加え、教員研修を「探究」として設計・実施されていることは新たな柱として評価できる。（受講中心の研修から、検証・探究を重視する研修への転換）
- ・ポータルサイトは、ユーザーインターフェイス（UI）改善が進み、高校生が利用しやすい形に改善されている。
- ・ポータルサイトの一元化（ワンストップ化）により、情報の信頼性が確保されるとともに、各校の取組および成果が集約され共有されることで、地理的条件や学校規模の違いに関わらず、県内全域の高等学校生徒に対する学習機会の拡充および効果波及が見られる。

(2) 3年間の事業取組

- ・当初は抽象的で捉えにくかった「新たな社会を創造する力」について、「社会の創造者として生きる力」「自分らしく生きる力」「グローバルマインドセット」といった、現場で共有・活用しやすい枠組みに整理するとともに、さらに11項目まで具体化した点は、3年間の取組の中でも大きな成果である。
- ・これらの取組は、育成を目指す力を明確化する「創造」の側面と、学びを支えるネットワークやプラットフォームを整える「基盤」の側面という、二つの軸から整理できる。
- ・学校間ネットワークの構築と、インプット→方法→アウトプットの流れを意識した教材・講座群の整備により、教員・生徒の双方にとって「何を、どのように活用すればよいか」が分かりやすい指針として可視化された点が評価できる。

(3) 事業の成果

- ・インプット・方法・アウトプットの流れを意識したカリキュラムやコンテンツが、報告会、ミニ探究、アカデミック・プレゼンテーション、小論文等の講座として体系的に整備され、生徒の学びや教員の指導に活用しやすい形で充実した点が評価できる。
- ・学校間ネットワークが実質的に機能し、取組の共有や相互刺激が生まれていることに加え、こうした横連携が教員異動後も継続し得る土台となっている。
- ・オンライン上のチャット等を通じて教員コミュニティが形成され、約 55 名が参加するネットワークが構築されたことは、今後の実践や知見共有を支える重要な資産になる。
- ・JICA や KDDI 等との外部連携をはじめ、外部人材との協働や対話を重視した深い学びの実践が進展している。
- ・教員研修を「受ける研修」から「探究する研修」へ転換する取組や、教育課程研究協議会での研究等への広がりなど、事業の枠を超えた波及効果（プログラム外への広がり）も評価できる。

(4) 今後に向けた課題

- ・ポータルサイトの更新・運用体制（事業終了後も更新が止まらない仕組み）をどう構築するかは今後の課題。
- ・ポータルサイトのコンテンツ充実に向け、内容の拡充・更新がよりスムーズにできるよう運用設計を見直すことも必要。
- ・県の支援（予算）と公開ルール（例：県費で実施した講座は録画して共有）を紐付けるなど、継続的にコンテンツが蓄積される仕組みづくりの提案。
- ・生徒アンケートでは地域貢献の実感が高まっている一方で、地域との「具体的な協働」までには至りにくいという課題について、企業側の課題意識と結び付くテーマ設定や、地域連携を担うコーディネーターを対象とした研修等も必要。

(5) 探究力アセスメント（生徒対象アンケート）分析

- ・「新たな社会を創造する力」を 11 項目に具体化したことにより、評価や指導において教員間で共通理解を持つことが可能となり、抽象的になりがちであった探究の到達目標を、現場で共有・活用できる共通言語として機能している。
- ・遠隔教育配信センターの整備については、学習機会の拡充に対する期待が示される一方で、配信後に生徒の理解度をどのようにフォローするか、また次の学びへどのようにつなげていくかといった学習支援の設計が重要である。
- ・県教委の事業担当交代や教員異動を前提とした知見継承の在り方について、形式的な引継ぎに加え、チャット等のインフォーマルな教員ネットワークも含めて、どのように継続性を担保していくか課題。
- ・これまで構築されてきたネットワークについては、英語、探究、情報、DX 等の分野別に整理・細分化することで、各分野が自走的に活動していく可能性がある。

3 運営指導委員会・検証会議の記録

- ・ AI 活用に関する研修にとどまらず、SNS を含む倫理的な観点を軸とした研修についても今後の教員研修の重要なテーマである。

(6) 事業研究の成果の活用方法（提案と方向性）

- ・ ポータルサイトについて、好事例を共有する「活用講座」を設けることで、各校・各教員が一から始めたり工夫したりする負担を軽減し、実践の横展開を促進することができる。
- ・ 卒業生や先輩による経験を「斜め上のロールモデル」として位置付け、その内容を録画・編集してポータルサイトに蓄積することで、在校生への学習支援に活用するとともに、定性的な調査データとしても活用できる。
- ・ 地域連携については、企業等に加え、県立図書館等とも協働することで、高校生の探究活動を支える新たな連携の広がりが期待される。
- ・ 進路や学部選択に関する情報をさらに充実させ、学校や地域による情報格差の縮小につながるコンテンツを拡げていくことが期待される。
- ・ 英語コミュニケーション力向上にむけた実証的な取組として、駅で高校生が海外からの来訪者と関わる「コンシェルジュ」的な学習・交流機会を設けるなど、体験型の学びにつながる機会の創出も検討されたい。

3 実施機関から御礼の挨拶

信州 WWL コンソーシアム

AL ネットワーク参画校

(令和8年3月現在)

【管理機関】

長野県教育委員会

【カリキュラム拠点校】

上田高等学校

【共同実施校】

松本県ヶ丘高等学校

【連携校】

須坂高等学校

長野高等学校

長野西高等学校

篠ノ井高等学校

屋代高等学校

上田染谷丘高等学校

野沢北高等学校

諏訪清陵高等学校

諏訪二葉高等学校

伊那北高等学校

伊那弥生ヶ丘高等学校

飯田高等学校

飯田風越高等学校

蘇南高等学校

松本深志高等学校

長野日本大学高等学校

※AL(アドバンス・ラーニング)ネットワーク:

県内外の機関と連携し、県内の高校生に単独校では得られない高度な学びを提供するためのネットワーク

実施機関

長野県教育委員会事務局学びの改革支援課

〒380-8570 長野県長野市大字南長野字幅下 692-2

TEL 026-235-7435 FAX 026-235-7495

E-mail: kyogaku-koko@pref.nagano.lg.jp